

奈良市埋蔵文化財調査年報

令和2(2020)年度



奈良市教育委員会

2023

奈良市埋蔵文化財調査年報

令和2(2020)年度

奈良市教育委員会

2023



ウワナベ古墳 東発掘区全景（北から） ウワナベ古墳の調査 UN 第2次（本文 22～39頁）



佐紀古墳群東群とウワナベ古墳（北西から）ウワナベ古墳の調査 UN 第2次（本文22～39頁）



ウワナベ古墳 葺石検出状態（東発掘区：東から）



ウワナベ古墳 須恵器出土状態（東発掘区：東から）



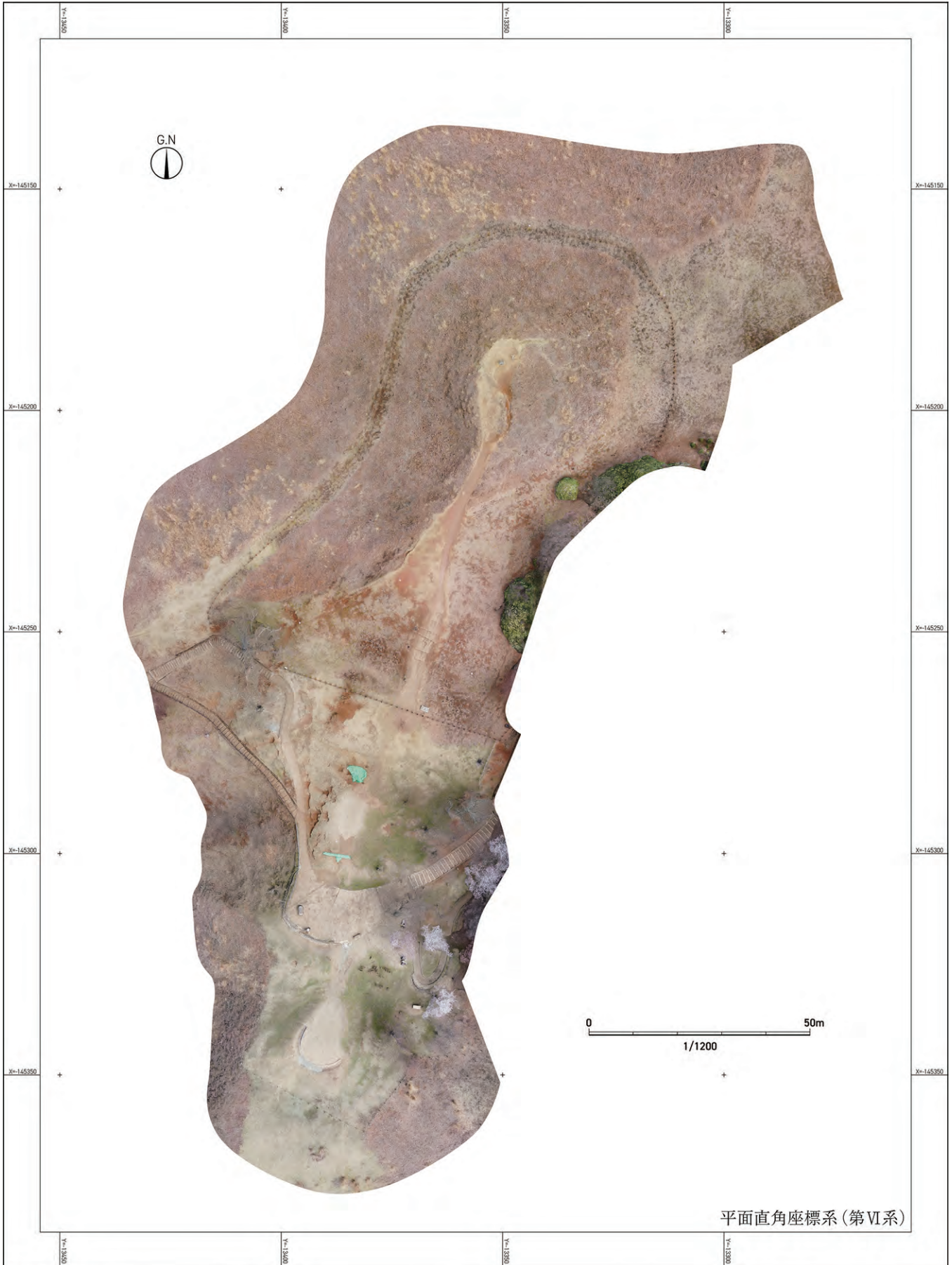
ウワナベ古墳 火炎構造検出状態（東発掘区：南から）



鶯塚古墳遠景（北東から） 研究報告1（本文 57 ～ 68 頁）



鶯塚古墳遠景（南西から） 研究報告1（本文 57 ～ 68 頁）



平面直角座標系(第VI系)

鶯塚古墳平面オルソ画像 研究報告1 (本文 57 ~ 68 頁)



平氏盛隆の頃の腰刀と杏葉轡 研究報告3 (本文 77 ~ 89)



SD第23次調査土坑墓SX71 出土腰刀1 (指表)



SD第23次調査土坑墓SX71 出土腰刀1 (指裏)



SD第23次調査土坑墓SX71 出土腰刀2 (指表)



SD第23次調査土坑墓SX71 出土腰刀2 (指裏)

平氏盛隆の頃の腰刀 研究報告3 (本文 77 ~ 89)

例 言

1. 本書は、令和2(2020)年度に奈良市教育委員会が実施した埋蔵文化財に関する各事業の概要と、研究成果を収録したものである。

ただし、令和2年度に実施した調査のうち平城京跡第747・748次調査と赤田横穴墓群第5・6次調査については、次年度以降に報告の予定であるため本書には収録していない。

また、富雄丸山古墳第4次調査の内容は令和4年度刊行の「富雄丸山古墳 発掘調査報告書1 ー第1～5次調査ー」(2022)で報告したため、本書には収録していない。

2. 令和2(2020)年度～令和4(2022)年度の埋蔵文化財に関する各事業は下記の体制で実施した。

奈良市教育委員会事務局 教育部

文化財課

課 長 松浦五輪美

記念物係

係 長 池田裕英

主 務 原田香織 永野智子(令和2年度は活用係主務)

再任用職員 篠原豊一

埋蔵文化財調査センター

所 長 鐘方正樹

所長補佐 中島和彦

管理係

係 長 森田孝一(令和3年度から) 奥和田佳邦(令和2年度)

主 務 山前智敬

再任用職員 松村健次(令和2・3年度は主任)

調査係

係 長 久保邦江(令和3年度から、令和2年度は記念物係主任)

主 任 安井宣也

主 務 吉田朋史・菊井佳弥(令和4年度から)

主 事 鈴木(高岡)桃子

技 術 員 三澤朋未(令和3年度)

再任用職員 秋山成人(令和2・3年度は主任)

活用係

係 長 原田憲二郎

主 事 村瀬陸(令和2年度は調査係)

技 術 員 山口等悟(令和4年度から)

再任用職員 森下浩行(令和2年度は調査係長)

3. 発掘調査、出土遺物整理、保存活用等の各事業に関しては、奈良県、奈良県立橿原考古学研究所、独立行政法人奈良文化財研究所、奈良市文化財保護審議委員会などの関係諸機関よりご指導とご協力を賜った。ここに記して謝意を表する。

4. 各発掘調査の次数は、奈良市教育委員会が実施した調査に付した遺跡ごとの通算次数となっている。遺跡の略記号は下記のとおりである。

H J 平城京跡 D A 史跡大安寺旧境内附石橋瓦窯跡(以下、附石橋瓦窯跡を省略)
A D 赤田横穴墓群 U N ウワナベ古墳 T O M 富雄丸山古墳

5. 本書で使用した遺構番号は、一部を除いて調査ごとに付した仮番号である。遺構等の番号の前には、その種類に応じて以下の番号を付した。

S A (柱列・塀) S B (掘立柱建物) S D (溝・濠・溝状遺構・暗渠) S E (井戸)
S F (道路) S K (土坑) S X (その他)

また、遺構の大きさの数値は、すべて遺構検出面での計測値である。

6. 本文中で示した過去の調査については、調査次数等の前に下記の略記号を使用して調査機関を表記した。

奈良市教育委員会	—遺跡略記号	次数
独立行政法人奈良文化財研究所(旧奈良国立文化財研究所含む)	—国	次数
奈良県教育委員会 および 奈良県立橿原考古学研究所	—県番号	または調査年

7. 本書で使用した遺物名称・形式・型式は、一部を除き下記の刊行物に準拠した。

奈良時代 軒 瓦：『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』奈良市教育委員会 1996
土 器：『平城宮発掘調査報告書VII』奈良国立文化財研究所 1976
『平城宮発掘調査報告書XI』奈良国立文化財研究所 1982
古墳時代 須恵器：田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981
弥生時代 土 器：『奈良県の弥生土器集成』奈良県立橿原考古学研究所 2003

8. 発掘区位置図については、奈良市発行の「大和都市計画図」(1/2,500)を、また調査地位置図については、国土地理院発行の1/25,000の地形図を利用した。

9. 本文中において示した位置の表示値は、平面直角座標系第VI系(世界測地系)の数値である。なお、座標値の表・図中の標記については単位(m)を省略した。

10. この報告に関する調査記録・出土遺物は、奈良市埋蔵文化財調査センターで保管している。

11. 執筆は、当該調査と遺物整理を担当した埋蔵文化財調査センター職員等が分担し、文責は各調査報告の文末に記した。

12. 本書の執筆および編集は令和4年度に行い、埋蔵文化財調査センター所長鐘方正樹、所長補佐中島和彦の助言を得て、久保邦江が編集を担当した。

表紙写真：「ウワナベ古墳航空写真」(南東から)

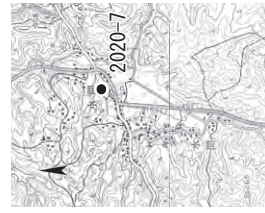
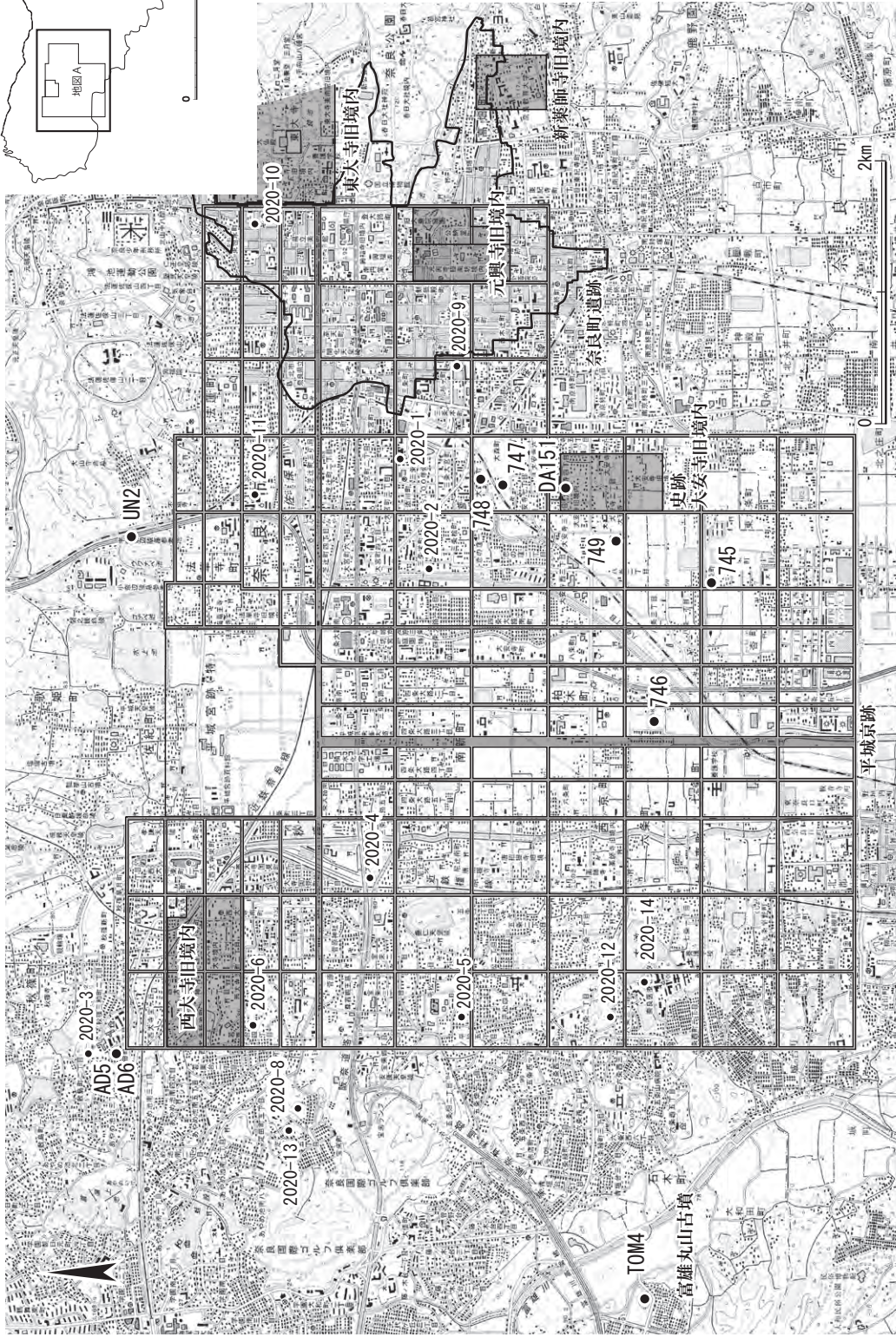
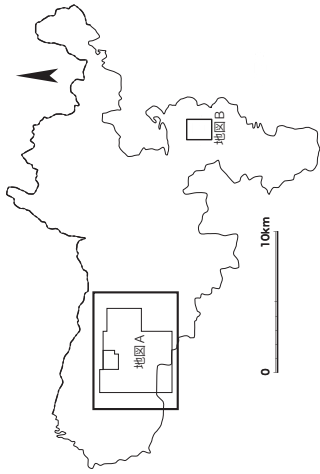
令和2（2020）年度 奈良市教育委員会実施 埋蔵文化財発掘調査一覧

調査次数	遺跡名	調査地	調査期間	調査面積 ㎡	調査 担当者	調査原因・事業内容/ 届出者・申請者等	事業 区分	届出等 受理番号	
1	HJ745	平城京跡（左-8-3-1・東二坊大路）	八条町 848-1 の一部 856 の1部他	2020.4.6～ 2020.4.20	158	村瀬・高岡	宅地造成/有限会社 若狭住宅	原因者	R1.3396
2	HJ746	平城京跡（左-7-1-7）	柏木町 262、263-2、283	2020.5.7～ 2020.11.30	2,336	安井・吉田・高岡	仮称子どもセンター建設事業/奈良市長	公共	R1.3506
3	HJ747	平城京跡（左-5-4-7）	大安寺七丁目 671-1、675-13、-14	2020.6.8～ 2020.7.3	131	村瀬・高岡	JR 奈良駅南特定土地区画整理事業/奈良市長	公共	H12.3145
4	HJ748	平城京跡（左-5-4-8）	大森西町 169、170-1、171-3、162-10	2020.10.8～ 2021.2.26	1,251.5	安井	JR 奈良駅南特定土地区画整理事業/奈良市長	公共	H12.3145
5	HJ749	平城京跡（左-6-3-12）	大安寺二丁目 43-1	2021.1.12～ 2021.1.19	100	吉田・高岡	宅地造成/株式会社 やまと不動産	原因者	R1.3193
6	AD 5	赤田横穴墓群	西大寺赤田町一丁目 556-35 他	2020.7.20～ 2020.8.31	202	村瀬・高岡	大和中央道街路整備事業/奈良市長	公共	H24.3045
7	AD 6	赤田横穴墓群	西大寺赤田町一丁目 556-35 他	2021.3.8～ 2021.8.31	757	吉田	大和中央道街路整備事業/奈良市長	公共	H24.3045
8	DA151	史跡大安寺旧境内	大安寺四丁目 1071-1	2020.11.25～ 2020.12.14	78	秋山	既存建物の解体及び新築/個人	緊急	R2.1057
9	UN 2	ウワナベ古墳	法華寺町 1824-1	2020.10.2～ 2020.11.27	63	村瀬	範囲確認調査/奈良市長	緊急	R2.3533
10	TOM 4	富雄丸山古墳	丸山一丁目 1079-239	2020.12.21～ 2021.2.19	260	村瀬	範囲確認調査/奈良市長	緊急	R2文保.1131.

令和2（2020）年度 奈良市教育委員会実施 小規模・試掘調査一覧

次数	遺跡名	調査地	調査期間	調査面積 (㎡)	事業者	事業内容	事業区分	届出受理 番号
2020-1	平城京跡（左-4-4-9）	三条宮前町2-6	2020.5.23・24	20.8	野村不動産株式会社	共同住宅新築	原因者	R1.3517
調査結果：奈良時代の柱穴・溝を検出。元興寺文化財研究所により本調査を実施。								
2020-2	平城京跡（左-4-3-3・6）	三条松町 642-1、643番-1、644番	2020.5.11	37.5	個人	宅地造成	原因者	R1.3530
調査結果：遺構面は後世の河川により削平。工事着手。								
2020-3	古墳隣接地・遺物散布地	敷島町二丁目	2020.5.12 ～5.29	150	奈良市長	大和中央道 道路整備	公共	H24.3045
調査結果：遺構は確認されず。工事着手。								
2020-4	平城京跡（右-3-2-11）	尼辻北町 303	2020.5.20	36	近畿日本鉄道株式会社	事務所新築	原因者	R1.3533
調査結果：遺構は確認されず。工事着手。								
2020-5	平城京跡（右-4-4-12）	平松三丁目 26-13	2020.5.25	4	一建設株式会社	分譲住宅新築	原因者	R1.3425
調査結果：奈良時代の整地層・遺物包含層を確認。計画変更し、工事着手								
2020-6	平城京跡（右-2-4-9・二条条間北小路）	若葉台四丁目 269-17、269-21、271-4、272-2の各一部	2020.5.27・28	56	個人	宅地造成	原因者	R1.3529
調査結果：奈良時代の整地層・遺物包含層を確認。計画変更し、工事着手。								
2020-7	遺物散布地	水間町 1080-3、1081番、1085番	2020.8.12	60	社会福祉法人 青葉仁会	社会福祉施設新築	原因者	R2.3077
調査結果：奈良時代の遺構は確認されず。工事着手								
2020-8	菅原遺跡隣接地	疋田町四丁目 143番の一部他	2020.9.10・11	298	三都住建株式会社	宅地造成	原因者	R1.4001
調査結果：奈良時代の遺構を検出。元興寺文化財研究所により本調査を実施。								
2020-9	平城京跡（左-4-5-13・東五坊大路）	杉ヶ町1番地	2020.9.23・24・28	798	大成建設株式会社	地中障害試掘	原因者	R2.3082
調査結果：遺構面・遺構とも確認。届出の内容によって調査必要。								
2020-10	平城京跡（左-2-7-8・16・奈良町遺跡）	東笹鉦町 30番・31番 32番	2020.10.21	11.25	個人	宅地造成	原因者	R2.3165
調査結果：遺構面・遺構残存。基礎掘削は遺構面に至らず工事着手。								
2020-11	平城京跡（左-2-4-1）	法連町 395-1	2021.2.9	10	奈良社会福祉院	社会福祉施設新築	原因者	R2.3353
調査結果：遺構面・遺構残存。設計変更し工事着手。								
2020-12	平城京跡（右6-2-4-11・12）	六条二丁目 1121番、1131番 6、1294番	2021.2.19～22	78	株式会社 HSG	宅地造成	原因者	R2.3368
調査結果：北半部で遺構面・遺構確認。 施工時立会。								
2020-13	菅原遺跡	疋田町五丁目 450番、451番、452番 3、465	2021.3.15	25.5	積水ハウス不動産関西株式会社	宅地造成	原因者	R2.3341
調査結果：遺構なし。工事着手。								
2020-14	平城京跡（右7-4-1）	六条三丁目七条二丁目地内	2021.3.23	15	奈良市長	市道拡幅	公共	R2.3274
調査結果：遺構なし。工事着手。								

※平城京跡に付している（○-○-○-○）は、○京○条○坊○坪の略である。



地図A

地図B

令和2年度(2020)年度 発掘調査位置図 地図A・B (1/50,000)

目次

巻首図版	I～VI
例言・目次	i～v
第1章 令和2(2020)年度 埋蔵文化財発掘調査概要報告	
1. 平城京跡(左京八条三坊一坪・東二坊大路) HJ第745次	3
2. 平城京跡(左京七条一坊七坪)の調査 HJ第746次	6
3. 平城京跡(左京六条三坊十二坪)の調査 HJ第749次	17
4. 史跡大安寺旧境内の調査 DA第151次	20
5. ウワナベ古墳の調査 UN第2次	22
6. 令和2年度実施 遺跡有無確認踏査一覧	40
7. 令和2年度実施 工事立会一覧	40
第2章 令和2(2020)年度 埋蔵文化財保存活用・学習推進事業報告	47
第3章 研究報告	
1. ドローンを用いた鷲塚古墳の3次元測量調査	57
2. 帯解地域の後期古墳 一奈良市山町七ツ塚古墳群測量調査報告一	69
3. 平氏隆盛の頃の腰刀と轡	77

第 1 章 令和 2(2020) 年度 埋蔵文化財発掘調査概要報告

1. 平城京跡（左京八条三坊一坪・東二坊大路）の調査 HJ第745次

事業名	宅地造成	調査期間	令和2年4月6日～4月20日
届出者名	有限会社 若狭住宅	調査面積	158㎡
調査地	八条町 848-1 ほか	調査担当者	村瀬陸・高岡桃子

I はじめに

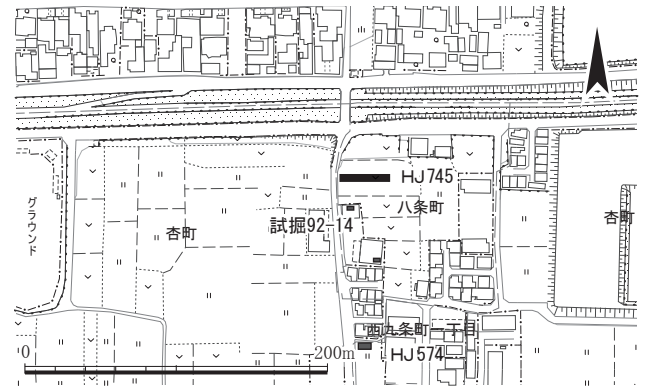
調査地は平城京の条坊復元では左京八条三坊一坪の北西部に位置し、発掘区西半分は東二坊大路にあたと推定される。同坪では、調査地南側で試掘 1992-14 次調査が実施されており、南北溝が検出されている。

また、八条三坊二坪で実施されたHJ第574次調査では、奈良～平安時代前期の掘立柱建物・土坑、平安時代末～室町時代の溝・井戸等が検出されており、なかでも方形区画溝は在地領主の居館に関する遺構と推定されている。

今回の調査は、主として一坪北西部の宅地利用の様相確認と、条坊関連遺構の検出、そして奈良時代以降の土地利用の様相確認を目的として実施した。

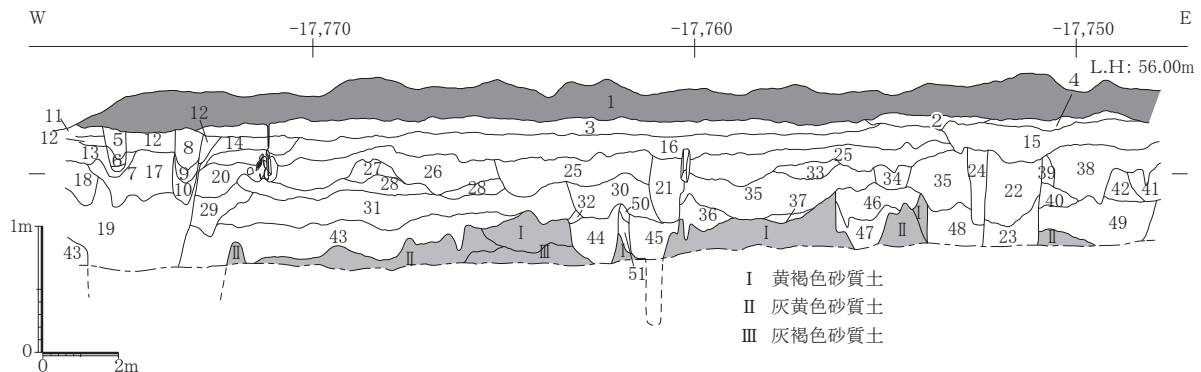
II 基本層序

発掘区の基本層序は、上から耕土が0.25 m、床土0.1 m、河川氾濫時の堆積とみられる茶褐色砂質土・灰色砂



HJ 第745次調査 調査地位置図 (1/5,000)

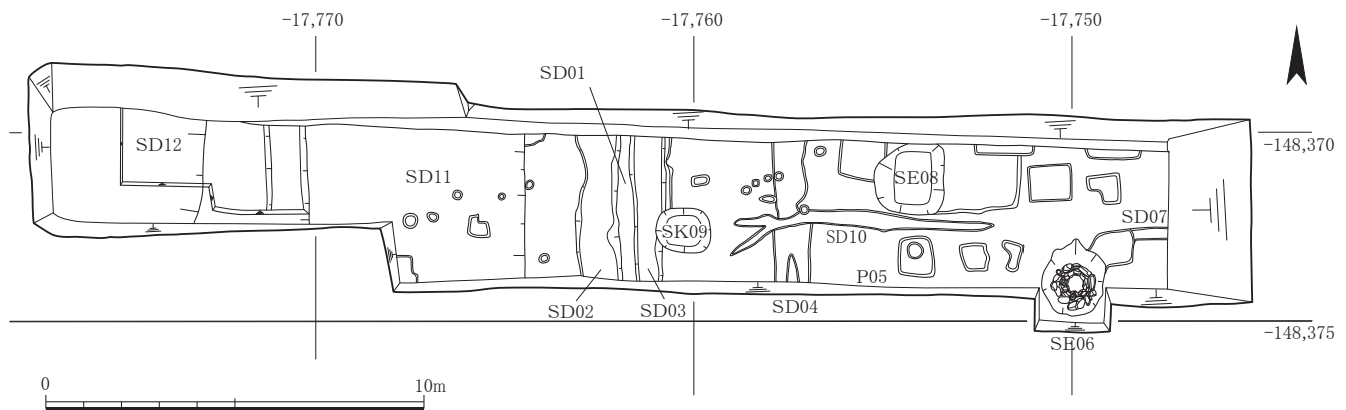
質土が0.5～0.6 mと続き、現地表面下1.0 mで黄褐色砂質土の地山に至る。地山面の標高は西側で約54.4 mで、東側では約54.6 mとなっており、西側が約0.2 mほど低くなっている。遺構検出は地山上面で行った。



- | | | | |
|---------------|---------------------|----------------|--------------|
| 1 黒褐色砂質土 | 14 灰白色砂質土、小礫含む | 27 茶褐色砂質土 | 40 暗灰褐色砂質土 |
| 2 灰黄褐色砂質土 | 15 褐色砂質土、礫含む | 28 灰褐色砂質土、小礫含む | 41 暗灰色粘土質シルト |
| 3 灰白色砂質土、小礫含む | 16 茶褐色砂質土、しまり強い | 29 褐色砂質土 | 42 茶褐色砂質土 |
| 4 褐灰色砂質土 | 17 灰褐色粗粒砂と粘土質シルトの互層 | 30 やや暗めの灰褐色砂質土 | 43 暗灰色砂質土 |
| 5 褐灰色砂質土 | 18 灰褐色粘土質シルト | 31 茶褐色砂質土 | 44 茶褐色砂質土 |
| 6 褐灰色粘土質シルト | 19 灰色粗粒砂 | 32 灰黄褐色砂質土 | 45 暗灰色砂質土 |
| 7 灰褐色砂質土 | 20 灰褐色砂質土、しまり弱い | 33 茶褐色砂質土 | 46 茶褐色砂質土 |
| 8 灰白色砂質土 | 21 灰褐色砂質土、小礫含む | 34 茶褐色粘土質シルト | 47 暗灰色砂質土 |
| 9 灰褐色砂質土、小礫含む | 22 暗灰褐色粘土質シルト | 35 茶褐色砂質土 | 48 暗褐色粘土質シルト |
| 10 褐灰色粘土質シルト | 23 灰色粗粒砂、礫非常に多く含む | 36 暗褐色粘土質シルト | 49 暗灰色粘土質シルト |
| 11 灰褐色砂質土 | 24 灰褐色粘土質シルト | 37 灰褐色粘土質シルト | 50 黄灰色砂質土 |
| 12 褐灰色砂質土 | 25 灰色砂質土、土師器片・礫含む | 38 黄灰色粗粒砂 | 51 灰褐色砂質土 |
| 13 褐色砂質土、鉄分含む | 26 灰褐色砂質土、小礫含む | 39 暗褐色砂質土 | |

(1: 耕土 2~4: 床土 5~7, 8~10, 21, 22~24: 攪乱埋土 11~16, 20, 25~36, 38~42, 49: 河川氾濫時堆積
 17~19: SD 12 埋土 43: SD 11 埋土 44: SD 02 埋土 45: SD 03 埋土 46・47: 柱穴埋土 48: S E08 埋土) 50・51: SD 01 埋土
 I~III: 地山)

HJ第745次調査 北壁土層断面図 (横: 1/200、縦: 1/60)



HJ第745次調査 遺構平面図 (1/200)

III 検出遺構

主に検出した遺構は、奈良～平安時代の溝4条（SD01～04）、柱穴1基（P05）、平安・鎌倉時代の井戸2基（SE06・08）・土坑1基（SK09）、溝3条（SD07・10・11）、鎌倉時代以降の溝1条（SD12）である。

SD01 後述するSD02・03よりも古い南北溝。SD02・03の溝間にやや軟弱な黄灰色・灰褐色砂質土（土層断面50・51層）の埋土を検出した。

SD02・SD03 約3.0m隔てて平行する2条の南北溝として検出した。西側の溝SD02は幅1.2m、深さ0.3mで、東側の溝SD03は幅1.1m、深さ0.8mで東肩が2段掘りとなる。いずれの溝も8～9世紀の遺物を含んでいる。また、SD02・03はSD01（黄灰色・灰褐色砂質土）の埋土上面から掘り込まれており、SD01を掘り直した遺構と想定される。

SD04 幅1.0mの南北溝で、SD01の溝心からの距離は4.2mである。8～9世紀の遺物を含んでおり、SD02・03と同時期と考えられる。溝心の座標はX = -148,371.950 Y = -17,757.500である。

P05 一辺1.0mの方形掘方内に直径0.4mの柱痕が残る。出土遺物は僅かだが、8～9世紀に位置付けられる。P05の東・西側には柱穴がみられず、南北方向の掘立柱列の一部の可能性はある。

SE06 1.6×2.0mの不整形円形を呈する掘方内に外側直径1.0mの石組井戸を設ける。概ね5～6段残存し、深さ1.0mである。石組は掃鉢状になっており、主に河原石を乱石積みで構築する。掘方から11～12世紀の土師器皿、枠内から12世紀中頃の瓦器碗が出土した。

SD07 井戸SE06の北東方向にある素掘溝。幅0.3m、長さ1.0m、深さ0.05mである。

SE08 東西3.9m、南北2m以上の平面方形掘方で、全体を0.4m下げると西側に1.8m四方の落ち込み（深

さ1.6m）を確認した。井戸枠が抜き取られた痕跡と考えられる。13世紀前半の瓦器碗、8世紀の土馬、種類不明の骨などが出土した。

SK09 1.4×1.1mの平面楕円形で、検出面からの深さが0.3mの土坑である。SD03より新しく、13世紀前半の土器類が出土した。

SD10 幅0.4m、長さ6.8m、深さ0.1mの東西溝で、西側は二股に分かれて途切れる。SD07と概ね筋を揃えることから、区画溝として利用された可能性がある。13世紀の土器類が出土した。

SD11 幅12.5m以上、深さ0.2mの南北溝と考えられる。SD11以西では地山が低くなっており、その部分が溝として機能した可能性がある。13世紀の土器類が出土した。

SD12 幅2.2m以上、深さ1.8m以上の南北溝で、重複関係からSD11より新しい。土層断面でみるとかなり上層から切り込んでおり、近世に下る溝である可能性も考えられる。なお、位置関係からみて試掘1992-14次調査で検出した南北溝はこれに続くものと考えられる。

IV 出土遺物

遺物整理箱で10箱分が出土した。内訳は、8～9世紀の土師器・須恵器・黒色土器A類・土馬・軒平瓦(6668C)・丸瓦・平瓦、12～13世紀の土師器・瓦器である。

軒平瓦6668Cは北壁断面図20層から出土している。平城京跡における同型式は左京七条一坊十六坪で1点出土しているのみであり、今回出土したものはそれよりも残存率が高い。出土地点は東二坊大路推定地であり、築地塀の瓦として利用された可能性がある。

V 調査所見

i) 東二坊大路について

東二坊大路については、佐保川旧河道にあたる地点が多く、これまで全体を検出できた例がない。したがって、『平城京条坊総合地図』に基づく推定値から検討する。推

定値によれば調査地での東二坊大路道路心の座標は $X=-148,370$ 、 $Y=-17,768.804$ である。

今回の調査で検出した奈良時代の南北溝 S D 01 は両肩が S D 02、03 で壊されているが、残っている部分の中央を仮に溝心とした場合 $X = -148,371.950$ $Y = -17,761.700$ となる。東二坊大路東側溝と仮定すると、推定道路心からの距離は 7.1 m となり、道路幅は 14.2 m に復元できる。平城京内では他に六条大路の道路幅も 14.2 m (40 大尺) とされている。¹⁾ S D 01 の溝心から 14.2 m の位置では、13 世紀以降の溝 S D 12 があり、奈良時代の遺構は残っていないが、S D 12 が東二坊大路西側溝を踏襲した南北溝である可能性も考えられる。また、S D 01 の東側 4.2 m の位置には奈良時代の溝 S D 04 があり、これを築地塀の雨落溝と考えると整合性がある。

以上の点から、S D 01 を東二坊大路東側溝、S D 04 を築地塀の雨落溝と推定することができる。

ii) 中世の遺構について

今回の調査では 12～13 世紀の遺構を多く検出した。このなかで、SE 06 は出土土器から 11～12 世紀に掘削・利用され、他の遺構よりもやや古い様相を示している。北西側にある SE 08 は 13 世紀前半のものと考えられ、SE 06 との間やや時期幅がある。しかし、その間を限るよう

に S D 10 があり、区画割の溝である可能性も考えられる。前後関係のある別区画であるのか、同一屋敷地内で井戸が推移するのかは不明だが、今後周辺の調査を行うにあたり時期的な前後関係については留意する必要がある。

調査地の南側（HJ 第 574 次調査）でも、同時期中世居館跡が検出されていることや、調査地の小字が「古ヤシキ」であることから、一帯に中世居館跡が広がっていた可能性がある。（村瀬陸・鈴木桃子）

註

1) 奈良文化財研究所 1989 『平城京左京七十五・十六坪発掘調査報告書』



HJ 第 745 次調査 SE 06 (北から)



HJ 第 745 次調査 発掘区全景 (北東から)

2. 平城京跡（左京七条一坊七坪）の調査 HJ第746次

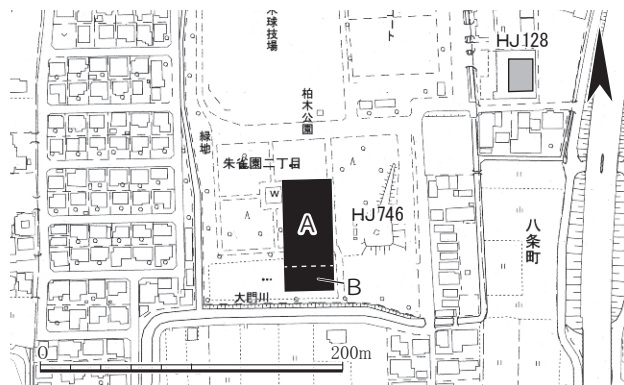
事業名	(仮称) 子どもセンター建設事業	調査期間	令和2年5月7日～11月30日
届出者名	奈良市長	調査面積	2,336㎡
調査地	柏木町262・263-2・283-2	調査担当者	安井宣也・吉田朋史・鈴木桃子

I はじめに

調査地は、平城京の条坊復元では左京七条一坊七坪の西半部にあたる。七坪ではこれまで調査例がない。調査地周辺では、北西約250m地点の左京六条一坊四・五坪で実施された県2005・2006(平成16・17年)調査、北東約130m地点の左京六条一坊九坪で実施されたHJ第128次調査(昭和62年)、北東約210m地点の十五・十六坪で実施された国第251・252・253・254・255次調査(平成8年)がある。

HJ第128次調査では、掘立柱建物・掘立柱列・南北溝・井戸等が確認されている。また、国第251・252・253・254・255次調査では、十六坪の3/4を調査した結果、奈良時代から平安時代にかけての条坊側溝、掘立柱建物、掘立柱列、井戸等が確認され、一町規模の宅地利用が想定されている。

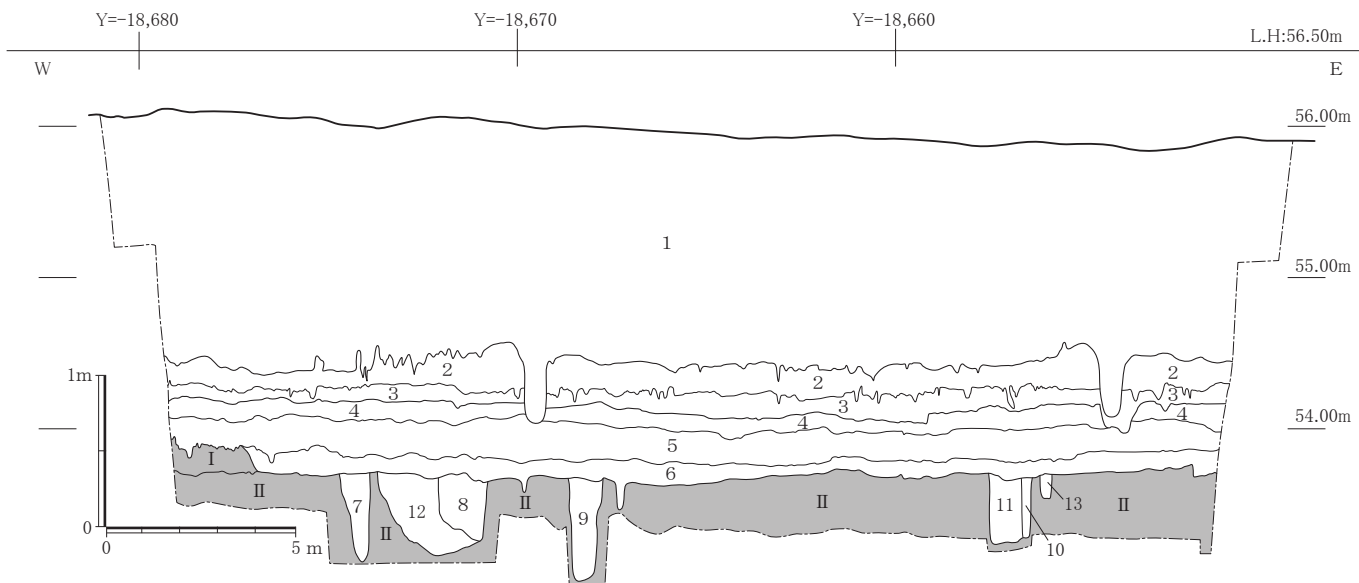
今回の調査は、七坪西半部の宅地の様相解明を目的として、建物予定地内で南北73m・東西32m(面積2,336㎡)の発掘区を設定して実施した。発掘調査は柏木公園内の伐木等撤去工事と併行して行い、南北2回(A・B発掘区)に分けて実施した。



HJ第746次調査 調査地位置図 (1/5,000)

II 基本層序

発掘区内の基本層序は、上から順に黄褐色土(造成土、厚さ1.6m)、暗褐色砂質シルト(旧水田耕土、約0.2m)、灰色粘土混じりシルト(旧耕土床土、0.1m)、灰黄褐色砂混シルト(湿地の堆積層1、0.1m)、黄灰色粘土混シルト(湿地の堆積層2、0.2m)、黄灰色粘土質シルト(湿地の堆積層3、0.2m)の順に堆積し、現地表下約2.4mで灰黄褐色粘土混シルト・黄褐色粘土混シルトの地山(標高53.6～54.1m)に至る。地山面は南西側に向かい緩やかに傾斜している。



- | | | | |
|-------------|----------------------|------------|-------------------|
| 1 黄褐色土 | 5 黄灰色粘土混シルト | 9 灰色粘土質シルト | I : 灰黄褐色粘土混シルト |
| 2 暗褐色砂質シルト | 6 黄灰色粘土質シルト | 10 灰黄褐色砂質土 | II : にぶい黄褐色粘土混シルト |
| 3 灰色粘土混シルト | 7 黄灰色粘土混シルト | 11 灰黄色粘土 | |
| 4 灰黄褐色砂混シルト | 8 灰色シルト質粘土にIIブロック混じる | | |

(1: 造成土 2・3: 耕土・床土 4～6湿地の堆積層 7～9: SB215埋土 10: 柱穴埋土 11: SD01埋土 I・II: 地山)

HJ第746次調査 B発掘区 北壁土層図(縦: 1/50 横: 1/200)

遺構検出は地山上面で行った。

III 検出遺構

遺構検出には、古墳時代以前の流路（S D 01）、奈良時代の掘立柱建物 18 棟（S B 201～218）、掘立柱列 14 条（S A 219～232）・井戸 1 基（S E 501）・土坑 1 基（S K 601）・溝 3 条（S D 101～103）などを検出した。以下、主な遺構の概要について述べる。

奈良時代の遺構

S B 201 梁行 2 間、桁行 3 間の東西棟建物で、柱間は梁行 1.5～1.8 m・桁行 3.0～3.3 m である。重複関係から後述する S B 212・S A 230 より古い。北側柱列の西から 2 番目の柱穴の抜取から、土師器片・須恵器片とともに軒平瓦(6691A・6721C)が出土した。

S B 202 梁行 1 間以上、桁行 4 間の西廂付南北棟建物で、発掘区外東側に続く。柱間は梁行 2.1 m、桁行 1.5～2.4 m と不統一で、廂の出は 2.7 m である。重複関係から後述する S B 216 より古い。

S B 203 梁行 1 間、桁行 4 間の東西棟建物である。柱間は梁行 2.4 m、桁行 2.1～2.8 m と不統一である。一部の柱穴底において径約 0.2 m の根石とみられる円礫と礎板の可能性のある板材を確認した。

S B 204 梁行 2 間、桁行 1 間以上の東西棟建物で、発掘区外西側へ続く。柱間は梁行 1.6～1.8 m、桁行 1.7 m である。重複関係から S B 209 より古い。

S B 205 梁行 1 間、桁行 3 間の南北棟建物である。柱間は梁行 1.8 m、桁行 1.5～1.8 m である。重複関係から S B 208・215 より古い。坪内南北 1/4 分割線を跨いで位置する。

S B 206 梁行 2 間、桁行 10 間の南廂付東西棟建物である。柱間は梁行 1.8 m 等間、桁行 1.8～2.1 m、廂の出は 2.1 m である。重複関係から S B 212 より古い。坪内東西 1/4 分割線上に位置する。

S B 207 梁行 2 間、桁行 6 間の東西棟建物である。柱間は梁行 2.4～2.7 m、桁行 2.1～2.7 m とややばらつきがある。重複関係から S B 213・218・S E 501 より古く、S D 103 より新しい。南北側柱列は S B 209 の南北側柱列と揃う。坪内南北 1/2・東西 1/4 分割線上に位置する。

S B 208 梁行 2 間、桁行 7 間の東西棟建物である。柱間は梁行 2.8～3.0 m、桁行 2.5～3.0 m とややばらつきがある。重複関係から S B 215 より古い。建物の主軸は北で東に約 6° 振れる。東妻柱列は S B 206 の東妻柱列と揃う。坪内東西 1/4 分割線上に位置し、南北 1/4 分割線に近接する。

S B 209 南北 2 間、東西 1 間以上の総柱建物で、発掘区外西側に続く。柱間は南北 2.5 m 等間、東西 2.4 m である。重複関係から S B 204 より新しい。坪内南北 1/2 分割線上に位置する。

S B 210 梁行 1 間以上、桁行 3 間以上の南北棟建物である。柱間は梁行 2.1 m、桁行 1.5～1.8 m である。梁行桁行ともに発掘区外に続く。

S B 211 梁行 2 間、桁行 1 間以上の東西棟建物である。柱間は梁行 1.8～2.4 m、桁行 2.1 m である。西妻柱列は S B 210 の西側柱列と揃っており、L 字型の配置になっている。

S B 212 梁行 2 間、桁行 6 間の南廂付東西棟建物である。柱間は梁行 3.0 m 等間、桁行 2.8～3.0 m、廂の出は 2.4 m である。柱穴の規模は身舎南東隅が最も大きく一辺 1.5 m、深さ 0.7 m である。残存していた柱根の径は 0.3～0.4 m、断面形が八角形に面取りされているものもある。

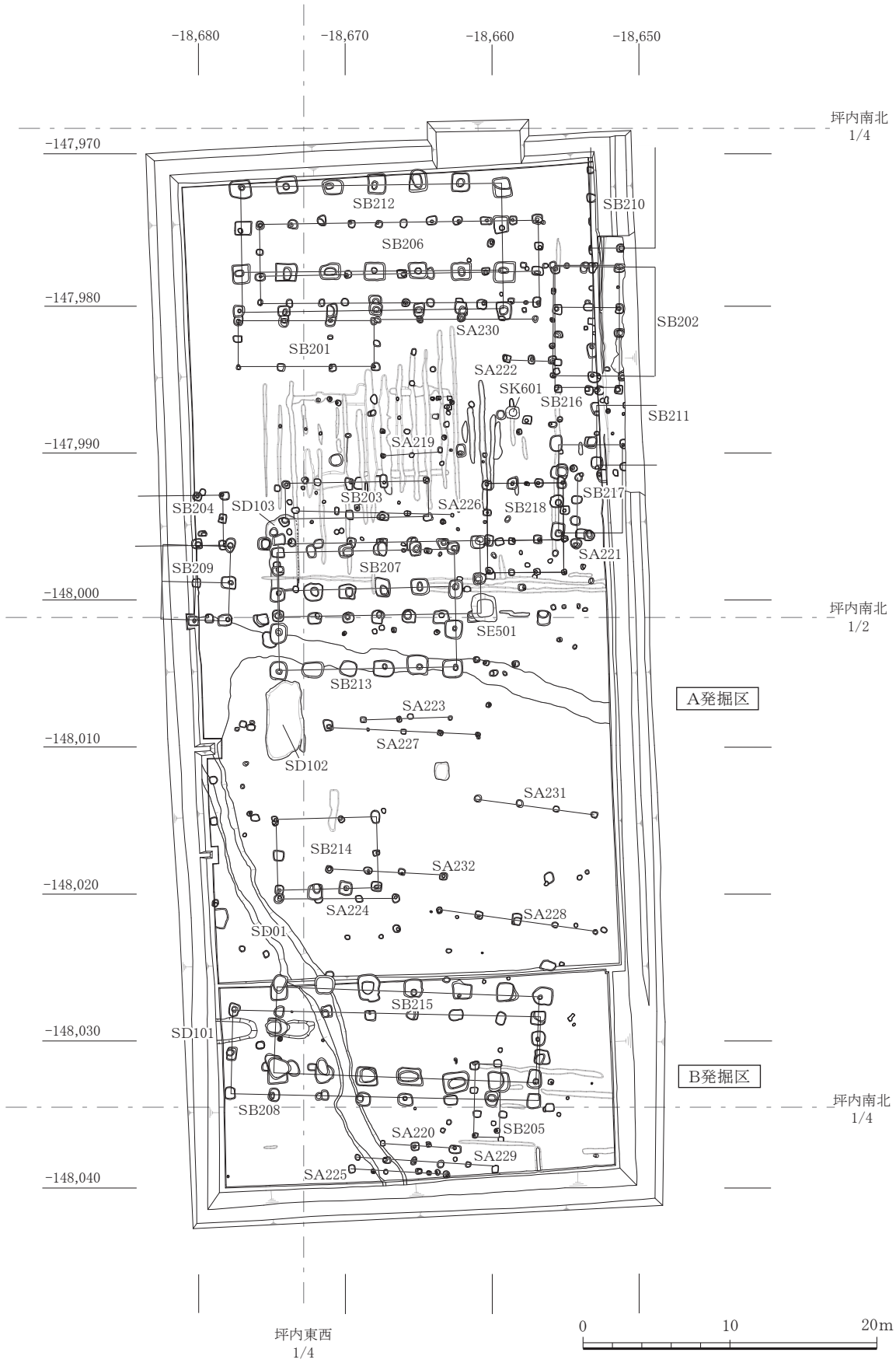
柱穴から土師器片・須恵器片・軒平瓦(6691A)・丸瓦・平瓦・杓子形木製品が出土した。特に北側柱列の抜取痕からは平瓦・丸瓦・熨斗瓦がまとまって出土している。熨斗瓦の凹面には分割の目安となる刻線が残っているものもある。丸瓦・平瓦と比較して熨斗瓦の出土量が多いことから、S B 212 は檜皮葺もしくは板葺で、屋根の棟部分にのみ瓦を用いた熨斗棟であった可能性がある。重複関係から S B 201・206 より新しく、S A 230 より古い。S B 213 梁行 2 間、桁行 5 間の北廂付東西棟建物で



HJ 第 746 次調査 SB 212 柱穴検出状態（北東から）



HJ 第 746 次調査 SB 212 熨斗瓦出土状態（南から）



HJ 第 746 次調査 遺構平面図 (1/400)

ある。柱間は梁行 2.7m 等間、桁行 2.4 等間、廂の出は 2.7m である。身舎すべての柱穴で、角材の転用材を上下 2 段に積み上げて礎板を敷いている。また、北側柱列の西から 2 番目の掘方埋土から和銅開珎 1 点が出土した。重

複関係から S B 207・S D 103 より新しい。建物の中軸線は S B 212、西妻柱列は S B 214・215 の西妻柱列と揃っている。坪内南北 1/2・坪内東西 1/4 分割線上に位置する。

HJ 第 746 次調査 検出遺構一覧表

遺構番号	棟方向	規模 (梁行×桁行)	桁行 全長	梁行 全長	身舎柱間寸法 (m)		廂の出 (m)	柱穴の深さ (m)	備考
			(m)	(m)	桁行	梁行			
SB201	東西	2×3	9.3	3.3	西から 3.0-3.3-3.0	1.5 ~ 1.8	-	0.3 ~ 0.5	SB 212・SA 230 より古い。
SB202	南北	1 以上×4	7.5	2.1 以上	北から 1.5-2.4-1.7-1.9	2.1	2.7	0.1 ~ 0.3	SB 216 より古い。
SB203	東西	1×4	9.4	2.4	西から 2.1-2.2-2.3-2.8	2.4	-	0.1 ~ 0.4	
SB204	東西	2×1 以上	1.7 以上	3.4	1.7	北から 1.6-1.8	-	0.1 ~ 0.2	SB 209 より古い。
SB205	南北	1×3	5.1	1.8	北から 1.8-1.8-1.5	1.8	-	0.1 ~ 0.5	SB 208・215 より古い。
SB206	東西	2×10	19.0	3.6	西から 2.1-2.1-2.1-1.8-1.8-1.8-1.8-1.9-1.8-1.8	1.8 等間	2.1	0.1 ~ 0.4	SB 212 より古い。 東妻柱列が SB 208 と揃う。
SB207	東西	2×6	13.5	5.1	西から 2.7-2.1-2.1-2.1-2.1-2.4	北から 2.7-2.4	-	0.2 ~ 0.8	SB 213・218、SE 501 より古く、SD 103 より新しい。
SB208	東西	2×7	20.8	5.8	西から 3.0-3.3-3.0-3.0-3.0-3.0-2.5	北から 3.0-2.8	-	0.2 ~ 0.7	SB 215 より古い。 東妻柱列が SB 206 の東妻柱列と揃う。 一部板材を礎板に転用。
SB209	東西	2×1 以上	2.4 以上	5.1	2.4	2.5 等間	-	0.4 ~ 0.6	SB 204 より新しい総柱建物。
SB210	南北	1 以上×3 以上	5.1 以上	2.1 以上	北から 1.8-1.5-1.8	2.1	-	0.2 ~ 0.3	西側柱列が SB 211 の西妻柱列と揃う。
SB211	東西	2×1 以上	2.1 以上	4.2	2.1	北から 1.8-2.4	-	0.2 ~ 0.3	西妻柱列が SB 210 の西側柱列と揃う。
SB212	東西	2×6	17.8	6.0	西から 3.0-3.0-3.0-3.0-3.0-2.8	3.0 等間	2.4	0.3 ~ 0.7	SB 201・206 より新しく、SA 230 より古い。
SB213	東西	2×5	12.0	5.4	2.4 等間	2.7 等間	2.7	0.3 ~ 0.7	SB 207・SD 103 より新しい。 身舎すべての柱穴で角材を上下 2 段に積み上げ礎板に転用。
SB214	東西	2×3	6.6	4.8	西から 2.4-2.1-2.1	2.4 等間	-	0.3 ~ 0.5	SA 224 より新しい。
SB215	東西	2×6	17.8	5.7	西から 3.0-3.0-3.3-3.0-3.0-2.5	北から 2.7-3.0	-	0.5 ~ 0.8	SB 205・208、SD 101 より新しい。 東西妻側中央の柱には角材や板材を礎板に転用。
SB216	南北	2×4	8.1	4.2	北から 2.7-1.8-1.8-1.8	2.1 等間	-	0.2 ~ 0.5	SB 202・SA 222 より新しい。 北側は間仕切り柱か。
SB217	南北	2×3	6.0	4.2	北から 1.8-2.1-2.1	2.1 等間	-	0.2 ~ 0.5	SB 218 より古い。
SB218	東西	2×3	5.2	3.8	西から 1.8-1.7-1.7	1.9 等間	2.1	0.2 ~ 0.4	SB 207・217 より新しい。
SA219	東西	2	3.6		1.8 等間		-	0.1 ~ 0.3	
SA220	東西	2	4.8		西から 2.1-2.7		-	0.3 ~ 0.5	
SA221	南北	3	4.5		1.5 等間		-	0.2 ~ 0.4	
SA222	東西	2	3.3		西から 1.8-1.5		-	0.1 ~ 0.2	SB 216 より古い。
SA223	東西	2	6.0		西から 3.3-2.7		-	0.3 ~ 0.4	
SA224	東西	3	7.8		西から 2.7-2.7-2.4		-	0.4 ~ 0.5	SB 214 より古い。
SA225	東西	3	6.4		西から 2.4-2.2-1.8		-	0.2 ~ 0.5	
SA226	東西	3	10.6		西から 2.7-4.8-3.1		-	0.1 ~ 0.2	
SA227	東西	4	10.0		西から 2.7-2.4-2.4-2.5		-	0.1 ~ 0.3	
SA228	東西	4	10.6		西から 2.7-2.7-2.4-2.8		-	0.2	
SA229	東西	5	9.3		西から 1.8-2.1-1.8-1.8-1.8		-	0.1 ~ 0.6	
SA230	東西	4	10.8		西から 3.0-2.7-2.7-2.4		-	0.3 ~ 0.5	SB 201・212 より新しい。
SA231	東西	3	7.8		西から 2.7-2.4-2.7		-	0.2	
SA232	東西	3	7.6		西から 2.7-2.2-2.7		-	0.2	

遺構番号	平面形等	平面規模 (m)	深さ (m)	時期	主な遺物	備考
SD01	斜行溝	長さ 33 以上×幅 1.2 ~ 2.9	0.4	古墳時代以前	-	SB208、215 より古い。
SD101	東西溝	長 2.7 × 幅 1.6	0.3	8 世紀前半		SB215 より古い。
SD102	南北溝	長 5.4 × 幅 2.5	0.2	8 世紀前半		
SD103	南北溝	長 5.2 × 幅 2.0	0.2	8 世紀前半		SB203・207・213 より古い。
SE501	不整形	長軸 1.8、短軸 1.7	2.5	8 世紀前半 ~ 中頃	土師器杯・皿・高杯・壺・蓋・須恵器甕・杯・木簡 2 点・曲物・漆椀・墨書土器 (判読不可)・丸瓦・平瓦	SB 207 より新しい。
SK601	不整形	長軸 0.9、短軸 0.8	1.4	8 世紀前半 ~ 中頃	土師器杯・壺・高杯・甕・須恵器杯・皿・蓋・甕・高杯・製塩土器・漆器蓋・丸瓦・平瓦	

S B 214 梁行2間、桁行3間の東西棟建物で、柱間は梁行2.4 m等間、桁行2.1～2.4 mである。重複関係からS A 224 より新しい。坪内東西1/4分割線上に位置する。

S B 215 梁行2間、桁行6間の東西棟建物で、柱間は梁行2.7～3.0 m、桁行2.5～3.3 m、重複関係からS B 205・208、S D 101 より新しい。東西妻柱や地盤の弱い柱穴では、板材や角材などの転用材で礎板を敷いている。

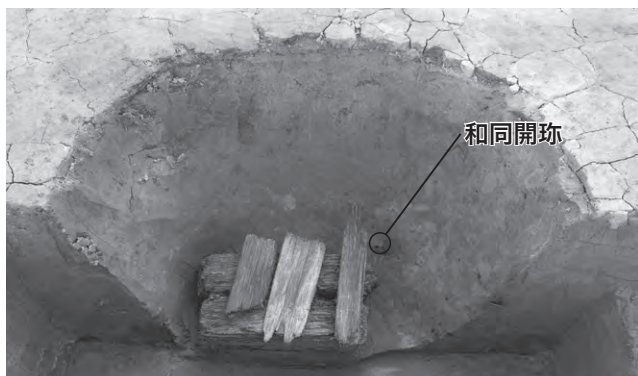
S B 216 梁行2間、桁行4間の南北棟建物である。柱間は梁行2.1 m等間、桁行北側1間のみ2.7 mでそれ以外は1.8 m等間である。北側中央部に間仕切りと考えられる柱穴がある。重複関係からS B 202・S A 222 より新しい。北妻柱列はS B 212 身舎の南側柱列と揃っている。北東隅柱穴より土師器・須恵器、軒平瓦(6721 C)が出土した。

S B 217 梁行2間、桁行3間の南北棟建物である。柱間は梁行2.1 m等間、桁行1.8～2.1 mである。重複関係からS B 218 より古い。建物の南北中軸線は、S B 216 と揃っている。

S B 218 梁行2間、桁行3間の南廂付東西棟建物である。柱間は、梁行1.9 m等間、桁行1.7～1.8 m、廂の出は2.1 mである。重複関係からS B 207・217 より新しい。
S D 101 坪内南北1/4分割線付近で確認した東西方向の溝である。規模は長さ2.7 m以上・幅1.6 m・深さ0.3 mで、重複関係からS B 215 より古い。

S D 102 坪内東西1/4分割線付近で確認した南北方向の溝である。規模は長さ5.4 m・幅2.5 m・深さ0.2 mである。底面で炭化物層を確認し、その上方から土師器・須恵器片とともに丸瓦・平瓦が出土した。

S D 103 坪内東西1/4分割線付近で確認した南北方向の溝である。規模は長さ5.2 m・幅2.0 m・深さ0.2 mである。重複関係からS B 203・207・213 より古い。



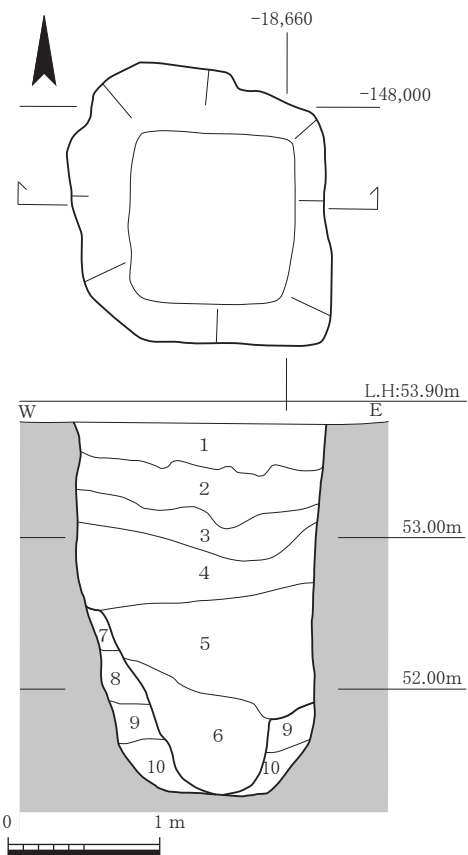
HJ 第 746 次調査 SB213 柱穴礎板（南から）

S E 501 東西1.8 m、南北1.7 mの平面不整形な方形掘形で、深さ2.5 mの井戸である。枠は抜き取られており残存していなかった。重複関係からS B 207 より新しい。抜取埋土より8世紀中頃の土師器杯・高杯、須恵器甕・杯、木簡、曲物、漆椀が出土した。抜取埋土から出土した木簡は2点あり、うち1点に「天平勝寶三年十月」の記年銘がをあることを確認した。このことから、S E 501 は751年からさほど隔たらない時期に埋没したと考えられる。

S K 601 東西0.9 m、南北0.8 mの平面不整形な掘形で深さ1.4 mの土坑である。底面からは若干の湧水が見られるため、井戸の可能性もあるが、砂や砂礫などの明確な湧水層には達していない。8世紀中頃とみられる土師器(杯・甕・高杯)、須恵器(杯・甕・高杯)、製塩土器、漆器蓋、斎串、瓦(丸瓦・平瓦)が出土した。

IV 出土遺物

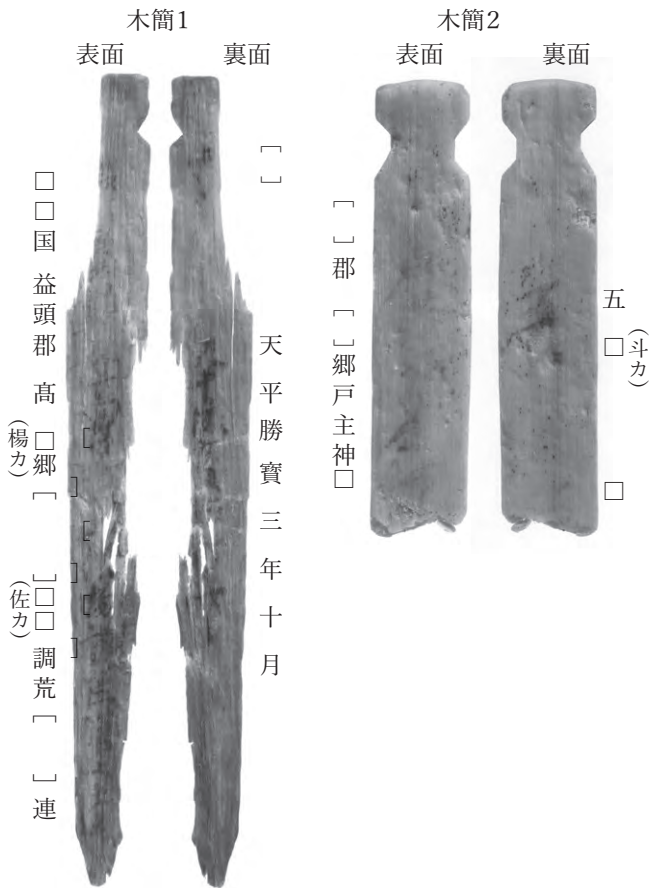
出土遺物は、遺物整理箱で49箱出土した。弥生土器、8世紀の土師器(杯・壺・甕・高杯)、須恵器(杯・甕・



- | | | |
|-----------|-------------|-------------|
| 1 明黄褐色粘質土 | 5 暗灰黄色粘土 | 9 暗オリーブ灰色粘土 |
| 2 黄灰色粘質土 | 6 灰色粘土 | 10 灰色粘土 |
| 3 灰色粘土 | 7 暗灰黄色粘質シルト | |
| 4 灰色粘土 | 8 オリーブ灰色粘土 | |

(1～6：抜取埋土 7～10：掘方埋土)

HJ 第 746 次調査 SE 501 平面図・断面図 (1/50)



HJ第746次調査 SE501 出土木筒(1・2)・釈文

高杯)、瓦類(軒丸瓦(6313 H)・軒平瓦(6691 A・6702 H・6721 C)・丸瓦・平瓦)、木筒、斎串、杓子型木製品、曲物、漆器、和銅開珞がある。

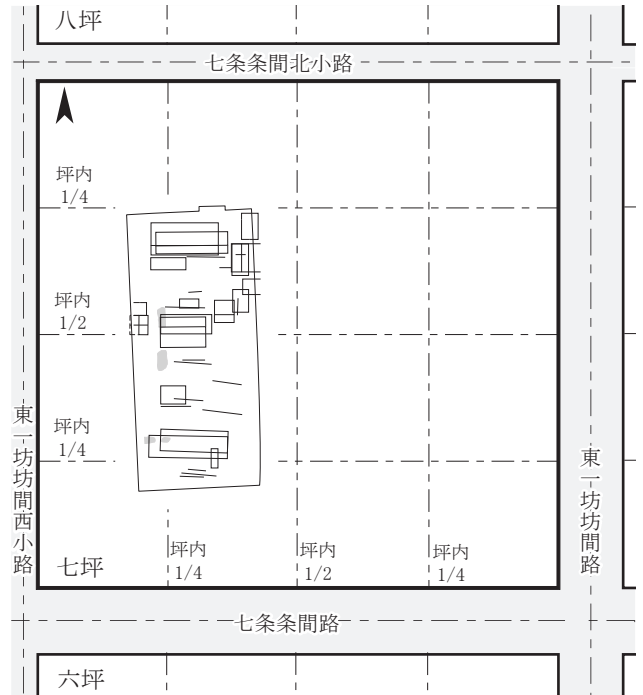
SE501からは木筒が2点出土しており、いずれも荷札木筒である。木筒1は上端部左辺及び下端部右辺が欠損しており、残存長21.7cm・幅2.15cm・厚さ0.3cmである。上部右側面に切込みを確認できる。墨書で表面に「□□(駿河カ)国益頭郡高□(楊カ)郷[]□□(佐カ)調荒[]連」、裏面に「[]天平勝寶三年十月」と記されている。表面の「荒」と「連」の間は、類例から「堅魚」の可能性が高い。木筒の材質はヒノキである。

木筒2は上部のみの残存で、残存長12.1cm・幅2.6cm・厚さ0.4cmである。上端部に切込みがみられ、墨書で表面に「[]郡[]郷戸主神□」裏面に「五□(斗カ)□」と記されている。木筒の材質はヒノキである。

V 調査所見

今回、左京七条一坊七坪の西半分を調査したことで、少なくとも5時期(I~V期)に渡って宅地利用されていたことが明らかになった。以下、時期ごとに概括する。

I期 坪内の区画溝(SD01~03)を検出したのみで、



左京七条一坊七坪 坪割図(1/2,000)

同時期の建物は確認しておらず、詳細は不明である。

II期 主に坪内南北1/2分割線より北側で小規模な掘立柱建物数棟で構成される。中心建物と考えられる西廂付南北棟建物1棟(SB202)と、そのまわりに東西棟3棟(SB201・203・204)が配される。建物の配置状況から1/8町以上の宅地利用が考えられるが、南側のSB205が坪内南北1/4ラインを跨ぐため、南半についても1/8町利用されていた可能性がある。

III期 桁行10m以上の大規模な東西棟建物が、坪西半中央部に3棟南北に並び、七坪西半を一体とした1/2町規模以上の宅地となる。

中心建物と考えられる南廂付東西棟建物(SB206)、南側には東西棟建物(SB207・208)があり、SB206とSB208は西妻柱列が、SB207とSB208は建物の南北中軸線がほぼ揃う。また、SB206・207・208は坪内東西1/4分割線上に、SB207・209は南北1/2分割線上に位置している。

IV期 III期の大规模建物の同位置に同規模建物が築かれる。邸宅規模も同様と考えられる。

中心建物とみられる南廂付東西棟建物(SB212)、その南側で北廂付東西棟建物(SB213)、さらにその南側で東西棟建物(SB215)が並び、SB213の東側には井戸(SE501)が配置される。柱穴の規模も1辺1m以上のものが多く、ほかの時期に比べ大きくなっている。また、SB212・213の東側に南北棟建物(SB216・217)が柱筋を揃えて配置され、SB212・213・

216・217 を同時期の建物と考えるとコの字型配置になる。さらに、S B 212 と S B 213 は建物の南北中軸線を揃えており、S B 213・214・215 は西側の妻柱列を揃えている。また、S B 212・213・214・215 は坪内東西 1/4 分割線上に位置し、S B 213 は南北 1/2 分割線上に位置することから、Ⅲ期に引き続き 1/2 町以上の宅地利用を行っていた可能性がある。

Ⅲ・Ⅳ期については、S E 501・S K 601 の出土遺物から 8 世紀中頃と考えられる。

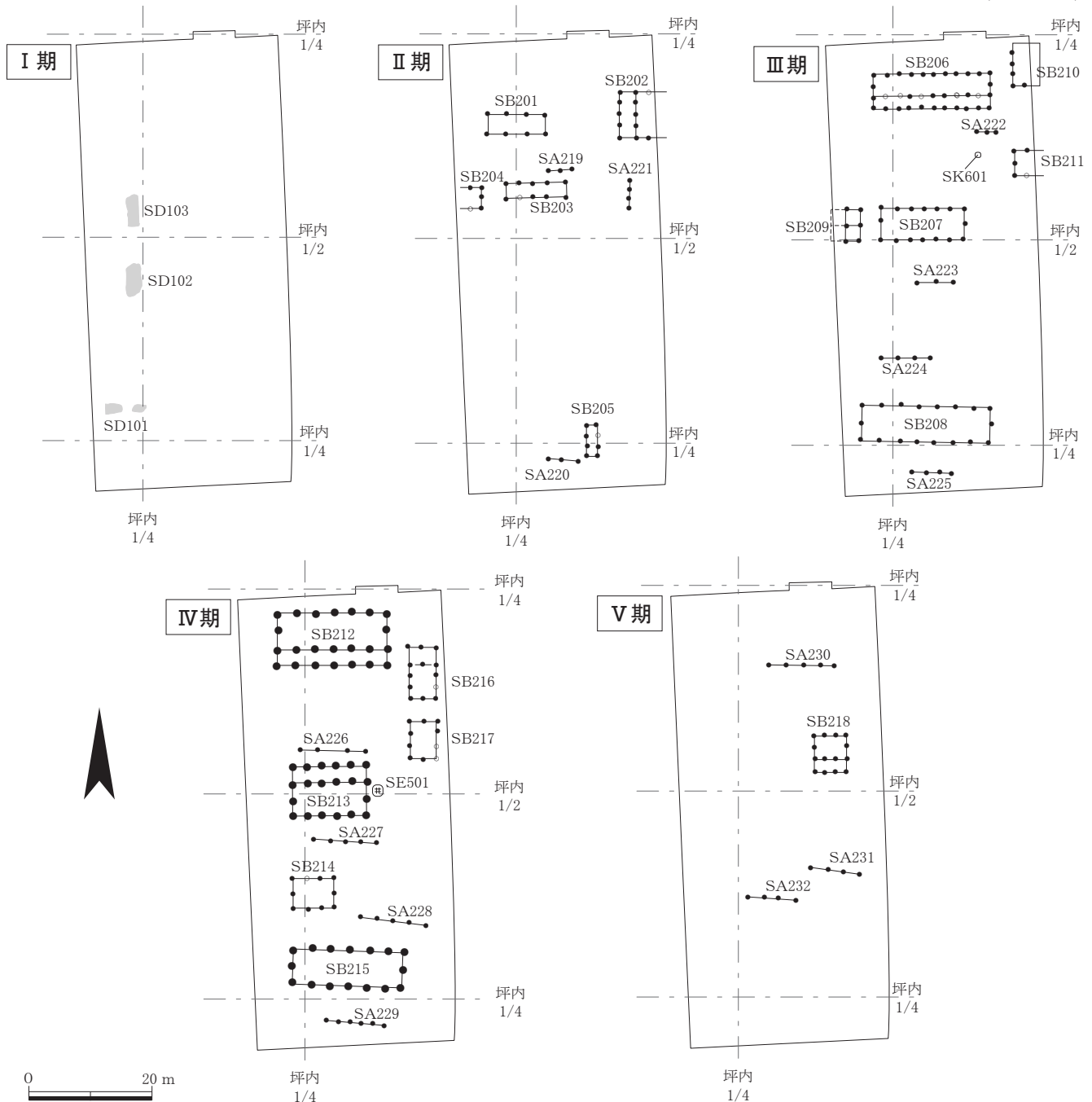
V 期 桁行 10 m 以上の建物は見られなくなり、小規模

な建物 (S B 218) が 1 棟配置されるのみである。

S B 218 は坪内東西 1/2 分割線と 1/4 分割線の間中に配されているが、明確な区画施設がないため、宅地の規模については不明である。V 期については、Ⅳ期の S E 501 の埋没時期から 8 世紀中頃～後半とみられる。

今回の調査で、七坪内の土地利用の一端が明らかになった。Ⅲ・Ⅳ期には 1/2 町規模の宅地と、その中に大規模な東西棟を南北に 3 棟配した建物配置が確認された。小規模な掘立柱建物が多い七条以南では、大規模な建物を有する調査地は特異な例といえよう。

(吉田朋史)



HJ 第 746 次調査 遺構変遷図 (1/1,000)



HJ第746次調査 A発掘区全景（南から）



HJ第746次調査 A発掘区全景（北から）



HJ第746次調査 A発掘区北側部分景（北東から）



HJ第746次調査 A発掘区北側部分景（南西から）



HJ第746次調査 B発掘区全景（南西から）



HJ第746次調査 B発掘区全景（西から）



HJ 第 746 次調査 SE 501 (南から)



HJ 第 746 次調査 SK 601 (北から)

3. 平城京跡（左京六条三坊十二坪）の調査 HJ第749次

事業名	宅地造成	調査期間	令和3年1月12日～1月19日
届出者名	株式会社 やまと不動産	調査面積	111.24㎡
調査地	大安寺二丁目 43-1	調査担当者	吉田朋史・鈴木桃子

I はじめに

調査地は、平城京の条坊復元では左京六条三坊十二坪の南側にあたり、約180m東側には大安寺が位置する。十二坪中央には東堀河が南北に貫流しており、遺存地割が残る。調査区の旧状は宅地であり、南側には東西方向の水路が通っている。

十二坪内では、今回の調査地の北西側で平成16年度にHJ第526次調査が行われ、掘立柱建物・列、土坑を検出したが、東堀河に関連する遺構は見られなかった。また、北側では平成30年度にHJ第723次調査が行われ、東堀河およびそれに接続する舟入遺構を検出している。

今回の調査は十二坪南東部の宅地の様相解明と、六条大路関連遺構の検出を目的として実施した。

II 基本層序

発掘区の基本層序は、上から盛土が1.5～1.6m、暗灰黄色・灰黄色砂質土（耕土）が0.4m、褐灰色砂質土（旧耕土）が0.1～0.2m、灰黄褐色砂質土（旧耕土に伴う床土）が0.1m堆積し、にぶい黄褐色砂質土の地山に至る。

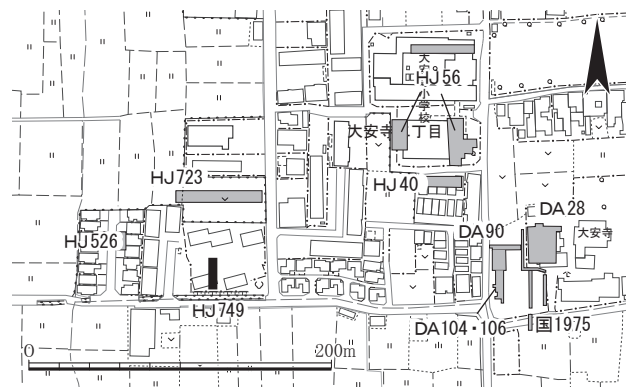
遺構検出は地山上面でおこなったが、発掘区北半では地山上面に整地土とみられる褐灰色砂質土が被っており、その整地土上面と、整地土除去後の地山上面の2面で遺構検出をおこなった。地山の標高は57.0mである。

III 検出遺構

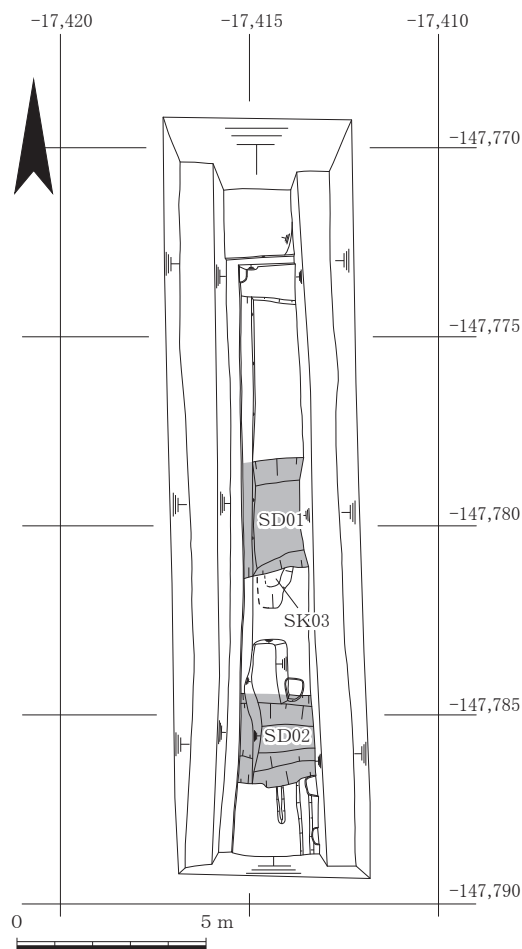
奈良時代～平安時代の東西方向の溝2条（SD01・SD02）、土坑1基（SK03）、柱穴4基を検出した。柱穴については、発掘区内で掘立柱建物や柱列として展開するものはなかった。以下、主要遺構の概要について述べる。

SD01 南北幅3.0m、深さ0.7mの東西溝である。褐灰色砂質土の整地土に覆われており、東西1.8m分を検出した。出土遺物は土師器・須恵器の小片のみで、時期の特定が難しい。溝心の座標値はX=-147,779.65、Y=-17,414.26である。

SD02 南北幅2.1m、深さ0.8mの東西溝である。今回の調査では東西約2.1m分を検出した。溝埋土からは8世紀後半から9世紀の土師器杯、高杯、須恵器杯、椀、甕、高杯、軒丸瓦(6304D)1点、平瓦片が出土している。溝



HJ第749次調査 調査地位置図 (1/5,000)



HJ第749次調査 遺構平面図 (1/200)

心の座標値はX = -147,785.50、Y = -17,414.20 である。SK 03 東西約 0.6 ～ 0.7 m、南北約 1.0 m の土坑。埋土は暗褐色砂質土に地山（II層）ブロックが混じる。遺物は出土していない。

IV 出土遺物

遺物整理箱で1箱分が出土した。大半はSD 03 出土遺物である。種別は、8世紀後半～10世紀の土師器杯・高杯、須恵器杯・碗・甕・高杯、灰釉陶器、軒丸瓦（6304D）1点、平瓦、丸瓦である。

V 調査所見

今回の調査は六条大路北側溝の検出を主な目的として実施し、結果として2条の東西溝（SD 01・SD 02）を検出した。これらの溝が六条大路北側溝にあたるのか検証する。

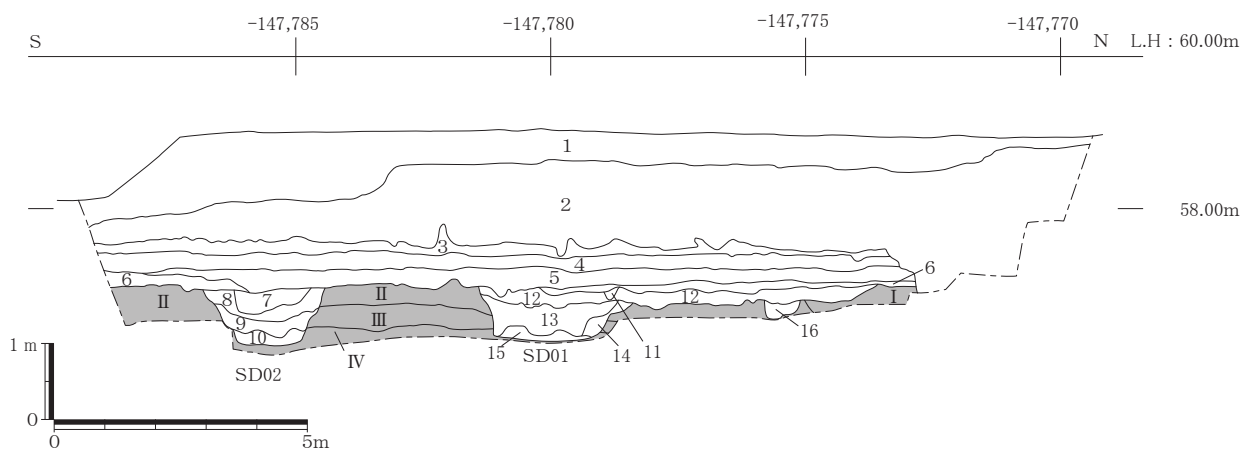
まず六条大路南北側溝の検出事例について、左京七条一坊十五・十六坪の調査（国第252次）で南北両側溝が検出されている。溝心の座標は、北側溝がX = -147,791.896、Y = -18,358.904、南側溝がX = -147,806.196、Y = -18,358.904 であり、ここから求められる六条大路の道路心はX = -147,799.046、Y

= -18,358.904 である。南北両側溝の溝心から求められる六条大路の路面幅は約 14.3 m である。

同様に、平成 29 年度に実施したDA第143次調査でも六条大路南北両側溝を検出している。ここでの溝心の座標は、北側溝がX = -147,792.950、Y = -17,066.500、南側溝がX = -147,807.950、Y = -17,066.500、六条大路の道路心はX = -147,800.450、Y = -17,066.500 である。この場合、南北両側溝の溝心から求められる六条大路の路面幅は約 15.0 m となる。

以上2箇所の発掘調査事例を参考に考えると、今回の調査地での六条大路道路心の座標はX = -147,800.00、Y = -17,414.25 と推定される。六条大路の路面幅を約 14.3 ～ 15.0 m とすると、今回の調査地での六条大路北側溝の座標はX = -147,792.50 ～ -147,792.85 になると考えられる。

SD 02 の溝心はX = -147,785.50、Y = -17,414.26 であり、上記の推定される六条大路北側溝の座標から約 7 ～ 7.35 m 北側に位置している。このことから、今回検出したSD 02 が六条大路北側溝である可能性は低いと考えられる。（鈴木桃子）



- | | | |
|---------------------|-----------------------|---------------------------|
| 1 黄色砂土 (2.5Y8/6) | 8 黄灰色中粒砂 (2.5Y4/1) | 15 暗灰黄色年度 (2.5Y4/2) |
| 2 黄灰色砂質土 (2.5Y5/1) | 9 黄灰色シルト (2.5Y4/1) | 16 褐灰粘質土 (10YR5/1) |
| 3 暗灰黄色砂質土 (2.5Y5/2) | 10 褐灰色シルト (10YR5/1) | I : 黄灰色粗砂 (2.5Y6/1) |
| 4 黄灰色砂質土 (2.5Y5/1) | 11 黒褐色砂質土 (2.5Y3/2) | II : にぶい黄褐色砂質土 (10YR4/3) |
| 5 褐灰色砂質土 (10YR5/1) | 12 褐灰色砂質土 (10YR5/1) | III : 黄褐色粘土質シルト (2.5Y5/4) |
| 6 灰黄褐色砂質土 (10YR4/2) | 13 にぶい黄色粘質土 (2.5Y6/3) | IV : 暗灰黄色砂質土 (2.5Y4/2) |
| 7 灰黄色粗粒砂 (2.5Y6/2) | 14 黄灰色中粒砂 (2.5Y4/1) | |

(1・2 : 造成土 3～6 : 耕土・床土 7～10 : SD 02 埋土 11、16 : 柱穴埋土 12 : 整地土 13～15 : SD 01 埋土)

HJ第749次調査 西壁土層断面図（縦:1/100 横:1/150）

HJ第749次調査 検出遺構一覧

遺構番号	平面形状	平面規模 (m)	深さ (m)	時期	主要出土遺物	備考
SD 01	東西	南北幅 : 約 2.9、東西長 : 約 2.1 以上	0.7	不明	土師器小片・須恵器小片	
SD 02	東西	南北幅 : 約 2.1、東西長 : 約 2.1 以上	0.75	8世紀後半～9世紀	土師器杯・高杯、須恵器杯・甕・高杯、軒丸瓦 (6304D)、平瓦片	
SK 03	不整形	東西 : 0.6 ～ 0.7、南北約 1.0	0.65	不明	なし	SD 01 より古い



HJ第 749 次調査 発掘区全景（北東から）



HJ第 749 次調査 SD01・SD02（北西から）

4. 史跡大安寺旧境内の調査 DA第151次

事業名	既存建築物の解体及び新築	調査期間	令和2年11月25日～令和2年12月14日
申請者名	個人	調査面積	78㎡
調査地	大安寺四丁目1071番1	調査担当者	秋山成人

I はじめに

調査地は大安寺旧境内の北辺、『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』にある「池井丘」に推定される一角にあたる。「丘」に比定される杉山古墳の北側に位置し、復元図¹⁾によると杉山古墳周濠の北側にあたる。西隣地では平成13年度にDA第93次調査を実施し、室町時代の井戸・土坑、江戸時代の土坑を検出している。調査地から東側約30mでは県78-3次調査、東側約40mでは平成28年度にDA第141調査を実施し、いずれも杉山古墳周濠内であることを確認している。杉山古墳周濠北肩はこれまで確認されていない。

以上のことを踏まえ、今回の調査では杉山古墳周濠北側の状況を明らかにすること、また奈良時代の旧境内の状況を確認することを目的に実施した。

II 基本層序

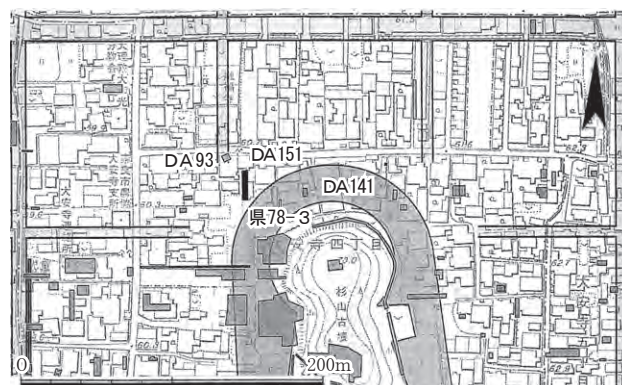
発掘区内の基本層序は上から黒褐色土（既存建物解体時造成土）、黄灰色砂質土、褐灰色土、暗灰色土、褐色土、と続き地表下0.2mで地山の黄灰色粘土、黄褐色砂礫である。遺構は地山上面で検出した。地山上面の標高は発掘区南で61.6m、北で61.8mである。

III 検出遺構

検出した遺構には鎌倉時代の溝SD01、江戸時代の溝または土坑SX02・03、溝SD04～06・土坑SK08～10、近代の埋桶遺構SX11、時期不明の土坑SK07、小柱穴がある。

SD01 発掘区北半西辺沿いで検出した南北溝である。規模は長さ6.3m以上、幅0.7m、深さ0.15mである。埋土から13世紀の土師器皿、羽釜の小片が出土した。

SX02・03 発掘区南半で検出した東西に延びる溝又は土坑で、土層堆積状況から両者に重複関係はない。SX02は長さ3.5m以上、幅4.2m、深さ0.7mで、発掘区西辺で、幅0.65mと狭くなり、深さも0.32mと浅くなる。SX03は長さ3.5m以上、幅4.5m、深さ0.7mである。SX02・03の埋土は暗灰色粘砂、黒灰色粘土、暗灰色粗砂、灰色粘土、灰色粗砂で、18～19世紀の肥前産磁器碗、信楽産陶器播鉢、土師器皿・炮烙、木製品が出土した。その他に奈良・平安時代の須恵器小片、奈良時代と平安時代以降の軒丸瓦(6138E型式)・



DA第151次調査 調査地位置図 (1/5,000)

軒平瓦(6661A型式)が出土した。

SD04～06 発掘区北半で検出した素掘溝である。SD04は南から北東へ延び、長さ2.5m以上、幅0.5m、深さ0.1m。SD05は東西に延び、長さ3.5m以上、深さ0.15m、東端でSD04と接続する。SD06は東西に延び、長さ3.3m以上、幅0.5m、深さ0.1mである。埋土から18～19世紀の肥前産磁器碗・信楽産陶器碗・播鉢・土師器小片・円盤形土製品が出土した。

SK07 発掘区北半で検出した平面楕円形、断面皿状の土坑である。規模は東西0.45m、南北0.5m、深さ0.21mである。埋土から時期不明の土師器小片が出土した。SK08 発掘区東辺で検出した平面不整形で、断面皿状の土坑である。規模は東西1.0m以上、南北1.1m、深さ0.1mである。埋土から18～19世紀の肥前産磁器碗の小片が出土した。

SK09 発掘区東辺で検出した平面不整形、断面皿状の土坑である。規模は東西0.8m以上、南北2.3m、深さ0.3mである。埋土から18～19世紀の肥前産磁器碗、信楽産陶器甕・播鉢の小片、土師器皿が出土した。

SK10 発掘区北半で検出した平面方形で、断面逆台形の土坑である。規模は一辺0.7m、深さ0.3mである。埋土から近世の磁器小片が出土した。

SX11 発掘区北西隅で検出した平面円形の埋桶遺構である。規模は径1.4m、深さ0.7mである。底部に桶の下部が残存している。桶の大きさは胴部残存高0.4m、径0.6m、底部径0.5mである。抜取埋土から近代の磁器碗が出土した。

小柱穴 発掘区北半で検出した平面不整形の柱穴である。規模は径0.15～0.2mで、深さ0.08～0.12mである。遺物が出土せず、時期不明である。

IV 出土遺物

遺物整理箱で13箱分出土した。内訳は土器類10箱、瓦類1箱、木製品2箱である。遺物の大半はSX02・03出土で、近世の土師器、陶磁器、木製品である。

主な木製品には、朱漆が内外面に塗られた高台付漆椀、曲物柄杓、片足分の小型差歯の下駄がある。

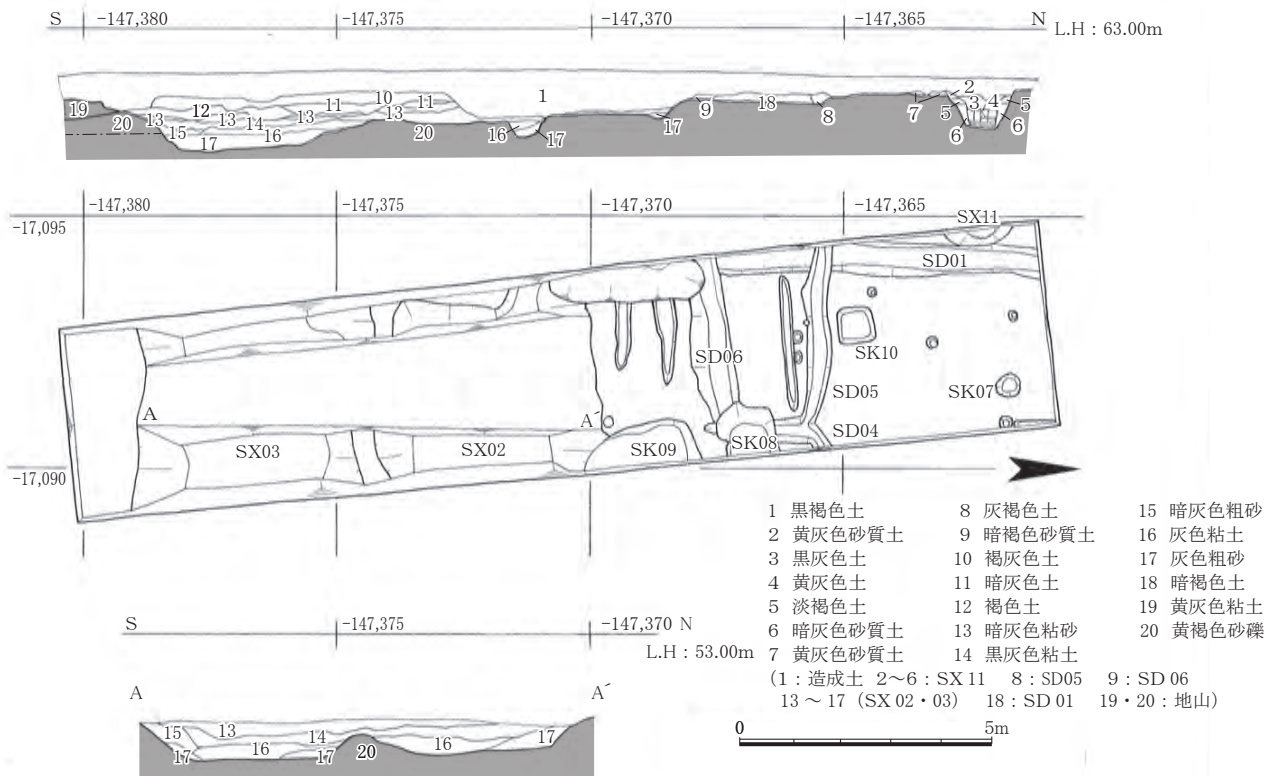
V 調査所見

調査の結果、当該地は復元図どおり周濠の外側にあたり、外堤などの痕跡は確認できなかった。溝状のSX02・03も杉山古墳周濠復元位置に当たらず、出土遺物は江戸時代以降のものが大半で、古墳関連遺物もなく周濠と考えにくい。また、奈良時代の遺構も検出されず、当該地での奈良時代の大安寺の様相は明らかにできなかった。

(秋山成人)

註

1) 奈良市教育委員会 1997 『史跡大安寺旧境内 I』



DA第151次調査 遺構平面図・発掘区西壁土層断面図 SX02・03土層断面図 (1/150)



DA第151次調査 発掘区全景 (北から)



DA第151次調査 SX02・03 (南東から)

5. ウワナベ古墳の調査 UN第2次

事業名	範囲確認調査	調査期間	令和2年10月2日～11月27日
通知者	奈良市長	調査面積	63㎡
調査地	法華寺町1824-1	調査担当者	村瀬陸

I はじめに

ウワナベ古墳は、佐紀古墳群東群に含まれ、西側にコナベ古墳、北西側にヒシャゲ古墳が位置する。

これまでに、国道24号バイパス線に伴う調査（奈良国立文化財研究所1974）、航空自衛隊奈良基地内の調査（奈良県立橿原考古学研究所2017ほか）、ウワナベ池の護岸工事に伴う調査（奈良市教育委員会1992）が実施され、内堤の埴輪列や外濠を伴う5世紀前半（須恵器編年：TK216型式、埴輪編年IV-1）の大型前方後円墳であることが明らかにされている。

本調査は、宮内庁が墳丘周囲の護岸工事を計画し、それに先立つ事前調査を実施することから、奈良県・市がこれと同時に範囲確認調査を行ったものである。

奈良市は、宮内庁の発掘区に合わせて後円部北・東側の2ヶ所に北・東発掘区を設定し、奈良県立橿原考古学研究所（以下、橿考研）は後円部北東側に発掘区を設定して調査を行った。なお、宮内庁と橿考研の調査成果はすでに公表されている（宮内庁書陵部2022、橿考研2022）。

本報告は調査前に三者で交わした協定書に基づき、宮内庁および橿考研からデータ・情報の提供を受けて執筆した。また、宮内庁より航空レーザ測量による三次元点群データの提供を得て、奈良市が三次元立体モデルおよび傾斜量図等の作成を行ない、調査所見で墳丘復元等について記述した。これに併せて、宮内庁書陵部陵墓課陵墓調査室による航空レーザ測量概要を掲載した。

II 基本層序

遺構面に達することができた東発掘区について記すと、大きく分けて上から現池底の黒灰色土（厚さ約0.05m）、灰色土（0.1m）、黄褐色土（約0.5m）、青灰色土と灰色砂質土の互層（約1.1m）、褐色土と灰褐色砂質土の互層（約0.7m）、茶褐色腐植土（約0.2m）、灰色粗砂（約0.05m）と続き、現池底から約2.7mで基底石に至る。

層位の年代を示す遺物は、葺石面で9世紀前半頃の須恵器壺、茶褐色腐植土から9～12世紀の土器が出土した。また、褐色土と灰褐色砂質土の互層の上面には大地震の痕跡を示す火炎構造が観察できる。12世紀以降での大地震を考えると、1605年の慶長地震が想定できる。

III 検出遺構

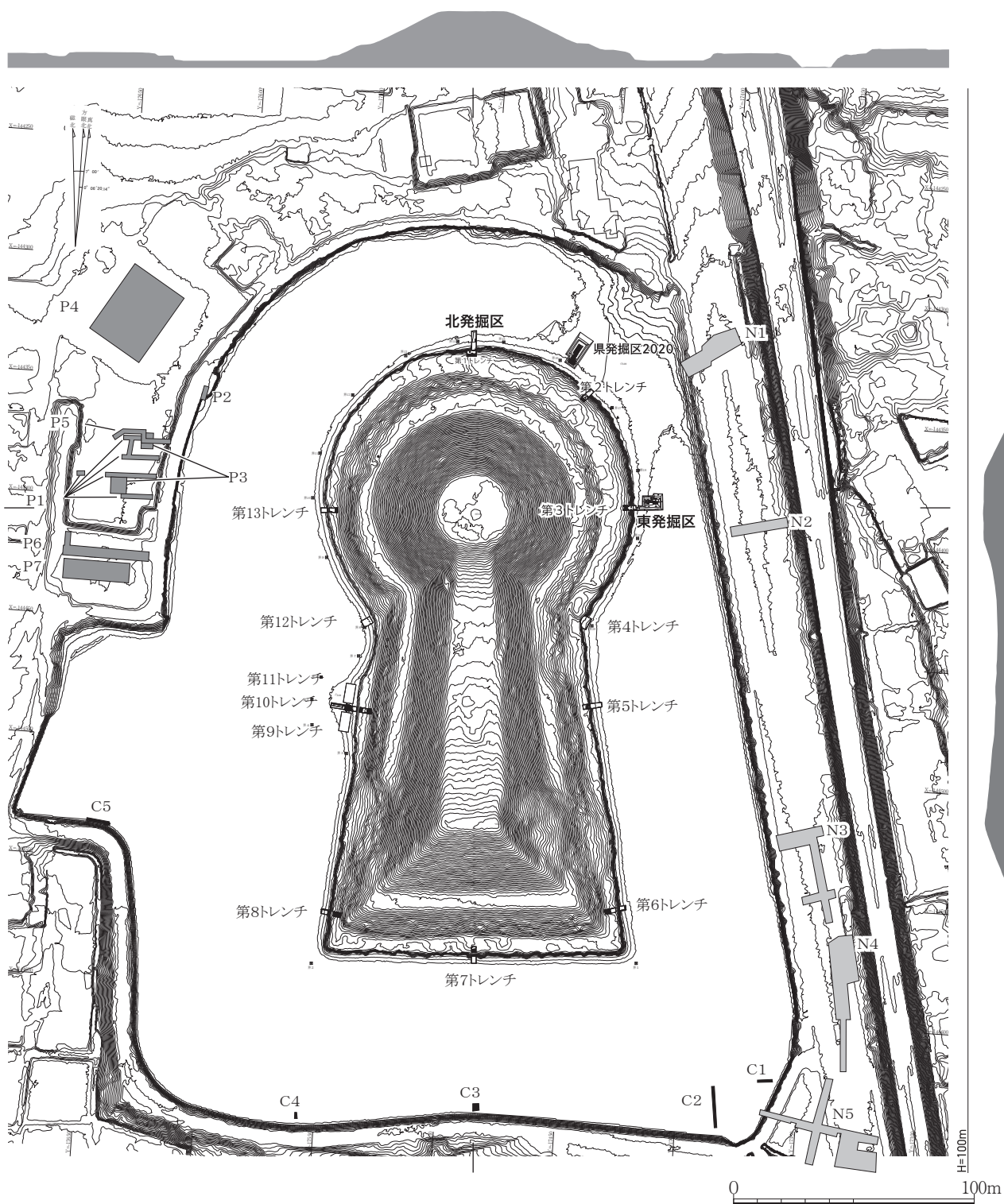
東発掘区 基底石および墳丘1段目斜面の葺石を確認した。ただし、東壁に亀裂が入り崩落を防ぐために養生したことで、基底石は記録のためだけに掘削しすぐに土嚢で埋め戻した。

1段目斜面の葺石は、裾に近い部分のみが残存しており、基底石は葺石に比べてやや大きめの石材を立てるように据えている。基底石は2石分を確認した。基底石の標高は約70.1mである。そこから1段目斜面の葺石を平面長約2m分検出した。葺石残存面での斜面の傾斜角は約16度である。ただし、宮内庁第3トレンチで検出した斜面上端に残存する葺石は、この傾斜と合わず、途中でやや立ち上がりが急になるものと想定できる。葺石



UN第2次調査 北発掘区全景（北西から）

H=100m



2020年度の調査：奈良市（北・東発掘区）、奈良県（後円部北東部発掘区）、宮内庁（第1～13トレンチ）

既往の発掘区

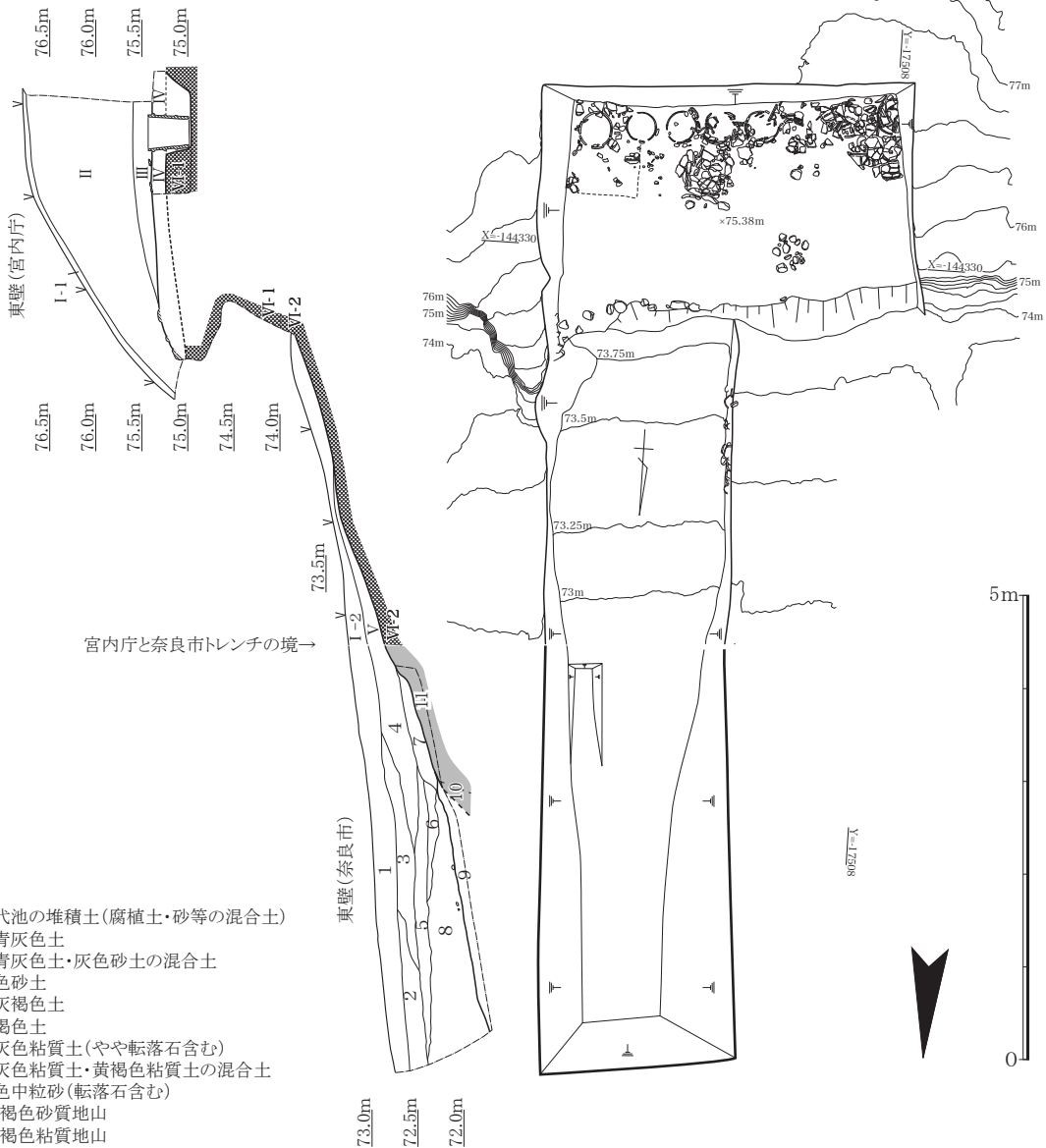
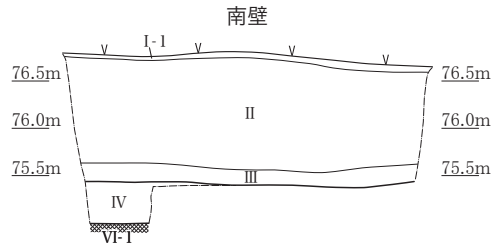
- 奈文研（N1・2【昭44】、N3～5【昭44・45】）
- 奈良県（P1【昭48】、P2【昭51】、P3【昭61・62】、P4【昭63】、P5【平4・5】、P6【平19】、P7【平20】）
- 奈良市（C1～5【平3】）

UN第2次調査 発掘区位置図（1/2,500）

は比較的丁寧に並べられているが、そのなかでもやや大きめの石を基準としてみると、縦・横方向の目地を確認できる。残存する葺石の最も高い部分標高は約70.7mであり、奈良文化財研究所が周濠外側斜面で確認した葺石上端の標高と一致する。これ以上の1段目斜面の葺石は浸食により削られたとみられる。葺石の上面には、そ

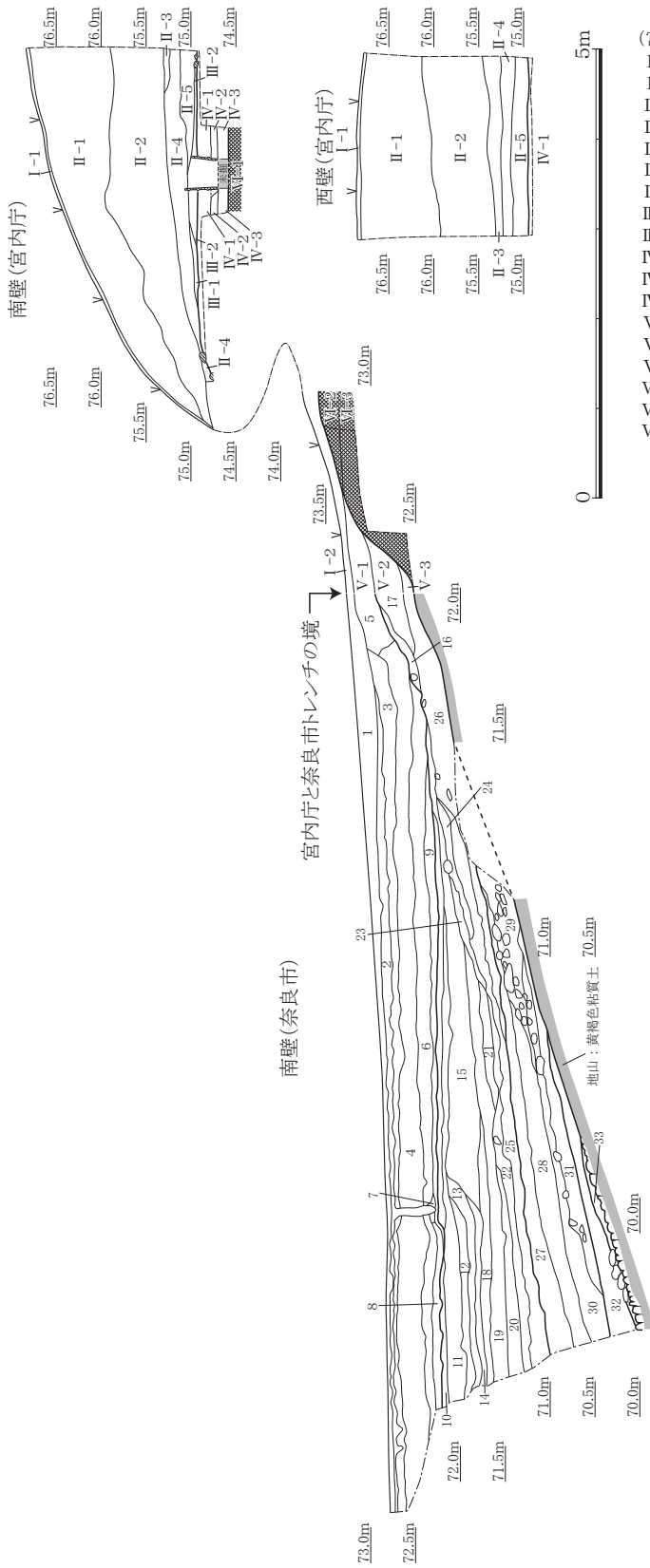
れを覆うだけの粗砂が薄く堆積する。当初は流土の可能性を考えたが、仮に流土であれば下方へ向かって厚くなることや、上部の墳丘で同質の土が認められないことから、搬入され意図的に埋められたものである可能性がある。宮内庁第3トレンチでは、2回の浚渫土が認められるが、東発掘区では19～21層、12～14層付近に掘り込ま

- I-1 表土 細砂 暗褐色
- I-2 表土 粗砂 灰黄色(径約1～3cmの礫が混じる)
- II 後世盛土 粘土～シルト 灰色～褐色
- III 流土 細砂 暗黄褐色
- IV 墳丘盛土 細砂 黄褐色
- V 濠内堆積土 シルト～粗砂 灰色～褐色
- VI-1 地山 粘土～シルト 灰色～褐色
- VI-2 地山 シルト～粗砂 灰色～褐色(径約1～3cmの礫が混じる)



- 1 現代池の堆積土(腐植土・砂等の混合土)
- 2 暗青灰色土
- 3 暗青灰色土・灰色砂土の混合土
- 4 灰色砂土
- 5 暗灰褐色土
- 6 灰褐色土
- 7 青灰色粘質土(やや転落石含む)
- 8 青灰色粘質土・黄褐色粘質土の混合土
- 9 灰色中粒砂(転落石含む)
- 10 黄褐色砂質地山
- 11 黄褐色粘質地山

UN第2次調査 北発掘区・宮内庁第1トレンチ断面図 (1/80: 第1トレンチは宮内庁提供)



(宮内庁第3トレンチ)

- I-1 表土 細砂 褐色
- I-2 表土 細砂～粗砂 暗褐色(径約1～3cmの礫が混じる)
- II-1 後世盛土 粘土～シルト 灰色～褐色
- II-2 後世盛土 粘土～シルト 灰色～褐色
- II-3 後世盛土 粘土～シルト 灰色～褐色(粗砂が多く混じる)
- II-4 後世盛土 粘土～シルト 灰色～褐色(極細粒砂が多く混じる)
- II-5 後世盛土 粘土～シルト 灰色～褐色
- III-1 流土 細砂 暗灰褐色(流土が旧表土となった土層)
- III-2 流土 細砂 暗黄褐色(埴輪片と炭が混じる)
- IV-1 墳丘盛土 細砂 黄褐色
- IV-2 墳丘盛土 細砂 黄褐色(地山起源のシルトブロックが混じる)
- IV-3 墳丘盛土 細砂 灰黄褐色
- V-1 濠内堆積土 粘土～シルト 灰色～褐色
- V-2 濠内堆積土 シルト～粗砂 灰色～褐色
- V-3 濠内堆積土 シルト～粗砂 灰色
- VI-1 地山 粘土～シルト 灰色～褐色
- VI-2 地山 粗砂 褐色(径約1～3cmの礫が混じる)
- VI-3 地山 粘土～シルト 灰色～褐色(礫が少量混じる)

(奈良市東発掘区)

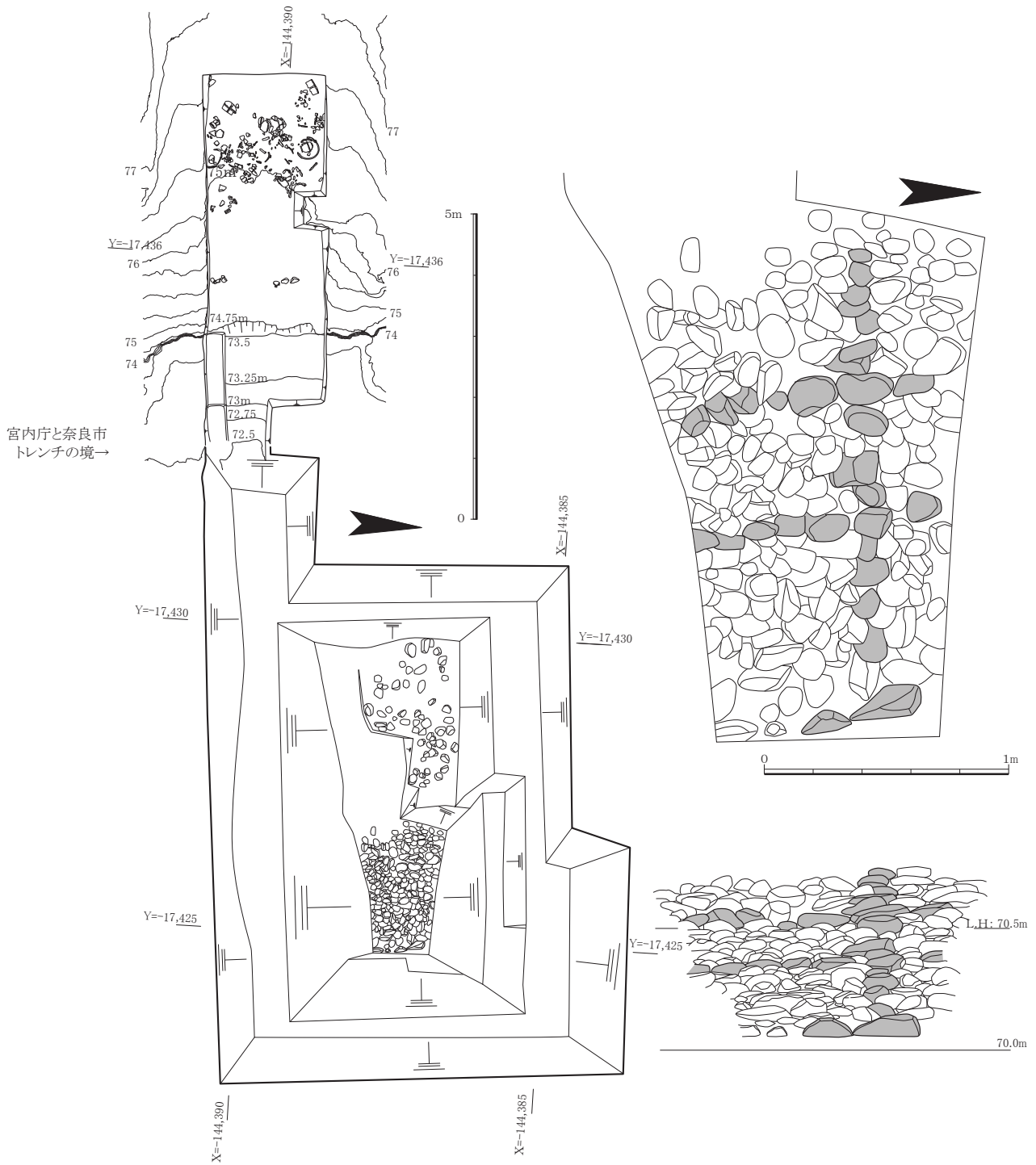
- 1 黒灰色土(現代の池底土)
- 2 灰色土
- 3 明灰色土
- 4 黄褐色土(東へグライ化)
- 5 黄褐色土(地山ブロック土含む)
- 6 明黄褐色土
- 7 明灰色土
- 8 灰色砂・青灰色土混合土
- 9 灰色砂
- 10 青灰色土
- 11 灰色砂
- 12 青灰色土(浚渫後堆積土)
- 13 青灰色土(浚渫後堆積土)
- 14 青灰色土(浚渫後堆積土)
- 15 青灰色土
- 16 灰褐色土
- 17 灰褐色土・黄褐色土混合土
- 18 青灰色土
- 19 青灰色土
- 20 青灰色土
- 21 青灰色土
- 22 灰色砂
- 23 青灰色土・灰色土混合土
- 24 青灰色土・灰色土混合土
- 25 青灰色土
- 26 灰色砂
- 27 灰褐色土
- 28 灰色砂
- 29 明灰色砂(転落石多く含む)
- 30 暗褐色土
- 31 灰色砂
- 32 茶褐色腐植土
- 33 灰色粗砂

UN第2次調査 東発掘区・宮内庁第3トレンチ断面図 (1/80:第3トレンチは宮内庁提供)

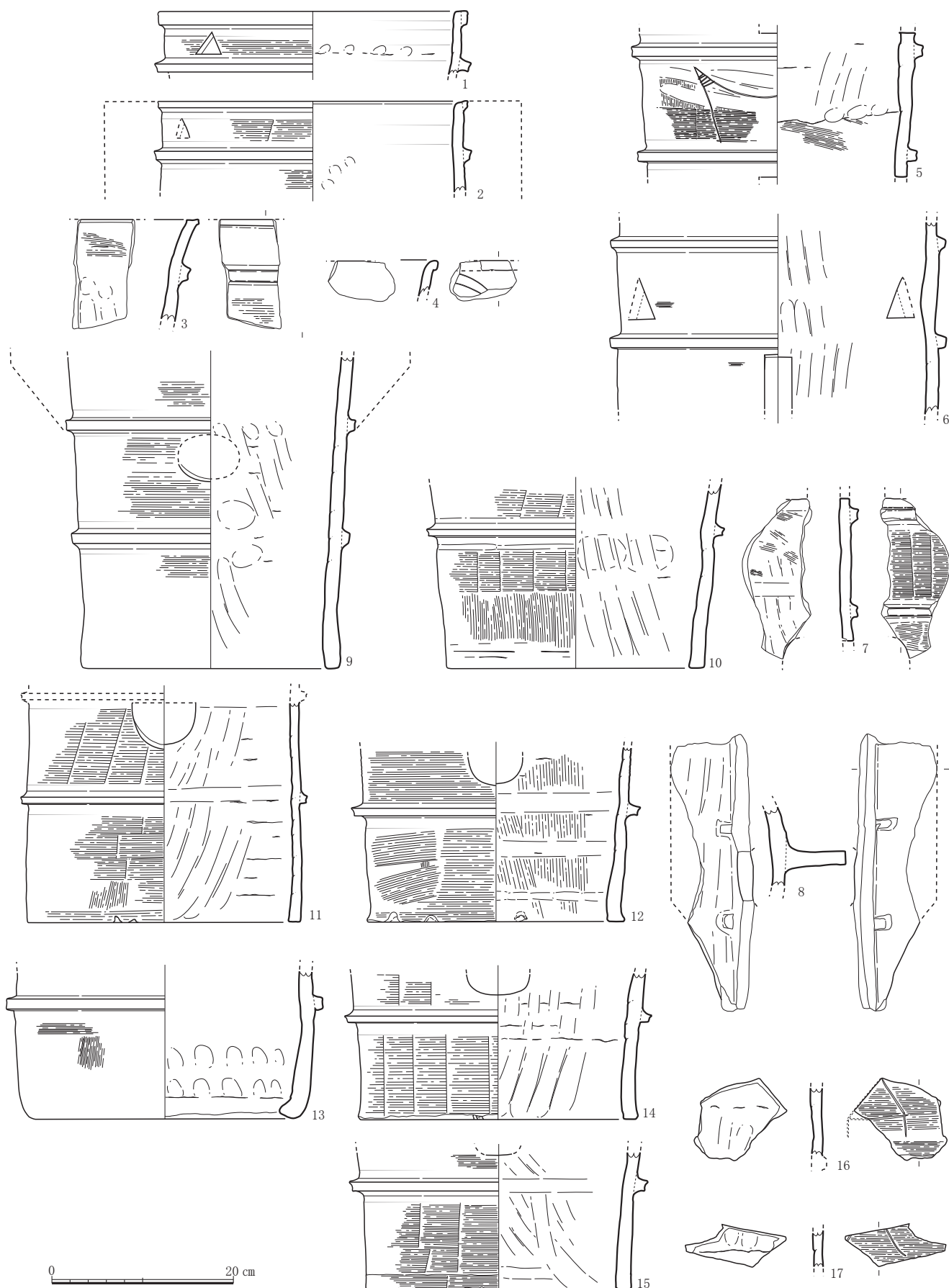
れたような落ち込みが観察でき、対応する可能性がある。
北発掘区 池の水位が下がらなかったため、宮内庁境界
から北側へ約4m、深さ約1.1mまでしか掘削できず、
遺構の検出には至らなかった。

IV 出土遺物

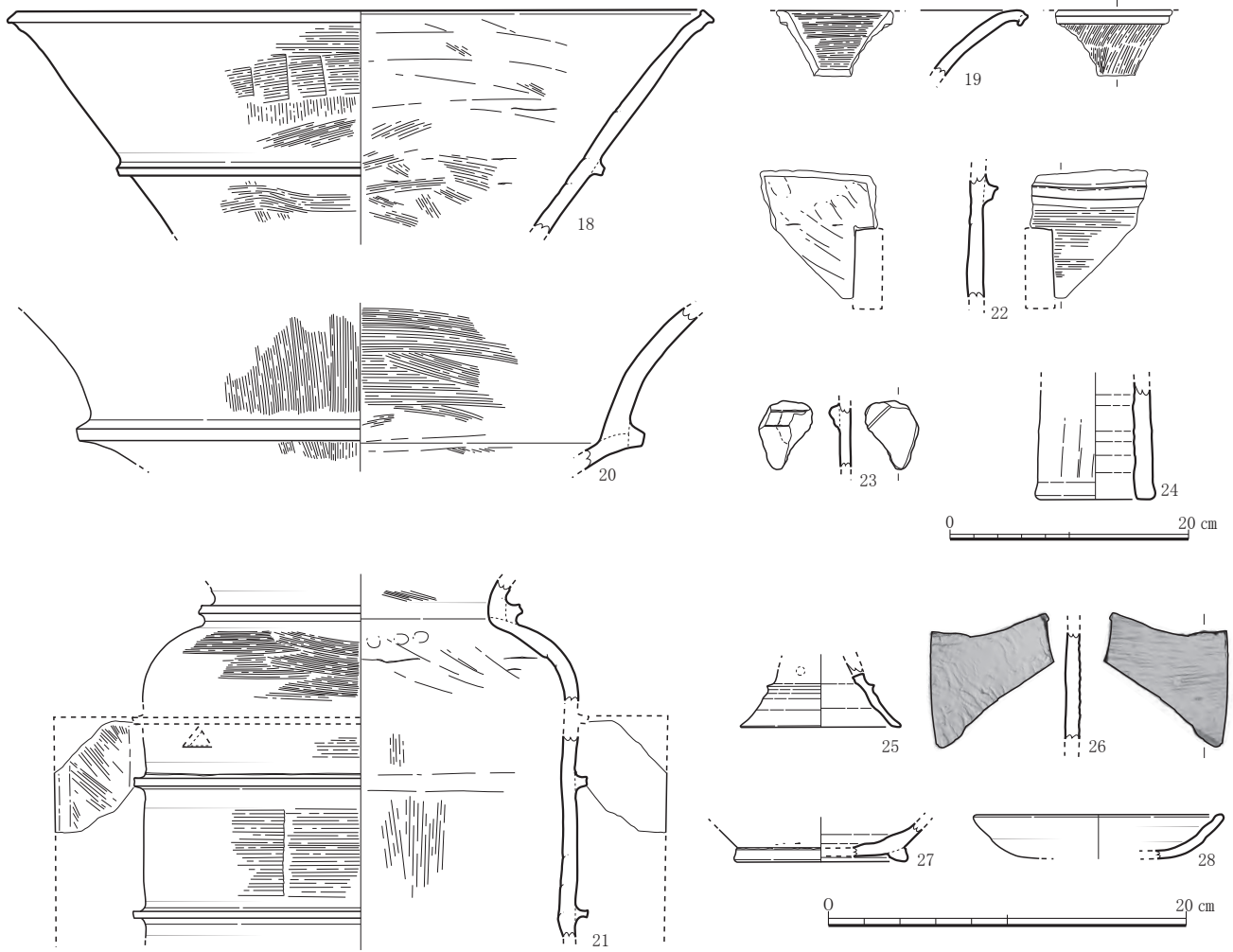
遺物整理箱約10箱分がある。東調査区では、葺石の
間に挟まるようにして9世紀頃の須恵器壺(25)、葺石
上面の茶褐色腐植土から灰釉陶器小片・12世紀の土師



UN第2次調査 東発掘区・宮内庁第3トレンチ平面図(1/100:第3トレンチ図面は宮内庁提供)、葺石平面・立面図(1/25)



UN第2次調査 出土埴輪及び墳丘裾付近での表採埴輪 (1/6)



宮内庁所蔵品



奈良市表採品接合状態



UN第2次調査 出土資料及び墳丘裾付近での表採資料 埴輪:1/6、土器:1/4、須恵器高杯(25) SiM接合図:1/2)

器皿(26)、転落石を含む層から若干の円筒埴輪片(2)、その上層の青灰色粘質土から時期不明の平瓦が出土した。遺物整理箱10箱中8箱分は、調査開始日以降に宮内庁境界標外に散在する埴輪片を地点ごとに表採したも

のであり、鱗付円筒埴輪の各部位片、線刻のある埴輪片、須恵器高杯、土師器片などがある。詳細は観察表にまとめた。(村瀬 陸)

UN第2次調査 出土遺物観察表

番号	出土・表採地点	遺物名	計測値	色調	材質等	備考	登録番号
1	後円部西側くびれ部付近	(鱗付) 円筒埴輪	復元口径 34.0 cm 残高 7.0 cm	暗赤褐色	やや密、2mm以下の砂粒含む。 焼成良好、須恵質	口縁部片。外面ヨコハケ(4~5条/cm)、内面ヨコナデ。 口縁部に小三角形透孔。口縁部高5.5cm。口縁端部は高さ約1.5cmの貼付突帯口縁となる。	0024
2	東発掘区 青灰色粘土、 転落石除去中	鱗付円筒埴輪	復元口径 3.4 cm 残高 10.0 cm	淡黄褐色	やや密、3mm以下の砂粒含む。 焼成良好、須恵質	口縁部片。外面Bd種ヨコハケ(5~6条/cm)、内面ヨコナデ。 口縁部に小三角形透孔。口縁部高5.5cm。口縁端部は高さ約0.8cmの貼付突帯口縁。	0005、 0014
3	後円部西側付近	(鱗付) 円筒埴輪	高さ 12.1 cm 幅 6.7 cm	淡黄褐色	やや粗、3mm以下の砂粒含む。 焼成やや良好。	口縁部片。外面ヨコハケ(4~5条/cm)、内面ハケ・ナデ。 内面の一部に赤色顔料付着。口縁部高5.5cm。口縁部は直立し端部はわずかに面をもつ。	0023
4	後円部西側くびれ部付近	(鱗付) 円筒埴輪	高さ 4.4 cm 幅 7.3 cm	淡黄褐色	やや粗、3mm以下の砂粒含む。 焼成やや良好。	口縁部片。外面に2条の線刻あり。口縁端部は貼付突帯口縁となる。	0024
5	後円部北西側付近	(鱗付) 円筒埴輪	復元胴径 29.8 cm 残高 15.8 cm	淡褐色	やや粗、2mm以下の砂粒含む。 焼成良好。	胴部片。外面B種ヨコハケ(10条/cm)、内面ハケ・ナデ。 外面は赤色顔料がよく残る。突帯間隔11.5cmで、突帯間の外面に線刻あり。突帯の上下に長方形透孔の痕跡があり、一般的なウワナベ古墳の6条7段構成であれば5段目に相当するとみられる。突帯の断面に凹線の痕跡あり。	0042
6	前方部東側中央付近	(鱗付) 円筒埴輪	復元胴径 35.0 cm 残高 21.1 cm	淡黄白色	やや粗、3mm以下の砂粒含む。 焼成良好。	胴部片。外面ヨコハケ、内面ナデ。三角形・長方形透孔の配置から4・5段目に相当するとみられる。突帯間隔11.0cmで、外面にはわずかに赤色顔料が付着する。	0035
7	前方部東側中央付近	鱗付円筒埴輪	高さ 30.5 cm 幅 9.3 cm	淡黄白色	やや粗、2mm以下の砂粒含む。 焼成良好。	鱗部片。円形透孔や突帯の痕跡があり、3~5段目に相当するとみられる。突帯間隔は約11cm。鱗幅は6.5cmで、6と同一個体の可能性あり。	0035
8	前方部南側西隅付近	(鱗付) 円筒埴輪	高さ 17.7 cm 幅 7.6 cm	褐色	やや密、2mm以下の砂粒含む。 焼成良好、須恵質	胴部片。外面Bc種ヨコハケ(8条/cm)、内面ハケ、ナデ。 円形・長方形透孔の痕跡から2~4段目か。突帯間隔10.6cm。	0037
9	後円部西側くびれ部付近	鱗付円筒埴輪	復元底径 28.0 cm 残高 34.3 cm	淡褐色	やや粗、3mm以下の砂粒含む。 焼成良好。	底部片だが接点のない同一個体を図上復元。外面ヨコハケ(6条/cm)、内面ナデ。底部高14.8cm、突帯間隔12.5cm。 鱗は第2段突帯から貼り付け、2段目に円形透孔あり。	0024
10	前方部東側南付近	(鱗付) 円筒埴輪	復元底径 28.1 cm 残高 20.2 cm	淡黄褐色	やや粗、3mm以下の砂粒含む。 焼成良好。	底部片。外面はタテハケのちB種ヨコハケ(8条/cm)で、 底部付近にはタテハケをきる横方向の擦痕あり。2段目もB種ヨコハケだが静止痕跡はやや傾く。内面ナデ。底部高15.2cm。	0032
11	西側造出し南辺付近	(鱗付) 円筒埴輪	復元底径 29.8 cm 残高 24.2 cm	淡橙色	やや粗、5mm以下の砂粒含む。 焼成良好。	底部片。外面は底部をタテハケのちBb種ヨコハケ(4~6条/cm)、2段目はB4種ヨコハケ。内面ナデ。底部高13.7cm、突帯間隔11.3cm程度。2段目に半円形透孔あり。	0019
12	後円部西側くびれ部付近	(鱗付) 円筒埴輪	復元底径 28.0 cm 残高 19.1 cm	褐色	やや密、2mm以下の砂粒含む。 須恵質ではないが硬質	底部片。外面ヨコハケ(4~5条/cm)、内面タテハケのちナデ。 底部高12.5cm。2段目に円または半円形透孔あり。	0024
13	前方部東側隅付近	(鱗付) 円筒埴輪	復元底径 28.0 cm 残高 16.1 cm	淡褐色	粗、5mm以下の砂粒含む。 焼成良好	底部片。外面タテハケのちヨコハケ、内面オサエ。底部から粘土紐を用いて積み上げ。底部高13.2cm。	0028
14	前方部南側西端付近	(鱗付) 円筒埴輪	復元底径 30.2 cm 残高 16.0 cm	橙色	やや密、2mm以下の砂粒少量含む。 焼成良好	底部片。外面Bc種ヨコハケ(3~4条/cm)、内面ナデ。 底部高11.4cm。2段目に円または半円形透孔あり。	0038
15	前方部南側西隅付近	(鱗付) 円筒埴輪	復元底径 29.0 cm 残高 15.0 cm	淡黄白色	やや密、1mm以下の砂粒含む。 焼成良好	底部片。外面B種ヨコハケ(10条/cm)、内面ナデ。底部高11.8cm。2段目に円または半円形透孔あり。	0037
16	東発掘区 青灰粘土層	(鱗付) 円筒埴輪	高さ 9.1 cm 幅 10.1 cm	淡白色	やや粗、2mm以下の砂粒含む。 焼成良好	外面ヨコハケ(8~9条/cm)のち家形のような線刻あり。内面ナデ。	0006
17	東発掘区 青灰粘土層	(鱗付) 円筒埴輪	高さ 4.7 cm 幅 11.1 cm	淡褐色	やや粗、2mm以下の砂粒含む。 焼成良好	外面ヨコハケ(6~8条/cm)のち線刻あり。内面ナデ。	0006
18	後円部北西側付近	(鱗付) 朝顔形埴輪	復元口径 57.4 cm 残高 18.6 cm	暗赤褐色	やや粗、3mm以下の砂粒含む。 焼成良好	口縁部片。外面ヨコハケ(5条/cm)、内面ハケのちナデ。 赤色顔料付着。	0021
19	西側造出し南辺付近	(鱗付) 朝顔形埴輪	高さ 5.5 cm 幅 9.7 cm	暗赤褐色	やや粗、3mm以下の砂粒含む。 焼成良好	口縁部片。外面タテハケ(6~8条/cm)、内面ヨコハケ。 口縁端部はやや屈曲する。	0020
20	後円部西側付近	(鱗付) 朝顔形埴輪	残高 13.5 cm	淡黄白色	やや密、1mm以下の砂粒含む。 焼成やや不良	口縁部片。外面タテハケ(8条/cm)、内面ナデ。内外面ともに赤色顔料付着。	0022
21	前方部南側西端付近	鱗付朝顔形埴輪	復元胴径 38.0 cm 残高 30.0 cm	暗赤褐色	やや密、2mm以下の砂粒含む。 焼成良好で硬質	胴部片。外面Bc種ヨコハケ(3~4条/cm)、内面ハケ。 幅約7cmの鱗がつく。突帯間隔11.0cmで、小三角形透孔あり。	0038
22	後円部西側付近	(鱗付) 円筒埴輪	高さ 10.7 cm 幅 9.8 cm	淡黄白色	やや密、1mm以下の砂粒含む。 焼成やや不良	胴部片。外面ヨコハケ(8条/cm)、内面ナデ。20と胎土等が酷似し表採地点も同様であることから同一個体か。長方形透孔あり。	0022
23	後円部北西側付近	不明形象埴輪	高さ 5.7 cm 幅 4.5 cm	淡黄褐色	やや粗、1mm以下の砂粒含む。 焼成良好	表面に線刻があり、裏面に突帯があることから盾形埴輪等の器財埴輪か。	0021
24	前方部東側中央よりやや 南付近	不明形象埴輪	復元底径 9.4 cm 残高 9.8 cm	淡黄褐色	粗、3mm以下の砂粒含む。 焼成良好	筒状を呈し外面ナデ、内面ヨコナデ。動物埴輪等の脚部か。	0033
25	前方部南東隅部	須恵器 高杯	復元底径 9.6 cm 残高 3.6 cm	暗赤褐色	やや密、2mm以下の砂粒含む。 焼成良好だが断面やや軟質	赤色顔料を塗布して焼成か。『書陵部紀要』70のp91-11と同一個体で接合確認済み。	0026
26	東発掘区 葎石より2層上の 黄褐色土中	須恵器 甕	高さ 7.5 cm 幅 6.9 cm	青灰色	密、ほとんど砂粒なし。焼成良好	時期等は不明	0004
27	東発掘区 葎石間に挟まって 出土	須恵器 壺	復元底径 9.5 cm 残高 2.2 cm	灰色	密、ほとんど砂粒なし。焼成良好	外面はケズリのちロクロナデ。内面に釉薬が付着するが自然釉か。形態的特徴から9世紀前半頃か。	0012
28	東発掘区 地山直上茶褐色 土中	土師器 皿	復元口径 13.8 cm 残高 2.4 cm	褐色	密、1mm以下の砂粒わずかに含む。 焼成良好	口縁部にわずかに段があり、形態的特徴から11世紀頃か。	0009

V 調査所見

本調査では、ウワナベ古墳の規模および築造後の経過、埴輪の様相に関する成果を得ることができた。

i) ウワナベ古墳の墳丘構造

ポイントクラウドの活用 地形の傾斜を色の濃淡で表現した傾斜量図は、地形の微細な起伏や傾斜変換点の表現に優れており、古墳の墳丘形状の読み取りに適している。本報告にあたって、宮内庁より航空レーザ測量で取得された地表の測点データ（ポイントクラウド）の提供を受けた。データはLAS形式で墳丘部分の面積27,386㎡において有効測点は165,896点あり、測点の平均密度は約6点/㎡である。この点群データをQGISで読み込み、20cmメッシュの傾斜量図を作成した。勾配を表現するカラーランプは等間隔分類ではなく、古墳の斜面構造に合わせて最適化している。また、QGISのプラグインであるqProfを用いて断面図を作成した。

墳丘の復元 墳丘第2・3段は前方部側面で2箇所の地すべりがあるほかはほぼ原形を留めており、測量図と宮内庁トレンチの成果から各部を計測した。一方で第1段は濠水の浸食によって大きく削平を受け、榎考発掘区、奈良市東発掘区の2箇所で見出しを確認したのみである。設計の復元に先立ち、浸食によって変形した部分を調査成果から復元する。

まず後円部を検討すると、第1段中心が第2・3段と一致すると仮定すれば第1段直径は153mとなる。宮内庁第1・3トレンチでは第1段斜面上端の葺石とみられる石列を検出しており、第1段斜面幅は10m程度、斜面高4.9m、テラス幅は8m程度となる。

前方部の第1段斜面には発掘調査が及んでおらず、復元的に検討しなければならない。榎考発掘区、奈良市東発掘区での墳丘裾の標高がいずれも約70mで、奈文研調査による周濠底の標高も同程度であり、前方部側墳丘裾の標高も一致すると仮定すると¹⁾、宮内庁第7トレンチで確認された第1段テラスの標高が75.6mであるから、前方部前面での第1段高は5～6mとなる。古墳の斜面は25～30°の傾斜でつくられるのが一般的であるから、第1段前面の斜面幅は10～15m程度と想定できる。第1段テラスの幅は第2段テラスと同じと仮定すれば6.5m前後で、これは宮内庁第7トレンチで確認された埴輪列の位置と矛盾しない。以上から本来の墳丘長は270～280m程度に復元できる。前方部稜線が第1段から第3段まで一直線に並ぶとすれば、前方部幅は150m前後となる。

以上から、当古墳の本来の形状は墳丘長270～280

各部の計測数値

	各部の計測数値		
	後円部	第1段	テラス幅
後円部	第2段	直径	116m
		テラス幅	5m
		高さ	5.2m
	第3段	直径	84m
		墳頂平坦面直径	31m
前方部	第2段	高さ	13.2m
		斜面幅	13m
		テラス幅	6.5m
	第3段	高さ	6.5m
		斜面幅	26m
		高さ	11m

m、後円部径153m、前方部幅約150m、後円部高24m、前方部高23mに復元できる。

周濠の復元 奈良国立文化財研究所（当時）による1969年度調査では、内堤上面外縁に設置された埴輪列が墳丘主軸に平行して確認され、その標高は墳丘第1段テラスとほぼ同じ75m、上面幅は32mである。O・Pトレンチでは内堤内斜面が確認されており、その円弧は周濠北側から西側にかけての現在の汀線とほぼ一致する。奈良市教育委員会が1991年度に実施した第1次調査では、周濠南側を中心に5か所で発掘調査を実施している。既報告では小縮尺の図面が掲載されていたが(安井1992)、第2次調査の報告にあたり、改めて原図から周濠の形状を検討した。周濠南縁では地山の落ち込みが確認され、落ち込みが開始する標高は74m弱である。東側内堤上面よりやや低く、これが元地形の反映か削平の結果かを決することはできないが、確認された落ち込みと近い位置に本来の内斜面上端があったとみてよい。

墳丘北西側の榎考発掘区では、内堤外斜面と外濠が確認されている。外濠は後円部北西側で途切れるが、これが陸橋等の施設による区画か、外濠が全周していないことによるのかは不明である。奈良市第1次調査第5発掘区の成果を踏まえれば、周濠西側は前方部側がやや広がる盾形となる可能性がある。

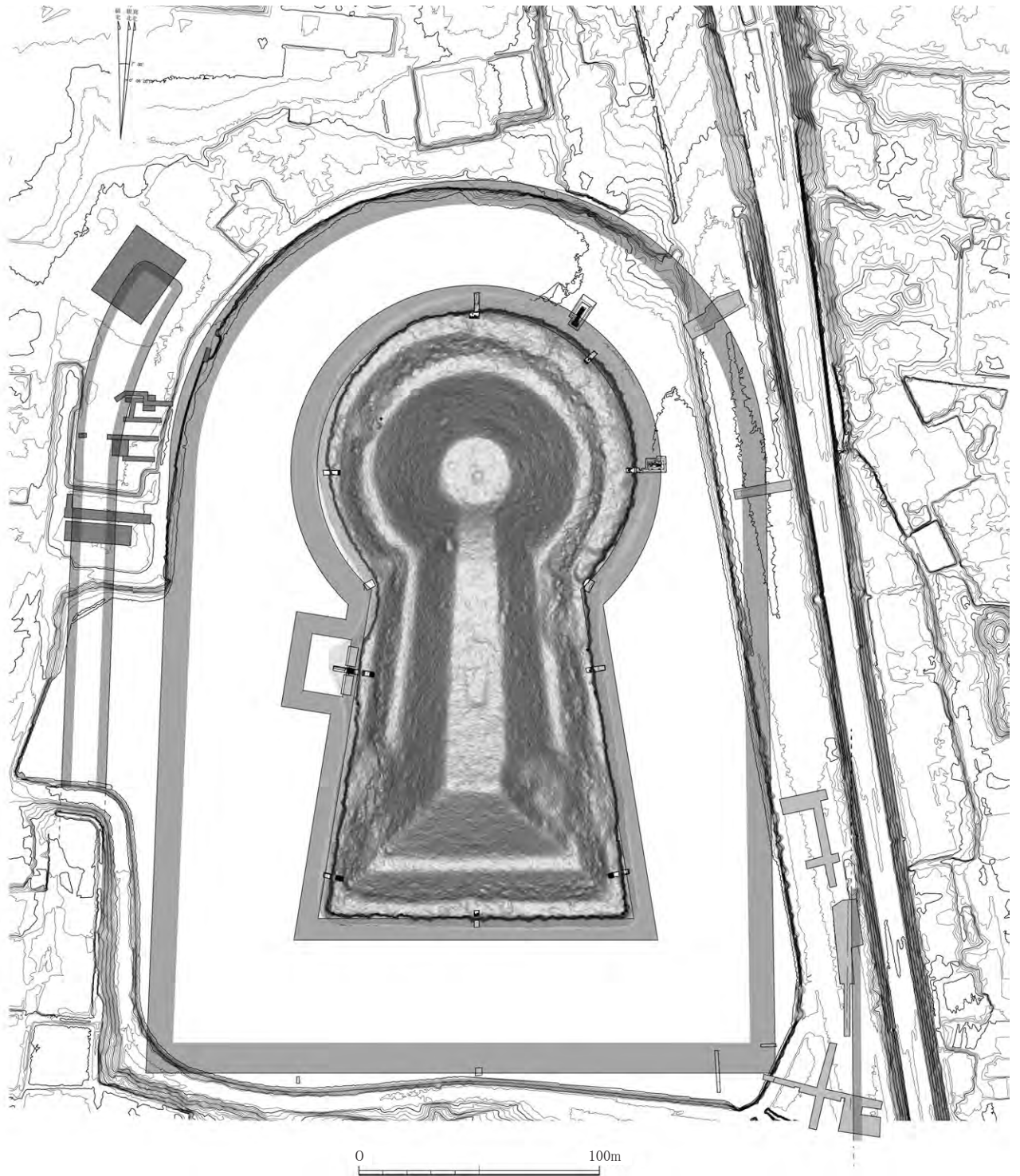
周濠の構造については部分的な復元とせざるを得ないが、現時点の調査成果をまとめて復元案を提示した。尾根の迫る東側は西側に比べ内濠の幅が狭く、全体として左右非対称である。

後円部径n等分値論の検証 前方後円墳の設計原理については膨大な研究の蓄積があり、基本単位（モジュール）の存在は共通理解となりつつあるが²⁾、基本単位の設定については諸説あり一致を見ない。すなわち、後円

部径を何等分かした値を基本単位として全体を割り付ける設計が齊一的に採用されたとする「後円部径 n 等分値論」のほか、各古墳の設計にあたって個別に割付が考案されたとする見解がある。前者は n の値をめぐって、身度尺の大尋・小尋を基準とする後円部径の $1/8$ (石部ほか 1979)、「古墳尺」による後円部径の $1/24$ (沼澤

2006)などを基準とする説がある。

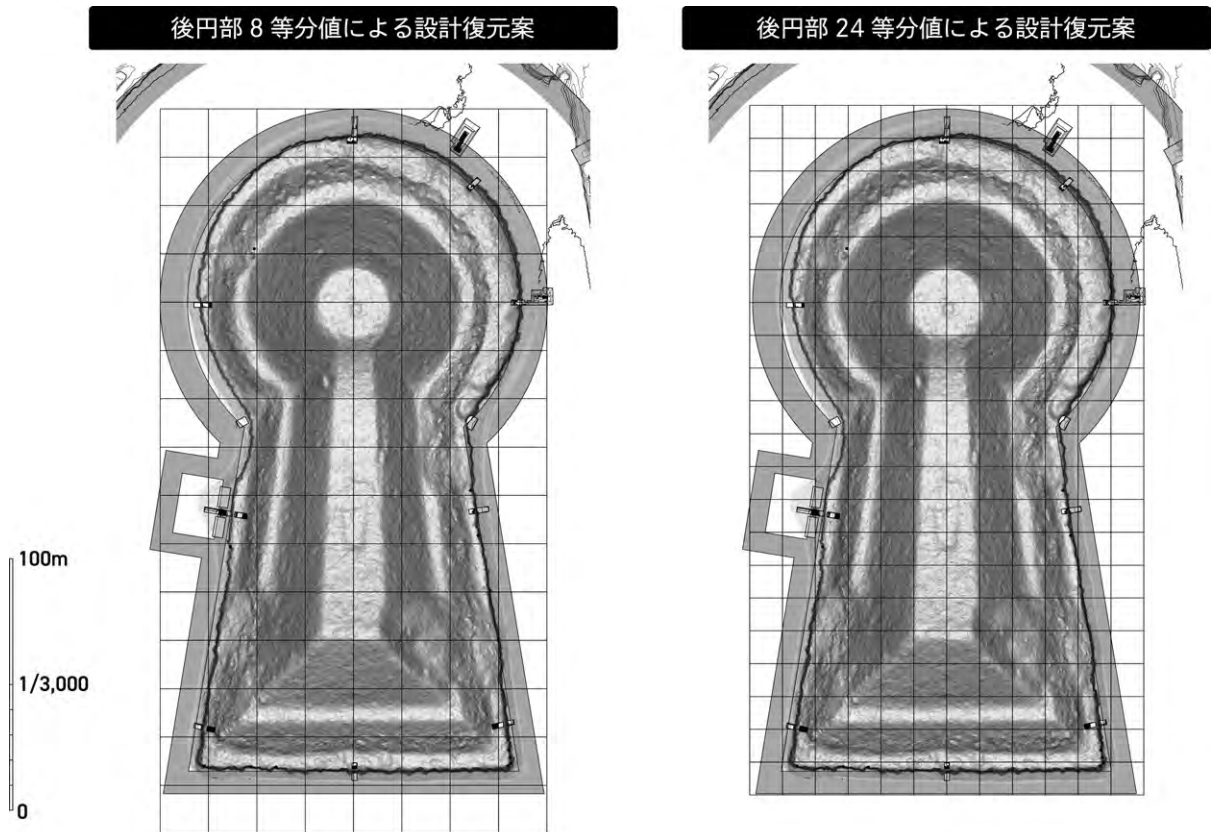
墳丘各部が良好に遺存する大型前方後円墳であるウワナベ古墳は、これら諸説の有効な検証材料である。本稿ではまず、従来の研究で有力視されてきた後円部径 n 等分値論のうち、8等分値説と24等分値説の有効性を確認しておく。



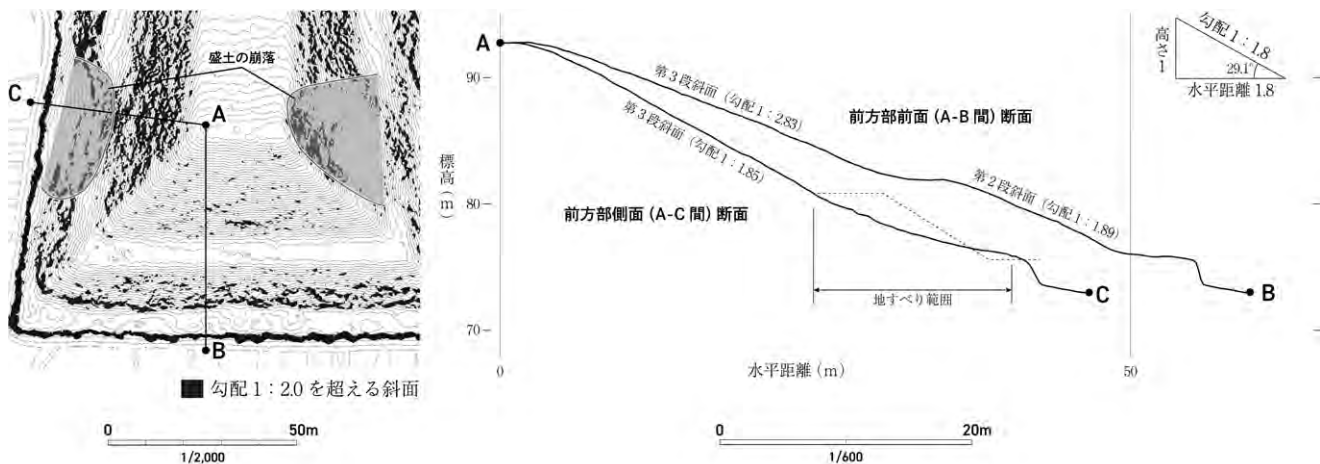
ウワナベ古墳復元案 (S : 1/2,500)

まず、後円部8等分値説を検証する³⁾。後円部直径の1/8は19.1mとなり、大尋(『約160cm前後から164cm』)を159cmとしたときの12尋に相当する。1区12尋の方眼を後円部に当てると、第2段裾が半径3単位の円に近似するほかは有意な一致を見ない。また、5・6・7・8区のいずれかの値をとるとされる前方部長は、6区とすれば前方部1段目斜面幅を極端に短く見積もらねばならず、7区とすれば反対に極端に長く見積もる必要がある。

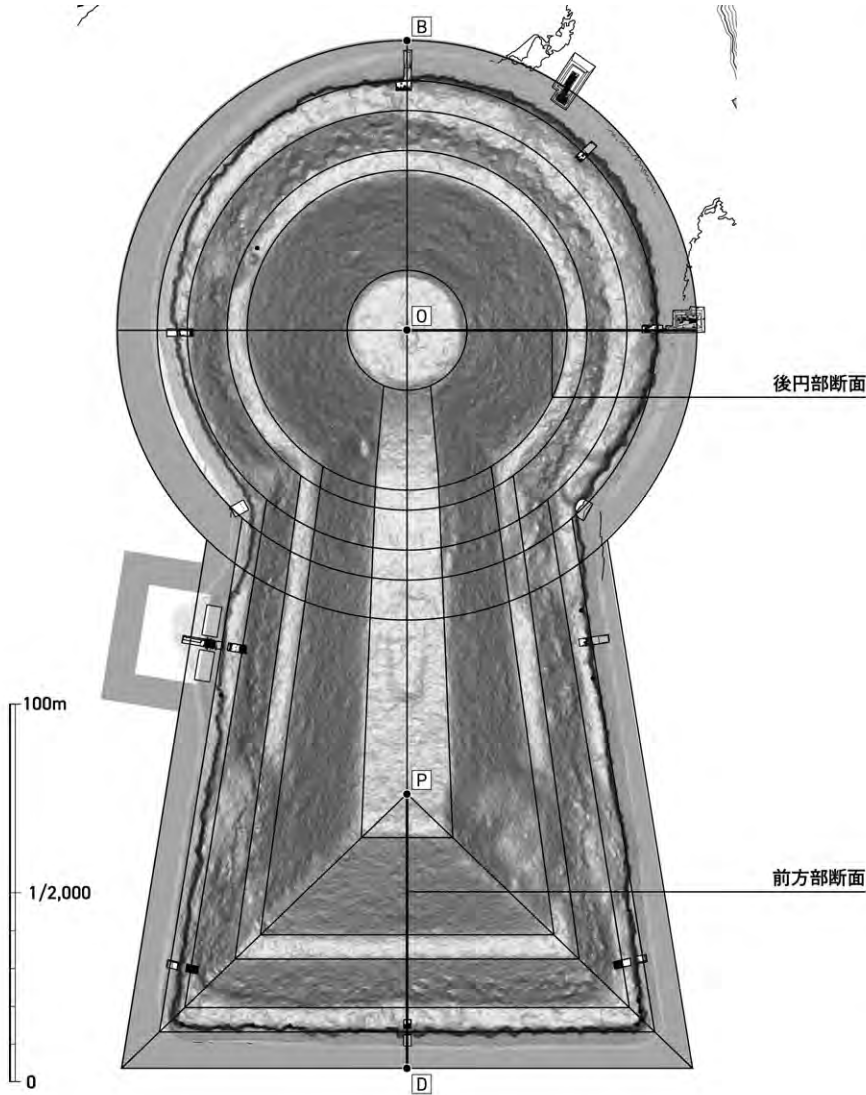
続いて後円部24等分値説だが、沼澤は古墳尺(22.9cm/尺, 6尺=1歩)によって後円部径が6歩刻みで序列されたとする厳密なランキングを想定している。沼澤が提示した規格の中でウワナベ古墳の後円部に最も近いのは、後円部復元径よりわずかに大きい、1区が4.75歩(6.51m)となる直径114歩(156.2m)の規格である。これに基づく方眼を重ね合わせると、後円部では方眼との一致は認められず、前方部でも前縁が一致するのみで第2段テラスなどは方眼に乗らない⁴⁾。



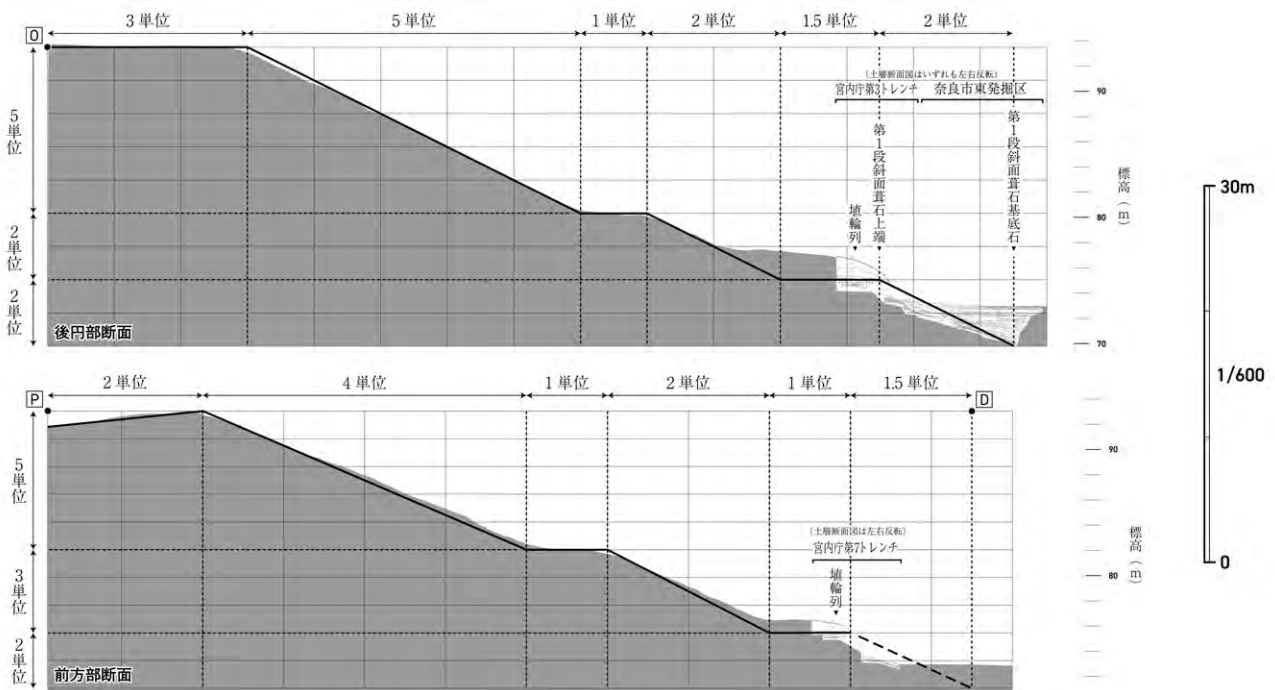
n等分値論の検証



前方部の斜面構造



後円部	基本単位 (歩)	3.5
	基本単位数	14.5
	段築平面比	2 : 1.5 : 2 : 1 : 5 : 3
	第1段高 (歩)	3.5
	第2段高 (歩)	3.5
	第3段高 (歩)	8.75
後円部高 (歩)	後円部高 (歩)	15.75
	第1段斜面勾配	1:2.0
	第2段斜面勾配	1:2.0
第3段斜面勾配	第3段斜面勾配	1:2.0
	基本単位 (歩)	4.25
	基本単位数	11.5
前方部	段築平面比	1.5 : 1 : 2 : 1 : 4 : 2
	第1段高 (歩)	3.0
	第2段高 (歩)	4.5
	第3段高 (歩)	7.5
	前方部高 (歩)	15.0
	第1段斜面勾配	1:2.83
第2段斜面勾配	第2段斜面勾配	1:1.89
	第3段斜面勾配	1:2.27
	前方部最大幅 (歩)	100
全体の構成	BO:OP:PD (歩)	50.75 : 81.2 : 48.875
	BO:OP 比	1:1.6
	後円部比率	0.56
	要請墳丘長 (歩)	180
	設計墳丘長 (歩)	180.825
	調整長 (歩)	-0.825
使用尺度	尺長 (m)	0.2515
尺度	歩長 (m)	1.5089



ウワナベ古墳の設計

以上の検討から、後円部径の8等分値や24等分値を全体の割付の基本単位とする方法では、当古墳の形状を整合的に説明することが難しいことが明らかになった。ウワナベ古墳の設計 大型前方後円墳の精密な測量成果に立脚した新納泉による成果は、前方後円墳の設計原理に関する研究の到達点と言える（新納2018）。その有効性はすでに多くの古墳で確認されているが（城倉2016、柴原2020・2021）、整美な墳丘を留め、かつ発掘調査によって確実な定点が明らかになった当古墳でも有効性を検証しておきたい。

新納によって示された設計原理の骨子は、

- ①中国公定尺を使用していること
- ②後円部・前方部のそれぞれに基本単位があり、その倍数値によって平面・立面の割付をしていること
- ③斜面の安全勾配⁵⁾の概念を組み込んでいること
- ④墳丘長を切りの良い値とするための調整が行われること、である。

まず、墳丘全体の設計の骨組みとなるBO:OP比を検討しよう。BO長は後円部半径であるから76.5mとなる。前方部稜線を延長した直線の交点であるP点はO点から122.5mの地点に求めることができる。前方部稜線は整美な形状を留めており、計測誤差は1m以内に収まるだろう。このことからBO:OP=1:1.601≒1:1.6となる。

次に後円部の平面構造を検討する。後円部テラスは第1段と第2段で幅が異なるが、幅の狭い第2段テラス幅5.3mを1単位として同心円を描くと、墳頂平坦面半径3単位、第3段斜面幅5単位、第2段斜面幅2単位、第1段テラス幅1.5単位、第1段斜面幅が2単位に一致する。墳頂平坦面のみ同心円から外れるが、これは平面形やや潰れた楕円形であることに起因しており、これが当初設計とは考えにくいため施工誤差と思われる。立面構造を確認しておくと、各段の高さは第1段から5.1m、5.2m、13.2mとなり、比率は2:2:5となる。各段の高さは斜面幅のちょうど半分となり、斜面勾配が安全勾配範囲内の1:2.0になるように設計されている。

同様に前方部を検討すると、第2段テラス幅6.4m

を1単位として、P点から第3段斜面上端までは2単位、第3段斜面幅4単位、第2段斜面幅2単位に一致する。第1段は復元に基づくしかないが、テラス幅1単位、斜面幅1.5~2単位程度であろう。立面構造は第3段高11.0m、第2段高6.5m、第1段高4.4m（復元値）となり、比率は5:3:2となる。第1段斜面幅を2単位とすると、斜面勾配が1:3.0に近い極めて緩い勾配となってしまうため、同幅は1.5単位と見積もっておくと、第2段はやや急な1:1.89、第1・3段はやや緩やかな1:2.27（復元値）、1:2.83に設定されている。

では、なぜ前方部前面斜面は後円部斜面よりも緩やかに設計されているのだろうか。この点を考える上で注目したいのが前方部側面の斜面である。前方部前面（A-B間）と前方部側面（A-C間）の断面形を比べると、第3段斜面高がほぼ同じ一方、後者は斜面幅が短く、結果として急勾配になっている。その勾配は平均1:1.85で、幅が20mを越える長大な盛土斜面の限界である1:1.8に近い。仮に前方部第3段前面斜面を後円部と同じ1:2.0勾配で設計した場合、側面ではそれ以上の急勾配が発生することになるため⁶⁾、余裕をもたせた設計にしたのだろう。その一方で、第2段はテラスを後円部側より高くするという意匠の実現を優先した結果、側面で安全勾配を越える急斜面（1:1.62）が発生しており、結果として大規模な地すべりを起こしている。

前方部側面では、宮内庁第8・10トレンチで第2段斜面裾が確認されており、両者を結んだ直線は前方部前面（主軸に直交する直線）に対して81度の角度で交わる。第3段側線もこれに平行しており、現状ではまったく確認できないが第1段側線も同様であろう。前方部稜線は前面に対して44°の角度で斜交する。新納は前方部稜線と側線の設定について、直交する二辺の長さが整数比となる直角三角形によって決定されたとし、当古墳で側線と稜線の角度を（底辺長）:（高さ）で示すと、側線角度は1:6、稜線角度は直角二等辺三角形よりわずかに広がる25:24に近似する。後者はやや複雑な比率を考えねばならず、むしろ前方部幅が使用尺度における完数値で設計した可能性を考えたい。



UAVレーザ測量による植生の記録（三重県女良塚古墳）

前方部墳頂平坦面の最高点は南東端の標高 93.2 mで、後円部に近づくにつれ緩やかに低下し、鞍部では 5.4 m 低い 87.8 m となる。後円部頂との比高差は 5.7 m である。ここで、設計に使用された尺度を復元する。古墳時代に使用された尺度は古墳築造企画のほか、掘立柱建物の検討からも導かれており、前期から中期中葉までは 23.1cm/ 尺の漢尺に由来する尺、中期中葉以降は 25 ~ 26cm/ 尺の南朝尺が使用されたとする見解が有力である（甘粕 1965、岸本 2004、道上 2022）。当古墳の場合、23cm 前後の尺では完数值とならず、25.15cm の尺（1.509 m / 歩）を与えると整合的な成果を得る。すなわち、後円部基本単位 3.5 歩、前方部基本単位が 4.25 歩となり、墳丘長は 180 歩となる。先程保留した前方部幅を 150 m 程度とすれば、演繹的な推論ではあるがちょうど 100 歩に設定された可能性が高い。以上の検討から、各部に当時の尺度での寸法を与えて設計図を復元した。

小結 発掘調査成果から当古墳の形状を復元し、その設計を検討した。当古墳の設計にあたって設定された基本単位は後円部と前方部でそれぞれ異なり、それはテラス幅に一致することを確認した。新納による設計原理の原則を追認したほか、当古墳の前方部構造が高度な土木工学的調整を経て設計されていることを示した。一方、前方部幅については稜線の平面比率ではなく完数值で設計された可能性が高いこと、墳丘の地すべりが発生した部分は本来的に無理のある設計であることを確認した。

なお、墳丘構造の分析にはポイントクラウドを活用した。古墳の航空レーザ測量成果は急増しているが、その多くが等高線図や段彩図などに加工した最終出力のみの公開に留まり、その元データとなるポイントクラウドが公開されることは皆無である。しかしながら本稿で実践したように、ポイントクラウドを活用することで墳丘構造を多角的に検討することが可能になる。今日の研究水準では墳丘の平面形を検討するだけでは不十分であり、ポイントクラウドを活用した分析の蓄積が急務となる。加えて、近年の土木工事の現場では「i-Construction」に代表されるように ICT の導入が著しく、ポイントクラウドは調査後の保全工事での設計・出来高管理の現況データとして汎用性が高い。さらに、航空レーザ測量は墳丘を覆う植生を含めて計測するため、地形のみならず林相の記録も可能である。大型古墳を定期的に調査する機会のある機関については、ポイントクラウドを積極的に活用・公開することが望まれる。

（柴原聡一郎）

ii) ウワナベ古墳築造後の経過

東発掘区では、1 段目斜面のなかでも裾に近い位置で、葺石間に 9 世紀の須恵器壺片が刺さった状態で出土した。このことは、9 世紀の段階で 1 段目斜面の葺石が露出状態であったことを示す。この状態に至る過程として① 5 世紀前半の築造後、約 400 年間葺石が自然に露出状態を保っていた可能性、② 築造後、人為的に露出状態を保っていた可能性、③ 9 世紀頃に露出させるような整備が行われた可能性の主に 3 通りが考えられる。

①を考える上で、周濠をもつ古墳の調査事例を確認する。奈良市杉山古墳では、濠底が基底石よりも低く、腐植土は周濠部にだけ堆積し、葺石面は奈良時代までさほど堆積がなかったようである。一方、大阪府津堂城山古墳では濠底の高さが基底石とさほど変わらず、基底石付近にも腐植土が堆積して覆われていた。

ウワナベ古墳では、樞考研調査区の成果によると基底石より濠底が約 0.3 m 低いいため、杉山古墳のように斜面には堆積しなかったと考えられる余地がある。また、杉山古墳周濠の腐植土堆積は奈良時代までの約 300 年で約 0.3 m の堆積がある。古墳の規模や環境が異なるため一律に評価できないが、周濠の深さが約 0.3 m であることは 9 世紀頃まで基底石付近には堆積がなく露出状態を自然に保っていた可能性がある。

②について一般的な古墳では考え難いが、ウワナベ古墳だからこそあり得る場合がある。ウワナベ古墳は、佐紀古墳群の一角にあり、同時期では菅田御廟山古墳につぐ規模を誇る。史料研究では応神紀以降、比較的実在性を認める立場が優勢であり（生田 2021）、ウワナベ古墳の被葬者が記紀にみる皇族に関連する可能性は高い。また、平安時代に編纂された『延喜式』の延喜諸陵寮式陵墓のなかでは、磐之媛命陵が「平城坂上陵」として記録されている。「平城坂」が大型古墳の隣接するウワナベ越えを指す可能性が高いと考え、コナベ・ウワナベ・ヒシャゲ古墳のいずれかを、平安時代には磐之媛命陵として管理していたとみられる（現在はヒシャゲ古墳を治定）。ウワナベ古墳はこのなかでは最大規模であり、当時は磐之媛命陵にあてられていた可能性がある。今回は 9 世紀頃の事象であるため、③に関わる陵墓としての整備の可能性もあるが、諸陵寮による陵墓管理が平安時代以前に遡るのであれば、②の可能性は成立しうる。この点は今後陵墓調査が進むことで明らかになる可能性があるが、現状では判断できない。

一方、平城宮北方には奈良時代に松林苑が広がっていたことが『続日本紀』の記載から想定されており、これ

に関連する遺構もみつまっている。そのなかでも、コナベ古墳の陪塚である大和 20・26 号墳では、周濠を改変し墳丘を丘に見立てた苑池として再整備していることが明らかになっている。そこで重要なのが、今回の榎考研調査区の周濠でみつかった敷石である。周濠は基底石より約 0.3 m 深い位置で底となるが、基底石と同一面には葺石と同質の石材が重なり合わず面的に広がっていた。榎考研報告でもこれを古代における整備の可能性を指摘しているが、さらにその可能性を補強してみたい。

東発掘区での葺石上面にはそれをわずかに覆う程度の粗砂が堆積していた。砂の堆積が一樣であることから、人為的に施された可能性が高い。そして、榎考研調査区では敷石の下に堆積する腐植土中にこれと同質の砂が混じることを確認している。つまり、葺石面で出土した 9 世紀の須恵器壺は、概ね葺石を砂で覆った時期を示すものと考えることができる。また、この砂が混じる腐植土層の上面に敷石がみられることは、敷石が 9 世紀頃に施工されたことを間接的に示すものと考え。ただし、榎考研調査区で検出した葺石上面には砂の堆積がなかった。これについては、葺石～周濠を覆うシルト質泥炭層で墳丘側により多くの砂が混じる所見が得られていることから、覆っていた砂の多くが流れたことを示す状態とみてよい。このような整合性からみても、周濠の敷石は 9 世紀頃の整備とみることができる。

以上の評価、および大和 20・26 号墳等の事例があることをふまえると、ウワナベ古墳も松林苑に関わる整備がなされた可能性がある。ただし、今回の調査は極一部であることから、整備の規模や全体像が不明確であり、どの可能性を追求できるかは今後の調査によるところが大きい。

以上のように 3 つの可能性をもとに検討を進めたが、①については理論上成り立つものの 9 世紀の土器が出土したことを説明できない。②については、史料から平安時代における陵墓管理の説明は可能であるが、その他の陵墓調査の進展をふまえて検討すべき問題である。現状では③の可能性が最も高いと考えるが、前述の通り新たな問題意識をもった調査が今後必要である。しかしながら、当初は想定していなかった人為的な整備があったことは疑いなく、貴重な調査成果であるといえる。

最後に、これらの整備後の経過についても述べる。1 段目斜面の葺石や濠底の敷石は、再び腐植土により覆われる。この土のなかには、9 世紀頃の灰釉陶器片や 12 世紀の土師器皿が含まれており、9～12 世紀にかけて堆積したものとみられる。つまり、9 世紀の整備後まも

なく維持管理がなされなくなったことがわかる。堆積土の状況からみて、12 世紀まではあまり水が溜まらない状態を維持していたようで、概ね 12 世紀前後の段階で水が溜まり墳丘 1 段目斜面の浸食がはじまる。ただし、この段階は水深も浅く、有機物が濠底に緩やかに堆積しうる環境下にある。この状況が大きく変化したのが、土層断面にみる褐色土と青灰色土の境目であり、以後現在のように比較的水深のある溜池となったことがわかる。出土遺物がないため、時期の特定は困難であるが、東発掘区の褐色土上面には大地震の痕跡とみられる火炎構造を確認することができた。中近世における大地震としては慶長地震 (1605 年) があり、仮にこれが妥当であれば、溜池化したのはその直前期にあたとみられる。

iii) ウワナベ古墳出土埴輪について

概要 ウワナベ古墳出土埴輪は、B c・B d 種ヨコハケを施す窖窯焼成品で、その規格からみても 5 世紀前半頃に位置づけられる埴輪として知られてきた (鐘方 1997)。一方、5 世紀前半としては特異な鱗付円筒埴輪であり、口縁部高が短いなど II 群埴輪の形態的特徴を復古させていることが特徴である。

一般に、中期古墳出土円筒埴輪の編年は、各法量の縮小傾向、および B 種ヨコハケの採用比率をもととしている (木村 2022)。しかし、筆者はウワナベ古墳前段階のコナベ古墳出土埴輪に大きく 3 つの規格 (コナベ A 規格: 底部高 16.5cm 前後、突帯間隔 13.5cm 前後、コナベ B 規格: 底部高 14.5cm 前後、突帯間隔 12.5cm 前後、コナベ C 規格: 底部高 13cm 前後、突帯間隔 11cm 前後) が存在し、それがウワナベ古墳出土埴輪にも継続して認められることを明らかにした (村瀬 2022)。そして、一般にコナベ古墳よりウワナベ古墳の法量が縮小していると評価されるのは、より縮小した規格の採用比率が増加することに起因することを述べた。具体的に、コナベ古墳では墳丘出土資料 (宮内庁書陵部 2011) として報告された 40 点のうち、コナベ規格 A : B : C = 4 : 4 : 1 であったのに対し、ウワナベ古墳内堤出土資料 (奈文研 1974) は観察できた 68 点のうち、概ね A : B : C = 1 : 2.6 : 2.7 であった。コナベ古墳出土埴輪はすべて野焼き焼成であることからコナベ→ウワナベ古墳であることは確実である。このような共通する規格を採用していてもその比率が縮小傾向をもって異なることは、時間差を反映している可能性が高い。

今回実施した同時調査ではウワナベ古墳の墳丘樹立埴輪の様相が飛躍的に明らかとなった。そこで、墳丘と堤の樹立埴輪の規格を比較することで、統計的にみてどの

ような違いがあるのかを検証してみたい。

墳丘出土埴輪の分析 前提として、ウワナベ古墳出土埴輪はコナベA～C規格のほかに、底部高と突帯間隔が12・11cmで均等になる規格（口縁部は短く割付か）の存在が知られる。これらはコナベ古墳出土埴輪には認められないもので、縮小規格の採用比率が増加するとともに、新たな縮小規格としてこの段階に現れたものである。次に、墳丘出土埴輪については、宮内庁が1段目平坦面で検出し取り上げた資料が基準となるが、その数は少ない。そこで、宮内庁および奈良市が墳丘周囲で表採した資料も墳丘側の資料とみなして検討する。

墳丘出土資料は、本報告資料、樞考研報告資料（樞考研2022）、宮内庁報告資料（宮内庁書陵部2006・2019・2022）と2020年調査時の宮内庁表採資料がある。宮内庁2020年表採資料は未報告であるが、調査協定書に基づき令和4年7月19日に資料調査し計測を行なった。これらを規格ごとの数量比として表にまとめた。

これをみると、墳丘・内堤ともにコナベB・C規格が主体を占めており、コナベ古墳との対比で明らかにした規格の採用比率は古墳全体としてみても有効である。このことは、縮小規格の採用比率が増加傾向にあれば、相対的に新しくなる可能性を明示した結果といえる。

新たに明らかになった点として、墳丘資料には内堤資料と比較してコナベA規格が少なく、12・11cm均等規格の割合が多い傾向を読み取れるが、その要因については主に2つの可能性を指摘できる。ひとつは、これまで述べてきたように縮小した規格の割合が高いことを時期的に新しい要素とみて、堤より墳丘の埴輪群を新しく考えることである。ただし、一般的に古墳築造は墳丘→堤の順で整備すると想定されるため矛盾する。それをふまえたもうひとつの可能性として、均等規格が朝顔形埴輪と対応する場合が考えられる。これまでウワナベ古墳の埴

輪として知られてきた内堤埴輪列では朝顔形埴輪の存在が認められなかった（奈良国立文化財研究所1974、大澤2022）。しかし、墳丘では今回の調査を含めて普遍的に朝顔形埴輪の存在が明らかとなっている。規格別数量比をみると、コナベC規格+均等規格の合計比率は墳丘資料の方が高くなるが、コナベC規格に限ってみると内堤資料の方が高い。つまり、墳丘資料での均等規格が目立って多いことは、朝顔形埴輪の有無に対応すると考えると辻褃が合う。ただし、これを検証するには朝顔形埴輪の規格（底部高・突帯間隔）を明らかにする必要があるが、それには全形復元が条件となり、現状困難である。

以上のように、2通りの可能性を提示したが、いずれも条件が不足するため断定できない。しかし、墳丘と堤では規格でみた場合に明らかな差が認められることは事実である。今後調査に進展があればその点を明らかにできる可能性がある⁷⁾。

埴輪列について 今回の調査は宇和奈辺陵墓参考地（ウワナベ古墳）調査に関する協定書を締結して三者が同時調査を行なった。一般に陵墓への立ち入りはできないが、協定書第1条-2に基づき、調査中は三者が協力して調査を進めるなかで、宮内庁トレンチでの埴輪列設置状況を確認する機会を得た。埴輪列に関する所見はすでに公表された（宮内庁書陵部2022）が、筆者の所見と異なる部分があるため、自身の見解を記しておきたい。

まず、調査中に三者の間で奈良市発掘区と接続する宮内庁第1・3トレンチの埴輪列上面検出時に掘方の有無が議論になった。宮内庁は掘方が無いとの見解で、近年調査された百舌鳥御廟山・土師ニサンザイ古墳に事例があり、大型古墳では掘方を掘削せず埴輪を設置することが往々にしてあるのではないかと説明を受けた。しかし、筆者は宮内庁第1トレンチ検出面で鱗が原位置に残存した状態で埋没する個体の存在からみて、ウワナベ古墳の埴輪は2～3段目から鱗が取り付くため、設置時に底部を深く埋めている可能性を考えた。さらに、奈良市が継続調査する大型円墳の富雄丸山古墳では、埴輪の設置後に掘方内を一度埋めた後に別工程として化粧土を施していること、西側に隣接するウワナベ古墳前段階のコナベ古墳では掘方があり、残存状態の良好な部分では設置後の盛土（化粧土）が確認されていることから、単に化粧土上面で掘削を止めていることにより掘方が見えていない可能性を指摘し、断割調査の必要性を進言した。

我々も協力することを前提として宮内庁第1・3・7トレンチの一部を断割調査していただき、結果として想定した通り化粧土を外すと掘方を確認することができ

ウワナベ古墳出土埴輪の規格別数量比

	A	B	C	均12	均11(10)
宮内庁報告2006	0	2	3	0	0
宮内庁報告2019	0	0	1	0	2
宮内庁報告2022	0	0	2	0	3
宮内庁2020表採	4	20	13	6	13
樞考研報告2022	0	0	0	0	1
奈良市本報告	0	2	3	1	1
墳丘資料合計	4 (5%)	24 (31%)	22 (29%)	7 (9%)	20 (26%)
奈文研内堤1974	10	26	27	5	0
奈良市内堤1997	1	0	3	2	1
内堤資料合計	11 (15%)	26 (35%)	30 (40%)	7 (9%)	1 (1%)

た。しかし、埴輪の設置工程については最終的に見解の一致を得ず、以下にその相違点をまとめておきたい。

宮内庁は『書陵部紀要』第73号〔陵墓篇〕の報告のなかで、第1・3・7トレンチの埴輪列の構造模式図を提示した。まず、第1トレンチの埴輪列設置について、地山面から布掘りして設置したとみる点は同一見解である。しかし、宮内庁は掘方を埋めると同時に第3段突帯まで墳丘盛土（IV）でテラス面まで完成させたと評価した。一方、筆者の所見は掘方の高さ＝第2段突帯までを一度埋めた土と、第3段突帯までを埋めた土が異なると記録している。検証できるものとして、『書陵部紀要』第73号〔陵墓篇〕の図版17-2では第2段突帯より上は下部より明るい褐色土であることが読み取れる。つまり、筆者は大和北部地域の前代までの大型古墳同様に、埴輪の設置・固定作業とその後の化粧土の工程が異なると判断した。

次に第3トレンチであるが、宮内庁の報告内容がそもそも矛盾した状態であることに問題がある。つまり、墳丘盛土面から掘方を掘削し埴輪設置後にテラス面まで盛土で成形したと述べながらも、「ただし、埴輪列西側の墳丘盛土が埴輪と接していることから布掘りではなく墳丘構築過程で埴輪を設置した可能性（要約）」も合わせて指摘している。一方で、墳丘盛土（IV-2）上面で検出した埴輪No.4付近では検出平面でも掘方ラインを図示している。先に筆者の所見を述べると、墳丘盛土（IV-2）上面から掘方を掘削して埴輪設置後に掘方内を埋め、化粧土（墳丘盛土IV-1）で第2段突帯まで埋めてテラス面を構築したと記録している。宮内庁は埴輪の西側で盛土が接していると評価したが、第3トレンチでは埴輪の西側を30cm弱しか断割しておらず、第1トレンチでは埴輪から約30cmでようやく掘方の立ち上がりが見えはじめる。とくに第3トレンチは第1トレンチとは異なり盛土面から掘方を掘削しているため、掘方内部の埋土と外側の盛土は非常に判断が難しい。このような場合、本来は少なくとも検出している埴輪部分全体を墳丘盛土（IV-2）上面まで下げて平面検出し、壁際は少なくともトレンチ端まで断割調査する必要がある。また、埴輪No.5の下部（未掘）も含めて断割調査し墳丘盛土（IV-2）の落ち込み方を確認しなければ到底判断できない。とはいえ、墳丘盛土（IV-2）上面が埴輪の第1段突帯の高さに合い東側は確実に落ち込むこと、埴輪No.4の墳丘盛土（IV-2）上面でも掘方ラインが見えたことが筆者の所見を裏づける理由である。

最後に第7トレンチであるが、宮内庁は地山を浅く布

掘りするが、それを掘り込み面まで埋めた後に埴輪を据えて墳丘盛土で第2段突帯まで埋めてテラス面を成形したと報告している。これを単純に解釈すれば掘方は埴輪を設置するためのものというよりは、埴輪列の位置決めのような理解になろうか。少なくとも第1・3トレンチのように埴輪の底部を固定するための掘方とは異なる意義を見出す必要性が生じる。筆者の所見によれば、墳丘盛土（IV-1）として報告された土層は2層に分層でき、IV-1下層上面の高さがほぼ埴輪の第1段突帯の高さであった。これを客観的に検証できるのは『書陵部紀要』第73号〔陵墓篇〕の図版33-2で、図面ではIV-1層として単一表記されているが、写真図版では明らかに土色の異なる2層に分層されており、下層上面が第1段突帯の高さに対応していることがわかる。そして、この墳丘盛土（IV-1下層）上面から掘方の落ち込みを視認した。つまり、地山上の墳丘盛土面（IV-1下層）から掘方を掘削し、埴輪を設置後埋め戻して固定し、墳丘盛土＝化粧土（IV-1上層）で第2段突帯まで埋めてテラス面を成形するという順序である。この理解が妥当であれば、埴輪の下部に見られた墳丘盛土（IV-2）は掘方内の高さを調整するための置土と解釈することができる。

以上の点を筆者の所見をもとにまとめれば、基本的に掘方の掘り込み面が地山（第1トレンチ）と墳丘盛土（第3・7トレンチ）という違いはあるが、掘方の掘削→埴輪の設置→埴輪の固定（掘方内を埋める）→化粧土でテラス面まで成形する、という順序が共通する。宮内庁の認識と大きく異なるのは、化粧土としての工程があるかどうかである。この点はここまで述べてきた掘方の掘削面等の認識が影響するものであり、筆者なりの所見をもとに説明した。

（村瀬 陸）

附. 宇和奈辺陵墓参考地航空レーザ測量概要

宇和奈辺陵墓参考地では、令和2年（2020）の事前調査に先立ち、令和元年に当参考地の周濠水位が下がり、墳丘の外周形状が良くわかる時期になるのを待ってから、航空レーザ測量を含む宇和奈辺陵墓参考地整備工事予定区域現況測量事業を実施した。

航空レーザ測量の目的としては、濠水による墳丘浸食状況の確認、精確な測量基準の作成、事前調査におけるトレンチ配置検討資料の作成などである。

航空レーザ測量の計測測線を当参考地の主軸に合わせて南北に設定した第1回目の計測では、地形の判読に十分なデータを得ることができなかつたため、計測測線を当参考地の主軸に対して直交する東西に変更して、第2

回目の計測をおこなった。その結果、微地形も明瞭に判読可能なデータを得ることができた。

航空レーザ測量により作成した当参考地の三次元立体地図により、従来の等高線図では表現が難しかった微細な起伏も読み取ることが可能となった。例えば、三次元立体地図では、斜面から平坦面へと変化する前方部墳頂中央付近に南北に長い平面長方形の窪みが確認できるが、大正15年(1926)に帝室林野局が測量した2m間隔等高線の陵墓地形図だと窪みは全く確認できず、25cm間隔等高線の令和元年測量図でも窪みの詳細な形状を把握することは難しいのである。そのため、今後は用途に応じた測量の方法、地図の種類を選択する必要がある。

新たに計測した測量成果は、令和4年3月刊行の『書陵部紀要』第73号〔陵墓篇〕において公開し、宮内庁ホームページ内「書陵部所蔵資料目録・画像公開システム」の発行物一覧からも閲覧可能である。また、新規測量データは、宮内庁と同時調査をおこなった奈良県と奈良市へ提供し、それぞれの自治体が調査する際や報告の作成でも使用され、本報告書においても活用されている。

(宮内庁書陵部陵墓課陵墓調査室)

註

- ウワナベ古墳周辺の地形は北の平城山丘陵から派生する南向きの緩傾斜となっている。したがって、実際には前方部側の墳端は後円部側よりもわずかに低くなっている可能性が高い。一方で宮内庁調査によって確認された埴輪列の標高を確認すると、後円部主軸上の第1トレンチでは75.3m、前方部主軸上の第7トレンチでは75.4mであり、第1段テラスは水平になるように施工されている。
- 前方後円墳の設計原理の復元案には、方格を用いるもの以外に同心円の組み合わせによるものがある。基本単位の存在を想定している点では両者は同じ現象を説明しているが、同心円によって説明できるのは平面形だけであり、立面形の説明は困難である。古墳が立体構造物である以上、設計原理の復元に求められるのは平面形と立面形を統一的かつ簡潔に説明することであり、同心円を用いた説明はこの要件を満たさない。
- 石部らの8等分値論に対しては岸本直文による具体的な検証作業がある(岸本2004)。
- 近年、沼澤は仲津山古墳の航空レーザ測量図を用いた検討を行っているが(鈴木・沼澤2017)、そこには陵墓地形図に基づく旧復元案にはなかった「1/2単位」、「1/3単位」の調整が示されている。過剰な細分は反証可能性が低く、後円部径の1/24という単位が画一的に使用されたとする見解の限界を示しているように思われる。
- 盛土の安全勾配は盛土材料に規定されるが、一般に斜面高が5m以下の場合に1:1.5、5m以上の場合に1:1.8~2.0と定められている(日本道路協会2010)。
- 当古墳以外にも、上石津ミサンザイ古墳や誉田御廟山古墳、大仙陵古墳などの大型古墳でも当該部位に地すべり地形が認められる。誉田御廟山古墳については直下を走る誉田断層の影響も大きい。中期前半における前方後円墳の急激な大型化によって長大な斜面幅が出現した結果、前方部第3段側面が安全勾配から外れる事例が増加したことが共通の背景に想定される。こうした事態を回避するには前方部幅を広げ側面の斜面幅を広く確保する必要がある。その結果として土師ニサンザイ古墳のように前方部幅が後円部直径を凌駕する前方後円墳が設計されたと想定している。

7) 宮内庁表採資料の調査に際し宮内庁書陵部陵墓課の横田真吾・田中詢弥両氏には格別のご高配を賜りました。記してお礼申し上げます。また、本稿はJSPS 科研費20H0131363および(公財)高梨学術奨励基金による令和4年度若手研究助成の成果の一部を含む。

引用文献

- 甘粕健 1965 「前方後円墳の研究 - その形態と尺度について -」 『東洋文化研究所紀要』 第37冊 東京大学東洋文化研究所
- 生田敦史 2021 『記紀氏族伝承の基礎的研究』 和泉書院
- 石部正志・田中英夫・堀田啓一・宮川穂 1979 「畿内大形前方後円墳の築造企画について」 『古代学研究』 第89号 古代学研究会
- 大澤正吾 2022 『ウワナベ古墳出土埴輪図録-平城第60次調査L区 中堤外周埴輪列』 奈良文化財研究所
- 鐘方正樹 1997 「中期古墳の円筒埴輪」 『史跡大安寺旧境内1』 奈良市教育委員会
- 岸本直文 2004 「前方後円墳の墳丘規模」 『人文研究』 第55巻2号 大阪市立大学大学院文学研究科
- 木村理 2022 「古墳時代中期の円筒埴輪」 『埴輪の分類と編年』 埴輪検討会
- 宮内庁書陵部 2006 「宇和奈辺陵墓参考地採集の埴輪について」 『書陵部紀要』 第57号
- 宮内庁書陵部 2019 「平成29年度墳丘外表面調査の成果報告-宇和奈辺陵墓参考地-」 『書陵部紀要』 第70号〔陵墓篇〕
- 宮内庁書陵部 2022 「宇和奈辺陵墓参考地整備工事予定区域事前調査」 『書陵部紀要』 第73号〔陵墓篇〕
- 柴原聡一郎 2020 「前方後円墳の墳丘長の規格性」 『東京大学考古学研究室研究紀要』 第33号
- 柴原聡一郎 2021 『馬塚古墳測量調査報告書』 (伊勢湾岸所在古墳の測量調査) 1
- 倉正祥 2016 『山室姫塚古墳の研究』 早稲田大学東アジア都城・シルクロード研究所
- 鈴木俊夫・沼澤豊 2017 「レーザ測量図を用いた古墳当初設計の復元及び墳丘体積の計算: 仲津山古墳を例として」 『古代』 第140号 早稲田大学考古学会
- 奈良県立橿原考古学研究所 2017 「佐紀古墳群」 『奈良県遺跡調査概報(第2分冊) 2015年度』
- 奈良県立橿原考古学研究所 2022 「ウワナベ古墳」 『奈良県遺跡調査概報(第1分冊) 2021年度』
- 奈良国立文化財研究所 1974 『平城宮発掘調査報告VI』
- 奈良市教育委員会 1992 「ウワナベ古墳外堤の調査」 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成3年度』
- 新納泉 2018 「前方後円墳の設計原理と墳丘大型化のプロセス」 『国立歴史民俗博物館研究報告』 第211集 国立歴史民俗博物館
- 日本道路協会 2010 『道路土工-盛土工指針 平成22年度版』 丸善出版
- 沼澤豊 2006 『前方後円墳と帆立貝古墳』 雄山閣
- 道上祥武 2022 「建築遺構からみた古墳時代から古代の尺度の変遷」 『古代学研究』 第231号 古代学研究会
- 村瀬陸 2022 「コナベ古墳併行期の埴輪生産とその規格」 『埴輪論叢』 第11号 埴輪検討会

6. 令和2年度実施 遺跡有無確認踏査一覧

令和2年度の遺跡有無確認踏査は3件実施した。

No.	受理番号	調査地	踏査日	事業面積 (㎡)	事業者	事業内容	調査所見
1	H1.4001	疋田町四丁目 143 の一部他	R2. 8. 5	29,884.89	三都住建(株)	宅地造成	踏査の結果、遺物が採取されたため遺構の有無確認の試掘調査をおこなった。その結果、全面に遺構がある可能性が高いと判断した。本調査が必要となり、令和2年度、元興寺文化財研究所により発掘調査が実施された。
2	R2.4001	針ヶ別所町 355 番、356 番、357 番、360 番、361 番の1、376 番	R3. 2. 4	58,574	㈱日本エコロジー	太陽光発電設備設置	遺物、遺構とも確認できなかった。
3	R2.4005	南庄町 50 番、51 番、52 番、53 番	R3. 3. 5	50,889	㈱森高建設	岩石採取	遺物、遺構とも確認できなかった。

7. 令和2年度実施 工事立会一覧

令和2年度に土木工事に関わって延べ127件の立会を実施した。

No.	受理番号	遺跡	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	立会調査	
							日付	結果
1	R1.3478	右京六条四坊十二坪	六条三丁目6-24-4	一建設(株)	分譲住宅新築	宅地	R2. 4. 1	GL-1.4m 盛土1.2m 道路面から0.1mで灰色粘土(地山)0.2m以上
2	R1.3415	東紀寺遺跡	東紀寺町一丁目60番1号	(大)奈良女子大学	排水設備工事(配管の埋設及び汚水樹の設置)	学校用地	R2. 4. 2	No.1敷地北辺中央:GL-2.2m 盛土1.0m、以下地山の黄灰色砂礫0.6m、黄灰色砂質土0.6m以上
							R2. 4. 3	No.2敷地北西隅:GL-3.0m 盛土2.1m、黄灰色砂礫(地山)0.9m以上
							R2. 4.14	No.3:GL-3m 盛土2.5m、黄褐色砂礫(地山)0.5m以上
							R2. 4.14	No.4:GL-2m アスファルト0.1m、以下地山の黄褐色砂礫0.7m、黄褐色砂質土0.5m以上
							R2. 4.21	No.5:GL-3.5m 黒灰色土(表土)0.1m、淡褐色砂質土(運動場造成土)1.2m、黒灰色土(盛土)0.7m、黄褐色砂質土(地山)1.5m以上
							R2. 4.27	No.6:GL-3.5m 黒灰色土(表土)0.1m、淡褐色砂質土(運動場)0.7m、黄褐色砂質土(地山)1.5m以上
						R2. 4.30	No.7:GL-2.3m 盛土1.3m、黒灰色土(耕作土)0.2m、灰色砂質土0.2m、淡灰色砂質土0.25m、黄褐色砂質土(地山)0.35m以上	
3	R1.3403	右京二条四坊十四坪	疋田町一丁目3-1、3-2及び3-3、3-4の各一部	(株)英和	宅地造成	宅地 水田	R2. 4. 3	GL-2.0m 黒褐色土(表土)0.3m、黄灰色砂質土(地山)1.7m以上
4	R1.3375	右京四条一坊二坪	四条大路四丁目89-4、1048-1	関西電力(株)	電柱・支線新設	宅地	R2. 4. 6	GL-1.1m 盛土0.8m、黒灰色土(耕作土)0.1m、灰色土0.1m、淡黄灰色土0.1m以上
5	R1.3454	左京三条六坊十坪	中筋町13番1、13番3	個人	賃貸住宅新築	宅地	R2. 4. 6	GL-0.4m 砕石0.1m、黒褐色土(表土)0.3m以上
6	R1.3474	左京二条七坊北郊奈良町遺跡	多門町3番6	個人	個人住宅新築	宅地	R2. 4. 7	GL-0.9m 盛土0.75m、黒灰色土(耕作土)0.15m、以下灰色粗砂
7	R1.3370	左京九条四坊五坪	東九条町93番1	(株)NTT	携帯電話基地局設置	宅地	R2. 4.10	GL-1.0m 盛土0.75m、黒灰色土(耕作土)0.25m以上

No.	受理番号	遺跡	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	立会調査	
							日付	結果
8	R1.1123	史跡大安寺旧境内附石橋瓦窯	大安寺四丁目 1127 番地 1 の一部	個人	既存建築物の解体及び一戸建住宅の建築	宅地	R2. 3.30	先端翼径 300 mm、350 mm の鋼管打設確認
							R2. 4.10	GL-0.3 ~ 0.4 m 敷地北端盛土 0.4 m 以上、南東
							R2. 6. 1	GL-1.2 m 給水管掘形北壁: アスファルト 0.15 m、盛土 0.55 m、暗灰色砂質土 (SX 01 埋土) 南壁: アスファルト 0.15 m、盛土 0.4 m、灰褐色土 0.6 m 以上
9	R1.3459	左京四条五坊十四坪	杉ヶ町 54- 2	個人	共同住宅新築	宅地	R2. 4.14	GL-0.4 m 黒褐色土 (表土) 0.4 m 以上
10	R1.3416	右京四条三坊五坪	五条一丁目 57- 5、57- 6、57- 8 の各一部	個人	個人住宅新築	宅地	R2. 4.15	GL-0.2 m 盛土 0.2 m 以上
11	R1.1165	史跡東大寺旧境内	雑司町 90、98、102- 2、102- 4、103- 4、104- 4	奈良市長	ブロック塀の改修 (ブロック塀撤去後目隠しフェンス新設)	学校用地	R2. 4.16	ブロック塀: 既存基礎高さ約 0.4 m 分を残し撤去 目隠しフェンス: 基礎掘形 GL-0.3 m 黒褐色土 (表土) 0.3 m、以下褐灰色土
12	R1.3514	左京四条一坊八坪	四条大路三丁目 934 番、935 番の各一部	個人	個人住宅新築	宅地	R2. 4.20	GL-0.44 m 盛土 0.44 m 以上
13	R1.3247	右京六条四坊十三坪	六条三丁目 1069 番 1 の一部	個人	個人住宅新築	雑種地	R2. 4.20	GL-0.2 m 盛土 0.2 m 以上
14	R1.3532	東紀寺遺跡	東紀寺町二丁目 10-1 ~ 二丁目 6- 6	大阪ガス (株) ネットワークカンパニー	ガス管理設	道路	R2. 4.23	No.1 : GL-0.7 m アスファルト・盛土約 0.3 m、以下暗黄褐色粘土 (地山)
							R2. 4.27	No.2 : GL-0.8 m アスファルト 0.05 m、砕石 0.1 m、黄褐色砂礫 (地山) 0.65 m 以上
							R2. 4.30	No.3 : GL-0.7 m アスファルト 0.05 m 砕石 0.1 m 以下盛土 (道路南側排水溝及び水道管の掘形埋土) 0.55 m 以上
							R2. 5. 7	No.4 : GL-0.7 m アスファルト 0.05 m、砕石 0.1 m、黒灰色土 (耕作土) 0.25 m、黄褐色砂礫 (地山) 0.3 m 以上
15	R1.3471	左京二条七坊一坪	西笹鉾町 16 番 6	個人	個人住宅新築	宅地	R2. 4.27	GL-0.9 m 黒灰色土 (表土) 0.3 m、灰色土 0.2 m、褐灰色土 0.4 m 以上
16	R1.3504	東四坊大路	法蓮町 701 番 1、702 番 5、710 番、711 番	(株) ヒラサワ住宅	宅地造成	水田道路	R2. 4.28	GL-1.5 m 盛土 0.8 m、黒灰色土 (耕作土) 0.2 m、灰色土 (床土) 0.1 m、黄褐色土 (地山) 0.4 m 以上
17	R1.3489	左京二条五坊北郊	法蓮町 799 番 1	個人	宅地造成	水田	R2. 5. 7	GL-1.1 m 砕石 0.2 m、黒灰色土 (耕作土) 0.2 m、灰色土 0.15 m、淡黄灰色土 0.4 m、黄褐色砂質土 (地山) 0.15 m 以上
18	R1.3422	右京北辺二坊四坪	山陵町 163 番 1	個人	農業倉庫新築	宅地	R2. 5. 8	GL-2.3 m 黒灰色土 (耕作土) 0.2 m、灰色土 0.3 m、以下地山の黄灰色砂質土 0.5 m、暗灰色砂質土 0.5 m、淡灰色粘土 0.8 m 以上
19	R1.1183	史跡大安寺旧境内附石橋瓦窯	大安寺二丁目 1299 番 1	(宗) 大安寺	庫裡の離れ増築工事及び盛土工事	寺地	R2. 5. 8	東側: GL-0.3 m 黒灰色土 (耕作土) 0.2 m、盛土 0.3 m 以上
							R2. 5.13	西側: GL + 1.2 m 1.2 m の高さ迄盛土 (地盤改良剤混合)
20	R1.3520	古市遺跡	古市町 1677 番 1 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	R2. 5.14	GL-0.1 m 黒褐色土 (表土) 0.1 m、以下暗褐色砂礫 (地山)
21	R2.3024	右京三条二坊十五坪菅原東遺跡	西大寺国見町二丁目 368 番 22、368 番 34	個人	個人住宅新築	宅地	R2. 5.15	GL-0.3 m 砕石 0.1 m、盛土 0.2 m 以上

令和2年度実施 立会工事

No.	受理番号	遺跡	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	立会調査	
							日付	結果
22	H31.3017	右京一条二坊五坪	西大寺国見町一丁目3-1～4-1	大阪ガス(株)ネットワークカンパニー	ガス管入替	道路	R2. 5.15	No.1・2: GL-1.0 m アスファルト0.1 m、盛土0.9 m以上
							R2. 5.28	No.3: GL-0.85 m アスファルト0.05 m、砕石0.1 m、黒灰色土(耕作土)0.1 m、褐灰色土0.3 m、灰褐色土0.1 m、淡黄褐色度土(地山)0.2 m以上
							R2. 6. 3	No.4: GL-0.85 m アスファルト、0.05 m、盛土0.8 m以上
							R2. 6. 8	No.5: GL-0.85 m アスファルト0.05 m、盛土(旧ガス管掘形埋土)0.8 m
23	R1.3521	紀寺跡 奈良町遺跡	築地之内町2番1、2番2	個人	個人住宅新築	宅地	R2. 5.18	GL-0.3 m 黒褐色土(表土)0.2 m、黄灰色砂質土0.1 m以上
24	R1.3434	左京三条一坊十一坪	三条大路二丁目528-1の一部、531-3	上林化学(株)	店舗新築	宅地	R2. 5.25	GL-0.3～0.5 m 盛土0.3～0.5 m以上
25	H22.3105	五条大路	南京終町～西木辻町	奈良市長	道路工事	道路	R2. 3.11	北側: GL-1.2 m 盛土1.2 m以上
							R2. 3.25	南側: GL-1.5 m 盛土1.5 m以上
							R2. 4.27	北側: GL-3.0 m 盛土1.5 m、灰色砂礫(河川堆積層)0.3 m、灰色粗砂0.3 m、灰色粘土0.4 m以上
							R2. 5.28	南側: GL-2.6 m 盛土1.5～1.6 m、以下灰色砂礫(地山)
26	R2.3030	右京七条三坊三坪	七条一丁目390-3の一部	個人	個人住宅新築	宅地	R2. 6. 3	GL-0.05～0.1 m 盛土0.1 m以上
27	R1.3215	左京四条五坊十四坪	杉ヶ町59～57-1	大阪ガス(株)ネットワークカンパニー	ガス管理設	道路	R2. 6. 3	GL-1.0 m アスファルト0.2 m、盛土0.6 m、黒灰色土(耕作土)0.2 m、以下灰色土
28	R2.3260	左京三条六坊六坪 奈良町遺跡	高天町46-1	大阪ガス(株)ネットワークカンパニー	ガス管理設	道路	R2. 6. 3	道路側: GL-0.95 m 盛土0.95 m以上 宅地側: GL-0.5 m 表土0.15 m、明黄褐色土0.5 m以上
29	R2.3014	右京五条四坊十坪	平松四丁目513番7	個人	個人住宅新築	宅地	R2. 6. 5	GL-0.55 m 淡褐色土(表土)0.35 m、灰白色粘土(地山)0.2 m以上
30	R1.3535	左京八条四坊十一坪	東九条町682番、681番3、681番9、683番2	個人	擁壁の設置・青空駐車場造成	水田	R2. 6. 5	GL-0.55 m 盛土0.3 m、灰色粗砂0.15 m、灰褐色土0.1 m以上
31	R1.3522	左京三条四坊十四坪	大宮町二丁目127番53	個人	個人住宅新築	宅地	R2. 6. 8	GL-0.3 m 黒褐色土(表土)0.3 m以上
32	R1.1132	史跡大安寺旧境内 附石橋瓦窯跡	大安寺一丁目1159番2、1160番5	個人	個人住宅新築	宅地	R2. 6. 8	GL-0.7 m 盛土0.3 m、黒灰色土(耕作土)0.3 m、灰色土0.1 m以上
33	R2.3009	奈良町遺跡	紀寺町871番地3	個人	個人住宅新築	宅地	R2. 6.10	GL-0.2 m 砕石0.1 m、黒褐色土(表土)0.1 m以上
34	R1.3412	左京五条六坊四坪	西木辻町139-27、-28、-29、-7の一部	個人	賃貸住宅新築	宅地	R2. 6.10	GL-1.7 m 黒褐色土(表土)0.1 m、盛土0.3 m、黒灰色土(耕作土)0.3 m、黄灰色砂礫(地山)1.0 m以上
35	R2.3045	右京七条四坊十三坪	七条西町一丁目627-195	個人	個人住宅新築	宅地	R2. 6.12	GL-0.25 m 黒褐色土(表土)0.25 m、以下盛土
36	R2.3086	左京二条三坊五坪	法華寺町159番	個人	宅地造成	宅地	R2. 6.16	GL-2.9 m アスファルト0.1 m、灰黄色粘質土(盛土)1.6 m、灰黄色砂質土(耕作土)0.45 m、黄灰色砂(床土)0.15 m、灰茶褐色粘質土0.3 m、灰色粘質シルト0.3 m以上
37	R2.3012	成務陵陪塚い号隣接地	山稜町312-1	個人	個人住宅新築	宅地	R2. 6.25	GL-0.3 m 盛土0.3 m以上
38	R1.3467	右京北辺四坊三坪	西大寺宝ヶ丘473-4	一建設(株)	分譲住宅新築	宅地	R1. 6.25	GL-0.2 m 黄灰色粘土(地山)0.2 m以上
39	R2.3007	マエ塚古墳	山陵町372-4	一建設(株)	分譲住宅新築	宅地	R2. 6.29	GL-0.4 m 暗灰色土(表土)0.3 m、黄褐色砂質土(地山)0.1 m以上
40	R1.3279	遺物散布地(05D-0117)	古市町969-3	関西電力(株)	電柱・支線新設	宅地	R2. 7.1	GL-0.8 m 黒灰色土(耕作土)0.3 m、暗灰色土0.5 m以上

No.	受理番号	遺跡	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	立会調査	
							日付	結果
41	R2.3060	菅原寺跡	菅原町 522 番4の一部	個人	個人住宅新築	宅地	R2. 7. 6	GL-0.9m 黒褐色土(表土)0.4m、淡黄褐色土 0.4m、淡黄褐色砂質土(地山)0.1m以上
42	R1.3527	右京二条四坊十四坪	疋田町一丁目 341	個人	個人住宅新築	宅地	R2. 7. 6	GL-0.26m 黒褐色土(表土) 0.26m以上
43	R2.3032	左京五条七坊四坪	中辻町 72-1	関西電力(株)	本柱新設	宅地	R2. 7. 7	GL-2.6m 盛土 0.9m、黒褐色土 0.4m、以下黄褐色砂質土(地山)
44	R2.3020	左京五条四坊三坪	西木辻町 204- 2の一部	個人	個人住宅新築	宅地	R2. 7.10	GL-0.2m 黒褐色土(表土)0.2m以上
45	R2.3010	古市城跡	古市町 2139 番 36	個人	個人住宅新築	宅地	R2. 7.10	GL-0.35m 黒褐色土(表土 0.15~0.35m)、黄褐色砂質土(地山)0.2m以上
46	R1.3425	右京四条四坊十二坪 平松廃寺	平松三丁目 26-13 (1~4号棟)	一建設(株)	分譲住宅新築	宅地	R2. 7.13・14	GL-1.3m GL-0.4~0.7mで整地土確認
47	R2.3068	右京七条四坊五坪	七条西町一丁目 627 番 89の一部	個人	個人住宅新築	宅地	R2. 7.20	GL-0.4m 敷地西側で黒褐色土(表土)0.2m、淡赤灰色砂質土(地山)0.2m 敷地東端で黒褐色土(表土)0.4m以上
48	R2.3004	左京五条七坊七坪 奈良町遺跡	納院町 12- 1・12- 5・12- 6	(同) RAビルリース	共同住宅新築	宅地	R2. 7.27	GL-1.0m 敷地東辺から西へ 5.5mで、上から黒褐色土(表土)0.5m、黄褐色粘質土(地山)0.5m以上 敷地東辺付近で、黒褐色土 1.0m以上
49	R2.3067	右京七条四坊五坪	七条西町一丁目 627 番 104	個人	個人住宅新築	宅地	R2. 7.27	GL-2.0m 盛土 1.2m、淡黄灰色砂質土(地山)0.8m以上
50	R2.3049	左京三条四坊九・十坪	芝辻町二丁目 167 番2の一部、167 番4	個人	共同住宅新築	宅地	R2. 7.29	GL - 0.45m 黒灰色土(耕作土)0.25m、赤灰色砂質土(床土)0.1m、褐灰色土 0.1m以上
51	R2.3038	左京八条三坊十三坪	東九条町 477-1、478-1の各一部	(株)キノシタ	擁壁掘形掘削工事	宅地	R2. 7.30	GL-0.4~1.0m 敷地南端で盛土 0.4m、敷地中央で盛土 1.0m以上
52	R2.3044	右京五条三坊十三坪	平松二丁目 264 番 53	個人	個人住宅新築	宅地	R2. 8. 4	GL-0.3m 茶褐色砂質土(表土)0.1m、黄灰色粘土質シルト(盛土) 0.2m以上
53	R2.3482	西大寺跡	西大寺本町 1-9~1-11	大阪ガス(株)ネットワークカンパニー	ガス管理設	宅地	R2. 8. 4	GL-0.8m アスファルト 0.04m、盛土 0.6~0.8m、暗灰色シルト(土師器片包含)0.2m
54	R2.3072	右京北辺四坊六坪	西大寺宝ヶ丘 771 番 1	個人	個人住宅新築	宅地	R2. 8. 6	GL-1.5m 盛土 0.3m、暗褐色土 0.2m、褐色土 0.4m、以下黄褐色土(地山) 0.6m以上
55	R2.3121	左京一条四坊十坪	法連町 1950 -2、1961 -2の各一部	(株)キノシタ	分譲住宅新築	宅地	R2. 8.19	GL-0.35m 盛土 0.1m、黒褐色土 0.1m、以下橙色土(地山)
56	R2.3083	遺物散布地 (05D-0117)	古市町 969 番 1	個人	個人住宅新築	水田	R2. 8. 7 R2.11. 5	GL-0.45m 黒灰色土(耕作土)0.2m、褐色土 0.25m以上 GL-0.05 砕石 0.05m以上
57	R2.3107	二条条間路	法連町 203 番 1	(株)吉川商事	宅地造成	宅地	R2. 8.19	GL-1.1m 盛土 0.4m、黒灰色土(耕作土)0.2m、灰色砂質土 0.5m以上
58	R2.1055	史跡大安寺旧境内 附石橋瓦窯跡	大安寺四丁目 1044 番地 1	個人	既設の庭、塀撤去、カーポートの新設	宅地	R2. 8.19	GL-0.56m 盛土 0.1m、暗褐色土 0.46m以上(中近世包含層)
59	R2.3052	右京六条四坊四坪	六条三丁目 1170 番 65	個人	個人住宅新築	宅地	R2. 8.24	GL-0.3~0.4m 盛土 0.4m以上
60	R2.3466	左京二条六坊北郊	法連町 1360- 3の一部・4の一部	一建設(株)代表取締役	分譲住宅新築	宅地	R2. 8.21	盛土 0.2m以上
61	R2.3071	右京北辺三坊六坪	西大寺北町一丁目 383-2	個人	共同住宅新築	宅地	R2. 8.26	GL-0.7m 盛土 0.7m以上
62	R2.3101	古市遺跡	古市町 1524 番3、1524 番 14、1524 番 15、1536 番7、1536 番8、1543 番 9	個人	個人住宅新築	宅地	R2. 8.31	GL-0.3m 黒褐色土(表土)0.25m、黄灰色砂質土(地山)0.05m以上
63	R2.3110	右京五条四坊八坪	平松三丁目	個人	個人住宅新築	宅地	R2. 9. 2	GL-0.3m 黒灰色土 GL-0.1m、赤褐色土 0.2m以上

令和2年度実施 立会工事

No.	受理番号	遺跡	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	立会調査	
							日付	結果
64	R2.3120	右京七条四坊七坪	六条三丁目 766- 2	関西電力送配電(株)	電線支線撤去新設	宅地	R2. 9. 7	GL-0.8 m 黒褐色土 0.8 m 以下 地山の黄褐色土
65	R2.3086	右京四条四坊十二坪 平松麿寺	平松三丁目 665 番 1	個人	個人住宅新築	宅地	R2. 9. 8	GL-0.2～0.3 m 盛土 0.2～0.3 m 以上
66	R2.3074	奈良町遺跡	高畑町 1456 番2、1456 番3、1456 番4	個人	個人住宅新築	宅地	R2. 9. 9	GL-0.4 m 黒褐色土(表土)0.1 m、 盛土 0.3 m以上
67	R2.3029	右京六条四坊十一坪	六条二丁目 1471 番 1、 1471 番2	個人	個人住宅新築	宅地	R2. 9.10	GL-1.3 m 盛土 0.5 m、以下地山 の明黄白色・明灰白色粘土
68	R2.3106	平城京南方遺跡	北之庄西町一丁目～北 之庄町地内	奈良市公営企 業管理者	水道埋設管新設 工事	道路	R2. 9.14	GL-0.7～1.0 m アスファルト 0.05 m、黒灰色土(耕作土)0.2 m、赤 褐色土 0.05 m、褐灰色土 0.2 m、 灰褐色土 0.2～0.5 m以上
69	R2.3151	大淵池北古窯跡	西登美ヶ丘六丁目 3951 番 128 (1号棟)	(株)アーネスト ワン	分譲住宅新築	宅地	R2. 9.15	GL-0.15～0.3 m 盛土 0.15～0.3 m以上
70	R2.3152	大淵池北古窯跡	西登美ヶ丘六丁目 3951 番 152 (2号棟)	(株)アーネスト ワン	分譲住宅新築	宅地	R2. 9.15	GL-0.3 m 盛土 0.3 m以上
71	R2.3051	平城京東市跡	東九条町 459 番2、459 番3、459 番4、459 番 5、462 番の一部	個人	個人住宅新築	宅地	R2. 9.17	GL-0.1～0.2 m 盛土 0.1～0.2 m 以上
72	R2.3135	右京五条七坊四坪 奈良町遺跡	中辻町 72 番5、74 番4	個人	個人住宅新築	宅地	R2. 9.30	GL-0.3 m 盛土 0.3 m以上
73	R2.3437	左京五条一坊十一坪	柏木町 536 番2の一部	個人	個人住宅新築	宅地	R2.10.12	GL-0.3 m 砕石 0.1 m、盛土 0.2 m以上
74	R2.3194	左京七条四坊十一坪	七条西町一丁目 627 番 201	個人	個人住宅新築	宅地	R2.10.14	GL-0.15 m 盛土 0.15 m以上
75	R2.3109	成務陵陪塚い号隣接 地	山陵町 312 番5、312 番 6	個人	個人住宅新築	宅地	R2.10.14	GL-0.1 m 盛土 0.1 m以上
76	R2.3168	右京北辺二坊六坪	西大寺東町一丁目 27- 9	(株)ウエルアッ プ	共同住宅新築	宅地	R2.10.14	GL-1.3 m 盛土 1.0 m、黄褐色土 (地山)0.3 m以上
77	R2.3172	左京五条七坊十五坪	紀寺町 968	個人	店舗付住宅新築	宅地	R2.10.15	GL-0.25 m 盛土 0.25 m以上
78	R2.3157	元興寺跡	中院町 11 番地、16 番 地	(宗)元興寺	既存 RC 造塀の調 査	宅地	R2.10.19	GL-0.7 m 黒色土(造成盛土) 0.55 m、防火壁施行時真砂土 0.15 mで既存基礎確認
							R2.10.21	GL-0.9 m 0.6 mで既存基礎確認、 以下黒褐色土遺物包含層(19C)
79	R2.1058	史跡元興寺極楽坊境 内	中院町 11 番地	(宗)元興寺	防災壁改修に伴う 事前調査	宅地	R2.10.19	GL-0.7 m 黒色土(造成盛土)0.3 m、防火壁施行時真砂土 0.4 m、 以下黒灰褐色遺物包含層(19C)
							R2.10.21	GL-0.85 m 0.6 mで既存基礎確 認、栗石 0.1 m、以下橙褐色土(炭 含) GL-0.85 m GL-0.6 mで既存基礎 確認、遺構面の高さ GL - 0.85 m
80	R2.3147	森本窪之庄遺跡	窪之庄 170- 1	関西電力送配電(株)	本柱・支線新設	水田	R2.10.21	GL-2.5 m 表土 0.4 m、以下暗灰 色粘砂
81	R2.3127	右京七条四坊一・二・ 七坪	六条三丁目・七条二丁 目地内	奈良市長	道路改良工事 (拡幅)に伴う準備 工	道路	R2.10.23	GL-1.0 m 黒褐色土(表土)0.1 m、 黄灰色粘質土 0.3 m、黒灰色土 0.2 m、灰色土 0.2 m、青灰色土 0.2 m以上
81	R2.3127	右京七条四坊一・二・ 七坪	六条三丁目・七条二丁 目地内	奈良市長	道路改良工事 (拡幅)に伴う準備 工	道路	R2.11.5	GL-0.3～0.5 m 黒褐色土(表 土)0.1 m、黄灰色粘砂(地山)0.2 ～0.5 m以上
82	R2.3149	左京四条五坊十四坪	杉ヶ町 55 番地3、55 番 4、55 番5	個人	共同住宅新築	宅地	R2.10.26	GL-1.3 m 黒褐色土(表土)0.4 m、 黒灰色土(旧耕作土)0.2 m、暗黄 灰色土 0.3 m、灰色土 0.2 m、灰 色粗砂 0.2 m
83	R2.3116	左京六条二坊三坪	八条五丁目 404 番地の 1	奈良市消防局	自家給油取扱所 新築	グラウンド	R2.10.28	GL-3.6 m 盛土 1.6 m、黒灰色土 (耕作土) 0.2 m、灰色土 0.3 m、 灰褐色土 0.3 m、以下灰色粘砂 0.7 m、灰色砂 0.5 m以上

No.	受理番号	遺跡	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	立会調査	
							日付	結果
84	R2.3080	西大寺跡	西大寺南町 2418-3、2430-1、2431-2、2432-1他	三和住宅(株)	複合ビル新築工事	宅地	R2.10.30	GL-2.1m 盛土0.35m、黒灰色土(耕作土)0.3m、灰色砂0.2m、以下地山の黄灰色砂質土0.6m、灰色シルト0.75m以上
85	R2.3092	古市城跡	古市町 2200番	個人	個人住宅新築	宅地	R2.11.4	GL-0.2~0.3m 盛土0.2~0.3m以上
86	R2.3159	右京北辺四坊四坪	西大寺赤田町一丁目 694番、695番、696番、697番の各一部	個人	個人住宅新築	宅地	R2.11.5	GL-0.15~0.2m 砕石0.15~0.2m以上
87	R2.1057	史跡大安寺旧境内 附石橋瓦窯跡	大安寺四丁目 1071番1	個人	基礎解体工事	宅地	R2.11.6	GL-0.2~0.3m 黒褐色土(表土)0.2~0.3m以上
					柱状地盤改良工事		R2.12.23	GL-1.5m 表層改良土0.3~0.7m、以下灰色砂礫(地山)
					基礎掘形掘削		R3.1.18	GL-0.2~0.3m 表層改良土0.2~0.3m
					配管工事		R3.2.22	GL-0.3m 黒褐色土(表土)0.3m以上
88	R2.3140	新薬師寺	高畑町	国立大学法人 奈良教育大学	音楽棟屋外受変電設備改修及びケーブル(管路)改修	学校用地	R2.11.12	GL-0.4~0.55m 黒褐色土(表土)0.3mで、旧陸軍奈良連隊建物基礎確認
89	R2.3202	左京二条六坊六坪、 奈良町遺跡	西新在家号所町6番の一部	個人	個人住宅新築	宅地	R2.11.12	GL-0.3m 表土0.2m、暗黄褐色粘土(地山)0.1m以上
90	R2.3164	西四坊大路隣接地	若葉台二丁目 1686番10	個人	個人住宅新築	宅地	R2.11.19	GL-0.3~0.6m 盛土0.3~0.6m以上
91	R2.3196	一条南大路	法蓮町 986-77の一部	個人	分譲住宅新築	宅地	R2.11.24	GL-0.3m 黒褐色土(表土)0.05m、褐色土0.25m以上
92	R2.3231	赤坂塚古墳	今市町 277番1、2、3	個人	個人住宅新築	宅地	R2.11.25	GL-0.35m 盛土0.25m、礫混じり黄白色砂質土(地山)0.1m以上
93	R2.3185	中ツ道	今市町 81-1地先	関西電力送配電株式会社	本柱建替	道路	R2.12.3	GL-1.3m アスファルト0.1m、暗灰色砂土0.4m、暗褐色砂質土0.3m、黒灰色粘土質シルト0.5m以上
94	R2.3246	左京五条七坊三坪、 奈良町遺跡	井上町 31番1	個人	個人住宅新築	宅地	R2.12.3	GL-0.9m 暗灰色砂土(造成土)0.3m、黄褐色砂混じり粘土(地山)0.6m 南西部では造成土下に赤褐色砂土(焼土)が0.3~0.4m堆積
95	R2.3169	一条条間路	法蓮町 1702番13	個人	個人住宅新築	宅地	R2.12.7	GL-0.25~0.35m 造成土0.25~0.35m
96	R2.3129	左京四条五坊七坪	三条本町 1002番2、1003番、1004番2	DMG森精機株式会社	事務所新築	宅地	R2.12.11	GL-1.5~1.7m 造成土0.8m ガラ混じり土0.7m 暗灰色シルト0.1m、黄灰色粘土(地山)
							R2.12.23	GL-3.5m 造成土0.8m ガラ混じり土0.7m、黄灰色粘土(地山)0.3~0.4m、灰色礫層(地山)
97	R2.3254	右京六条四坊三坪	六条二丁目 1147番の1の一部	個人	個人住宅新築	宅地	R3.1.6	GL-0.3~1.0m 盛土0.8m、黄褐色砂質土(地山)0.2m以上
98	R2.3236	西大寺跡	若葉台三丁目 1880番2	個人	個人住宅新築	宅地	R3.1.7	GL-0.25m 黒褐色土(表土)0.2m、黄灰色砂質土0.05m以上
99	R2.3235	右京五条三坊一坪	五条一丁目他地内	奈良市公営企業	水道工事(排水支管改良工事)	道路	R3.1.19	GL-1.0m アスファルト0.1m、砕石0.2m、黄灰色砂質土(地山)0.7m以上
100	R2.3264	新薬師寺	高畑町	(大)奈良教育大学	受水槽基礎・排水管の改修工事	学校用地	R3.1.19	GL-0.3~0.5m 旧施設建物盛土0.3~0.5m以上
101	R2.3221	西大寺跡	西大寺野神町一丁目6-1	奈良市長	擁壁改修	学校用地	R3.1.19	GL-2.4m 盛土2.2m、黒褐色土(旧表土)0.2m、以下黄灰色粘質土(地山)
102	R2.1099	史跡大安寺旧境内 附石橋瓦窯跡	大安寺一、四丁目、東九条町他	西日本電信電話(株)	電柱の経年劣化による建替えのため	市有地	R3.1.20	GL-1.0m 黒灰色土(耕作土)0.5m、茶褐色土0.3m、灰色粘砂0.2m、以下黄灰色粘質土(地山)
103	R2.3266	新薬師寺	高畑町 369番	個人	個人住宅新築	宅地	R3.1.26	GL-1.3~1.6m 盛土1.3~1.6m以上

令和2年度実施 立会工事

No.	受理番号	遺跡	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	立会調査	
							日付	結果
104	R2.3176	右京三条四坊二・七坪	菅原町 565- 1、569- 3	(株)栗実住宅	モデルハウス新築	畑地	R3. 2. 1	GL-0.75 m 盛土 0.75 m以上
105	R2.3315	左京四条三坊十三坪	三条絵町 403 番 12	個人	個人住宅新築	宅地	R3. 2. 2	GL-1.3 m 盛土 1.3 m以上
106	R2.3259	興福寺跡 奈良町遺跡	登大路町 36	大阪ガス(株)ネットワークカンパニー	ガス管理設	道路	R3. 2. 2	GL-1.35 m 砕石 0.1 m、盛土 1.2 m、灰白色粘質土(地山)0.05 m以上
107	R2.3287	左京二条五坊四坪	芝辻町三丁目 50 番 1	楽天モバイル(株)	携帯電話基地局設置	宅地	R3. 2. 3	GL-3.0 m アスファルト 0.1 m、砕石 0.1 m、盛土 0.7 m、黒灰色土(耕作土)0.1 m、灰色土 0.1 m、灰色粘砂(旧河川堆積) 0.9 m以上
108	R2.3331	右京六条四坊十一坪	六条二丁目 1225 番9、1125 番 10	プレステ(株)	分譲住宅新築	宅地	R3. 2. 8	GL-0.4 m 盛土 0.4 m以上
109	R2.3327	西大寺跡	西大寺野神町二丁目 1797 番 14	個人	個人住宅新築	宅地	R3. 2. 9	GL-0.2 m 盛土 0.2 m以上
110	R2.3335	左京三条四坊十四坪	大宮町二丁目 127 番 51、127 番 52	野村不動産(株)	モデルルーム新築	宅地	R3. 2.10	GL-0.25 ~ 0.5 アスファルト 0.09 m、盛土 0.16 ~ 0.41 m以上
111	R2.3281	右京北辺三坊五坪 一条北辺京極路	秋篠新町 264 番2の一部、266 番、267 番1、412 番3	大和ハウス工業(株)	宅地造成	宅地	R3. 2.12	GL-1.3 ~ 2.15 m A(北側): 砕石 0.1 m、盛土 1.0 m、灰色土 0.2 m、以下黄灰色粘土(地山) B(南側) 盛土 1.5 m、黒灰色土(耕作土) 0.25 m、灰色土 0.2 m、黄灰色粘土(地山) 0.2 m以上
112	R2.1118	特別史跡 平城宮跡	佐紀町 2751 - 1 他	奈良市長	フードバンク事業に伴う施設整備	宅地	R3. 2.15	GL-0.3 m 新設便器部: 盛土 0.3 m、排水管改修部: 盛土 0.3 m
113	R2.3282	一条南大路	法連町 986 番 162	個人	個人住宅新築	宅地	R3. 2.15	GL-0.45 m 北辺: 盛土 0.4 m、褐色土 0.05 m、以下黄褐色土(地山) 南側: 盛土 0.3 m、黒灰色土(耕作土)0.1 m、灰色土 0.05 m以上
114	R2.3271	右京八条二坊九坪	七条東町 214- 1、215- 1	関西電力送配電(株)	電柱・支線新設	宅地	R3. 2.22	GL-2.5 m 盛土 0.7 m、黒灰色土(耕作土)0.3 m、灰色砂質土 0.2 m以上
115	R2.3249	西大寺跡	西大寺小坊町6-14 地先	西日本電信電話(株)	電柱工事	宅地	R3. 2.23	GL-1.5 m コンクリート舗装 0.1 m、黄褐色土(造成土)、灰褐色土 0.6 m、暗灰色土 0.3 m以上
116	R2.3272	左京四条六坊十一坪、奈良町遺跡	西城戸町3番5	個人	個人住宅新築	宅地	R3. 3. 1	GL + 0.12 m GL 上に基礎を設ける
117	R2.3296	神功皇后陵陪塚ろ号	山陵町	宮内町京都事務所	境界標識埋設	陵墓地	R3. 3. 3	GL-0.4 m 黒褐色土(表土)0.2 m、淡黄灰色砂質土(墳丘盛土) 0.4 m以上、墳丘盛土の上面にて葺石確認
118	R2.3332	右京二条四坊十四坪	疋田町一丁目3- 5	一建設(株)	分譲住宅新築	宅地	R3. 3. 4	GL-0.25 m 盛土 0.25 m以上
119	R2.1100	史跡大安寺旧境内 附石橋瓦窯跡	東九条町 1316	奈良市教育委員会 教育長	文化財解説板の設置	境内地	R3. 3. 4	GL-0.1 m 黒褐色土(表土)0.1 m、以下淡黄褐色土
120	R2.3325	朱雀大路	西ノ京町 208 番地1	個人	個人住宅	宅地	R3. 3. 9	GL-0.4 m 黒灰色土(耕作土)0.2 m、淡黄灰色土 0.2 m以上
121	R2.3279	右京二条四坊三坪	菅原町 362 番1の一部	個人	個人住宅新築	宅地	R3. 3. 9	GL-0.4 m 盛土 0.2 m、黄灰色砂質土(地山)0.2 m以上
122	R2.3187	左京七条四坊十三坪	東九条町 1102- 4	タクトホーム(株)	分譲住宅新築	宅地	R3. 3.10	GL-1.55 m 盛土 0.9 m、黒灰色土(耕作土)0.2 m、灰色粗砂 0.3 m、灰色粘砂 0.15 m以上
123	R 2.3326	四条大路、奈良町遺跡	公納堂町 25 番 1 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	R 3. 3.11	GL-0.3 ~ 0.4 m 黒褐色土(表土) 0.3 ~ 0.4 m以上
124	R 2.3275	右京四条二坊二・三坪	四条大路五丁目6番 1	奈良市長	放課後児童クラブ新築	学校用地	R 3. 3.12	GL-1.0 m 盛土 0.6 m、赤灰色土 0.1 m、灰色土 0.1 m、黄灰色粘土(地山)0.2 m以上
125	R 2.3280	右京四条一坊一坪	四条大路四丁目 79 番 11 の一部	個人	共同住宅新築	宅地	R 3. 3.15	GL-0.6 m 盛土 0.6 m以上
126	R 2.3333	一条北大路	法華寺 1149 番 1	個人	個人住宅新築	宅地	R 3. 3.15	GL-1.0 m 盛土 0.6 m、黒灰色土(耕作土)0.2 m、灰色土 0.1 m、黄褐色土(地山)0.1 m以上
127	R 2.3226	右京一条二坊十五坪	西大寺南町 2367、2369- 4・5・6	個人	共同住宅新築	宅地	R 3. 3.18	GI-2.9 m 造成土 2.9 m以上

なお、表中の遺跡名のうち、平城京跡については名称を略し、○京○条○坊、もしくは○条大路、○坊大路等で示した。

第2章 令和2(2020)年度 埋蔵文化財保存活用・学習推進事業報告

令和2（2020）年度埋蔵文化財保存活用・学習推進事業報告

1. 展示

A 常設展示

対象：一般
会期：令和2年4月1日（水）～4月9日（木）
6月1日（月）～8月21日（金）
令和2年12月1日（火）～12月25日（金）
令和3年1月4日（月）～3月31日（水）
（148日間、4月10日（金）～5月29日（金）
は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、
閉室）
場所：埋蔵文化財調査センター展示室
趣旨：埋蔵文化財の展示を通じて奈良市の歴史を紹介。
旧石器時代～江戸時代の各時代の埋蔵文化財
を遺跡ごとに展示。

B 奈良市教育委員会秋季特別展

「ナニこれ！？ー平城京出土の用途不明品ー」

対象：一般
会期：令和2年9月1日（火）～11月20日（金）
（60日間）
場所：埋蔵文化財調査センター展示室および同室
前ロビー
趣旨：これまで、まとまった形で公開されることが
なかった平城京出土用途不明品等を集め、
4つのテーマに分けて展示し、今後様々な
視点で活用されるきっかけとなることをも
目的として開催した。

観覧者数： 1,675名

その他：・案内を「しみんだより」9月号と奈良市役
所のホームページに掲載。
・宣伝用のチラシの作成・配布。
・展示パンフレット・リーフレットの作成。

C 春季発掘調査速報展

「富雄丸山古墳と秋篠阿弥陀谷遺跡の調査」

対象：一般
会期：令和3年2月15日（月）～3月31日（火）
（33日間）
場所：埋蔵文化財調査センター展示室前ロビー
趣旨：発掘調査等の最新成果について、展示・紹介
する。本年度は2箇所の発掘調査成果を紹介
した。ひとつは平成29年度の航空レーザー
測量の結果、直径が日本一を誇る大型円墳で
あることが判明した富雄丸山古墳で、この結
果を受けて、平成30年度から古墳の規模や
構造を確認するために実施した発掘調査と、
併行して墳頂の埋葬施設で実施している発掘
調査体験の成果を、主な出土遺物とともに展
示・紹介して、発掘調査体験参加者へも調査
成果を周知することを目的とした。いまひとつ
は、令和元年度に奈良市秋篠町の西迎寺墓
地が所在する丘陵上で調査を実施し、所在す
る秋篠阿弥陀谷遺跡の火葬墓の篠阿弥陀谷遺跡
の発掘調査成果で、特に調査地の東端で検出
したミニチュア土器を副葬品とする木櫃墓に
焦点をあて、葬法や埋葬者の階層性などを考



秋季特別展「ナニこれ！？ー平城京出土の用途不明品ー」



春季発掘調査速報展

表1 月別観覧者数

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
40	0	113	203	148	678	610	408	105	26	158	314

える上で貴重な成果を出土遺物と展示パネルで紹介した。

観覧者数：129名

その他：・案内を「しみんだより」2月号と奈良市役所のホームページに掲載。

- ・宣伝用のチラシの作成・配布。
- ・展示リーフレットの作成。

D 年間観覧者数

2,803名(208日間)。月平均234名。月別観覧者数は表1のとおり。

2. 施設見学の受け入れ

埋蔵文化財調査センター施設見学

(1) 対象：奈良大学学生 27名

期日：令和2年11月9日・16日

3. 市民考古サポーターの活動支援

市民考古サポーター事業

市民考古学講座終了後、希望者を「市民考古サポーター」として登録し、奈良市の埋蔵文化財保護を支援していただくとともに、楽しみながら学ぶ場を提供する。

対象：令和元年度の受講修了者

登録人員：16名(登録総人数114名)

活動開始：令和元年7月～

(新型コロナウイルス感染拡大防止のため一部活動中止)

活動内容：土器洗浄などの遺物整理、展示作業の補助、展示解説、体験学習の補助などに参画。

月平均活動人数：77名

4. 体験学習

富雄丸山古墳現地学習

(新型コロナウイルス感染拡大防止のため一般対象は中止)

対象：地元・一般

期日：地元 令和3年1月7日(木)

一般 令和3年1月8日(金)～12日(火)、14日(木)～18日(月)、21日(木)～24日(日)の14日間

場所：富雄丸山古墳発掘調査現場

内容：発掘調査方法や安全のための講習を受講後に、発掘体験を実施。調査を始める前には必ず現況説明と、仕事の内容を説明し、終了時には出土遺物の解説・遺構の説明を行った。

その他：・地元参加者の募集は自治連合会長が協力
・一般参加者の募集・宣伝・中止連絡等は奈良市観光協会に委託。

・奈良市役所のホームページに掲載

参加者数：13名



富雄丸山古墳現地学習

5. 文化財学習キットの貸出し

市内の発掘調査で出土した石器・土器・瓦等の実物資料の貸し出しキットで解説書付き。小・中学校の社会科学学習・郷土学習の補助教材に利用でき、埋蔵文化財調査センターを見学する小・中学生にも「触れることのできる文化財」としても使用する。

対象：奈良市内の小・中学校

内容：①～⑥の6キット

- ① 縄文土器と弥生土器
- ② 縄文時代の石鏃と弥生時代の石鏃・石包丁
- ③ 古墳時代の埴輪と須恵器

④奈良時代の土器（A・B 2セットあり）

⑤奈良時代の瓦－軒丸瓦・軒平瓦

⑥奈良時代の硯と墨書土器・和同開珎

貸出・利用

(1) 平城小学校の総合学習

期日：令和2年10月19日～23日

キット⑤

(2) 京西中学校社会科の歴史学習

期日等：令和2年10月28日～11月6日

キット：①・②

6. 職員の派遣（講師など）

A 春日公民館主催シニアのびやかサロン講演会

期日：令和2年7月17日（金）

場所：春日公民館

派遣人数：1名

演題：「奈良市の古墳時代」

B 春日公民館主催「登って体感！大安寺古墳群」

期日：令和2年10月8日（木）

場所：春日公民館及び大安寺古墳群

派遣人数：1名

内容：大安寺古墳群の案内

7. 出土遺物保存処理

埋蔵文化財調査センターで保管・管理している金属製遺物の化学的保存処理を計画的に行い恒久的な保存を行った。

(保存処理資料) 平城京跡出土刀子5点・鉄釘1点・獣脚1点・銅鈴1点、古市城跡出土鉄鎌1点、藤尾城跡出土鉄鎌1点

8. 保管資料・写真の貸出し・閲覧等

埋蔵文化財調査センターで保存・管理している遺物・写真などの貸出・提供・掲載許可を行った。また、学術研究等に関わって、資料の閲覧を受け入れた。

A 遺物などの貸出 5件(表2)

B 写真などの貸出・提供・掲載許可 23件(表3)

C 学術研究等に関わる資料閲覧 16件(表4)

表2 遺物などの貸出

	貸出機関	使用目的	貸出期間	貸出内容
1	東京国立博物館	平城館考古展示室に常設展示	R2. 4. 1～ R3. 3. 31	平城京跡出土木簡(模造品)10点(礫進上木簡1点、月借錢進上木簡1点、豹皮分銭付札1点、洗皮御田侍奴画指木簡1点、北宮封緘木簡1点、衛府進塩付札1点、祿布付札1点、槐花進上木簡1点、造酒司符1点、瓦進上木簡1点)、分銅(模造品)1点(平城京跡167次調査出土)
2	国土交通省近畿地方整備局国営飛鳥歴史公園事務所	平城宮いざない館に展示	R2. 4. 1～ R3. 3. 31	元興寺旧境内第7次調査出土軒丸瓦1点、軒平瓦1点
3	大和ハウス工業株式会社	仮称大和ハウスグループ研修棟において展示公開するための保存処理を、元興寺文化財研究所に委託して行うため	R2. 9. 23～ R3. 3. 31	平城京左京九条三坊六坪(平城京跡第727次調査) SE 294 井戸梓 25点

保存活用事業報告

	貸出機関	使用目的	貸出期間	貸出内容
4	奈良大学文化財学科准教授	講義（考古学研究法）に使用するため	R2.11.17～ R3.1.18	平城京跡第283次調査SD500出土土器（土師器・須恵器他）遺物整理箱8箱分
5	龍谷大学文学部長	龍谷大学博物館学芸員課程の学生主催展覧会「十二月展」に展示	R2.11.26～ R3.12.11	須恵器墨書土器杯蓋「酒司」1点、須恵器墨書土器杯蓋「酒」「刑」1点、平城京右京一条二坊四坪（HJ第207次調査）出土須恵器仕切り付壺1点

表3 写真などの貸出・提供・掲載許可

	申請日	申請機関（申請者）	目的	内容	その他
1	R2.6.2	奈良県立橿原考古学研究所 所有史会会長	木村理恵「競合する須恵器生産地—都城への須恵器供給—（仮題）」『友史会報 第624号』に掲載	「和泉国で生産された須恵器」、「尾張・美濃国で生産された須恵器」、「須恵器大甕」写真各1枚	貸出・掲載許可
2	R2.6.3	株式会社 吉川弘文館編集 部長	森公章著『天神様の正体—菅原道真の生涯—（仮）』〈歴史文化ライブラリー〉に掲載	「平城京跡第200次・菅原東遺跡 埴輪窯1・2・3号窯（南東から）」、「平城京跡第200次・菅原東遺跡出土円筒・形象埴輪」写真各1枚	貸出・掲載許可
3	R2.6.8	公益財団法人元興寺文化財 研究所理事長	『（仮）元興寺の歴史と文化財—1300年の法灯と信仰のかたち—図録編』に掲載	「平城京跡第291次調査出土瓦類」、「元興寺跡第7次調査出土瓦類」、「元興寺跡第38次調査出土製墨土器」写真各1枚	掲載許可
4	R2.6.22	奈良テレビ放送報道制作部 員	奈良テレビ番組「ゆうドキッ！」内コーナー「せんとかん通信」にて放映	「佐紀古墳群（西群）空撮写真」、「佐紀古墳群（東群）空撮写真」写真各1枚	貸出・掲載許可
5	R2.7.1	奈良新聞社ソーシャルメディア 編集室 歴史担当者	ウェブサイト「note」（奈良新聞note版）に掲載	「富雄丸山古墳第3次調査出土斜縁神獸鏡片」・「平城京跡第723次調査 東堀河とSX01」写真各1枚	貸出・掲載許可
6	R2.7.1	読売新聞奈良支局長	読売新聞（奈良県版）の連載企画「NEW 門 戦国時代の和和」（6回）に掲載	「衆徒・国民と城郭の分布」図1枚、「多聞城出土の軒丸瓦・軒平瓦」・「隅軒平瓦と懸軒丸瓦写真各1枚	貸出・掲載許可
7	R2.8.13	姫路市埋蔵文化財センター 職員	考古学研究会発行『考古学研究』に掲載	多聞城出土軒平瓦の拓本5枚	掲載許可
8	R2.8.18	一般財団法人奈良遺跡文化 財保存活性化財団 代表理事	スマートフォンアプリ「奈良遺跡めぐり」に掲載	ヒシヤゲ古墳の空中写真、杉山古墳の空中写真、栗塚古墳・割塚古墳・三陵墓西古墳・三陵墓東古墳の写真各1枚	貸出・掲載許可
9	R2.9.24	奈良テレビ放送株式会社 報道制作局長	奈良テレビ番組「ゆうドキッ！」内で放映	平城京跡第1次調査風景写真1枚、東市跡推定地第4次調査風景写真1枚、平城京跡第73次調査風景写真1枚、平城京跡第276次調査風景写真1枚、平城京跡第422次調査風景写真1枚、史跡大安寺旧境内第146次調査風景写真2枚、史跡大安寺旧境内第139次調査風景写真3枚	貸出・掲載許可
10	R2.10.6	株式会社 大和政経通信社	奈良政経新聞の記事に掲載	平城京跡第746次左京七条一坊七坪Ⅱ・Ⅲ期 主要建物写真1枚	貸出・掲載許可
11	R2.10.6	株式会社 スタジオーネ63	「企業向け2021年カレンダー（非売品／無償配布）」で使用	佐紀古墳群（西群）空中写真1枚	貸出・掲載許可
12	R2.10.7	株式会社 同成社 代表 取締役	書籍（森下恵介著「大和の古墳を歩く」）に掲載	佐紀古墳群東群航空写真、大安寺杉山古墳出土家形埴輪、鶯塚古墳、帯解黄金塚古墳墳丘周囲の石敷、ベンショ塚古墳、ベンショ塚古墳出土の甲冑、菅原東遺跡埴輪窯跡出土の埴輪、富雄丸山古墳墳丘復原図、赤田横穴墓群5号墓の陶棺出土状況写真各1枚	貸出・掲載許可
13	R2.11.2	龍谷大学文学部部長	龍谷大学博物館学芸員課程の学生主催展覧会「十二月展」開催に伴う印刷物等への掲載と展示紹介の動画の撮影およびオンライン配信に使用	須恵器墨書土器杯蓋「酒司」写真、須恵器墨書土器杯蓋「酒」「刑」写真、平城京右京一条二坊四坪（平城京跡第207次調査）出土須恵器仕切り付壺写真各1枚	貸出・掲載許可
14	R2.11.26	秋田市立秋田城跡歴史資料 館館長	秋田城跡歴史資料館後期企画展「秋田城と古代貨幣」において写真パネルとして使用	市指定文化財平城京左京六条一坊十六坪出土神功開寶鑄銭遺物写真1枚	貸出・掲載許可

	申請日	申請機関（申請者）	目的	内容	その他
15	R2.11.30	株式会社コム・インターナショナル代表取締役	書籍『地図でスッと頭に入る古代史』昭文社に掲載	人面墨書土器と土馬写真1枚	貸出・掲載許可
16	R2.12.4	鳥取県埋蔵文化財センター所長	書籍「因幡の古代山陰道—発掘調査概要報告・講演会記録集—（仮称）」に掲載	西大寺旧境内第25次調査出土木簡（第042号表）写真1枚	貸出・掲載許可
17	R2.12.24	奈良新聞編集部	奈良新聞（令和3年1月7日付）に富雄丸山古墳の調査成果を紹介するため掲載	富雄丸山古墳航空写真・発掘調査体験風景写真・レーダー測量画像写真各1枚	貸出・掲載許可
18	R3.1.12	下野市教育委員会教育長	しもつけ風土記の丘資料館の常設展示パネル及び図録への掲載と、資料館内解説タブレット端末の画像データとして利用	奈良市指定文化財銅製壺形分銅・平城京左京三条四坊出土銅製笠形鍾・平城京右京五条一坊出土「三合一夕」墨書拵写真2枚、平城京右京二条三坊出土鑰写真1枚	貸出・掲載許可
19	R3.25	個人	佐藤信編『古代史講義【氏族篇】』の「菅原氏（土師氏）」の章に掲載	菅原東遺跡埴輪窯跡群出土円筒・形象埴輪写真1枚	貸出・掲載許可
20	R3.2.17	堺市博物館館長	堺市博物館常設展示における百舌鳥・古市古墳群と、佐紀古墳群をはじめとする他の古墳群との関係を解説するパネルに挿図として使用	佐紀古墳群航空写真1枚	貸出・掲載許可
21	R3.2.24	独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所員	科学研究費「6世紀の埴輪生産からみた『部民制』の実証的研究」の成果報告書に掲載	菅原東遺跡出土埴輪の写真・三次元モデル画像	掲載許可
22	R3.2.26	独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所長	第12回東京講演会『奈良の都の暮らしぶり～平城京の生活誌～』に掲載	西大寺旧境内第25次調査出土イスラム陶器写真1枚	貸出・掲載許可
23	R3.3.19	須坂市博物館長	須坂市博物館リニューールオープン後の常設展示パネルに使用	市指定文化財杉山古墳出土家形埴輪写真1点	貸出・掲載許可

表4 学術研究などに関わる資料閲覧

	閲覧日	申請者	目的	閲覧資料名
1	R2.6.5	奈良大学大学院生	修士論文	平城京跡左京六条三坊十坪（HJ第52次）SD02出土土器、平城京跡左京四条五坊四坪（HJ第420次）SE09出土土器、平城京跡右京三条二坊二坪（HJ第431-1次）SE570出土土器の観察・実測・撮影
2	R2.6.29～7.3	奈良女子大学学生	卒業論文	平城京跡左京三条六坊五坪（HJ第269次）SE03出土ミニチュア羽釜・石鍋等、平城京跡左京二条七坊十五坪（HJ第531次）SK15出土ミニチュア羽釜等・SK16出土ミニチュア羽釜等、平城京跡左京三条六坊十坪（HJ第559次）SK618出土漆椀・石鍋・箸・しゃもじ・SE505出土土器・SE506出土土器の観察・実測・撮影
3	R2.7.8	四條畷教育委員会職員	個人研究	若草中学校旧蔵の埴輪11点の観察・実測
4	R2.7.14～21	奈良女子大学学生	卒業論文	元興寺跡（GG第73次）SE02出土ミニチュア羽釜・土師器羽釜等、SK06出土土師器羽釜・瓦質土器浅鉢、平城京跡左京二条七坊十五坪（HJ第605次）SX09出土ミニチュア羽釜、平城京跡左京二条七坊十六坪（HJ第672次）SE28出土土師器羽釜の観察・実測・撮影
5	R2.8.5	上牧町教育委員会職員	個人研究	多聞城跡出土軒平瓦、石ガマチ2号墳出土円筒埴輪・家形埴輪、赤田横穴5号墓出土琥珀玉、赤田横穴7号墓出土メノウ製霰玉の観察・実測・撮影
6	R2.8.18	奈良文化財研究所員	個人研究	平城京右京二条三坊四坪（HJ第293次調査）出土唐三彩絞胎陶枕、平城京左京五条一坊十五坪（HJ第127次調査）出土唐三彩杯、平城京左京二条二坊十二坪出土（HJ第73次調査）出土唐三彩陶枕、平城京左京七条二坊六坪出土（HJ第93次調査）出土唐三彩輪花杯、史跡大安寺旧境内（DA第68次調査）出土唐三彩陶枕、史跡大安寺旧境内（DA第92次調査）出土唐三彩陶枕、平城京左京五条四坊十六坪・五条条間北小路出土奈良三彩椀・小壺・瓶、平城京右京一条南大路出土唐三彩三足炉、史跡大安寺旧境内出土（DA第133次調査）出土唐三彩陶枕の観察・実測・撮影

保存活用事業報告

	閲覧日	申請者	目的	閲覧資料名
7	R2. 9. 1～2	奈良大学学生	卒業論文	古市桜谷遺跡第5次調査SK 40 出土土器、南紀寺遺跡第5次調査SD 12・SK 14 出土土器、東紀寺遺跡第6次調査河川 01 出土土器、平城京左京四条一坊二坪 (HJ第 609 次) 河川B出土土器 の熟覧・実測・撮影
8	R2. 9.24	奈良文化財研究所員	個人研究	ウワナベ古墳・菅原東遺跡出土埴輪の観察・実測・撮影
9	R2. 9.24・25	奈良大学学生	卒業論文	平城京左京二条五坊十四坪 (HJ第1次調査) SE 03 出土檜扇1式、平城京右京四条二坊二坪 (HJ第 18 次調査) SE 02 出土檜扇1点、平城京左京二条四坊十一坪 (HJ第 180 次調査) SE 57 出土檜扇1点、平城京左京二条二坊十二坪 (HJ第 57 次調査) 出土檜扇1点、平城京右京二条三坊十坪 (HJ第 327 -3 次調査) SE 504 出土檜扇1式、平城京左京八条三坊十四坪 (HJ第 613 次調査) SE 14 出土檜扇1点、平城京東市跡推定地 (TI第4次調査) SD 17 出土檜扇1点、西大寺旧境内 (SD第 25 次調査) SD 01 出土檜扇3点の観察・実測・撮影
10	R2.11.16 ～ 19	京都大学学生	卒業論文	史跡大安寺旧境内出土大官大寺 (6231 - 6661) 式軒瓦 263 点の観察・撮影
11	R2.11.30	東京国立博物館館員	個人研究	平城京右京三条三坊二坪・菅原東遺跡 (HJ第 256 次調査) SK16・SD19 出土土器 12 点、平城京右京三条三坊二坪・菅原東遺跡 (HJ第 257- 3次調査) SX 22 出土土器 12 点の観察・撮影
12	R2.12.16	四條畷市教育委員会職員	資料紹介	若草中学校旧蔵埴輪一括の観察・実測
13	R2.12.24	いかす・なら地域協議会職員	映像制作	西大寺旧境内第 25 次調査出土イスラム陶器1点の撮影
14	R3. 2.17	元興寺文化財研究所員	報告書作成	平城京跡第 257 次調査出土小型瓦一括と西大寺跡出土刻印瓦一括の観察・撮影
15	R3. 3.24	京都大学大学院生	博士論文	平城京跡第 581 次調査出土土製鋳型外枠1点、ゼニヤクボ遺跡第3次調査出土鉄鋸2点の観察・実測・撮影
16	R3. 3.26	奈良県立橿原考古学研究所員	個人研究	長谷遺跡出土土師器一括の観察・実測・撮影

第3章 研究報告

1. ドローンを用いた鶯塚古墳の3次元測量調査／柴原聡一郎・村瀬陸
2. 帯解地域の後期古墳－奈良市山町七ツ塚古墳群測量調査報告－
／森下浩行
3. 平氏隆盛の頃の腰刀と轡／鐘方正樹

ドローンを用いた鶯塚古墳の3次元測量調査

柴原聡一郎・村瀬陸

I はじめに

奈良市春日野町に所在する鶯塚古墳は、標高 342 m の若草山山頂に立地する前方後円墳である。当古墳は 1936 年に国指定史跡に指定され、過去に 2 度測量調査が行われている（図 1）。しかしながら後述の理由により詳細な測量図を新たに整備する必要があり、3次元計測調査を実施した。このほか、過去に表採された遺物の追跡調査を行ったが、その報告は別稿とし、本稿では墳丘測量調査の成果のみを報告する。（柴原）

II 調査の経緯

鶯塚古墳は奈良公園の一部として奈良公園事務所が管理している。風光明媚な若草山頂に所在していることから、観光客も多く鹿などの動物も見ることができる。一方、古墳が身近であるからこそ、その損傷は他の古墳に比べて激しい。鶯塚古墳は史跡範囲を柵で囲っているが、立ち入り禁止というわけではなく人の出入りが多くある。そのため、登り口となる前方部前面はとくに損傷しやすく、度々埴輪列や葺石の露出が見られ、奈良市教育委員会へも通報がある。我々はそれを奈良県へ伝え、その都度養生等を行っていただいている。

鶯塚古墳では、これまで測量調査のみが実施され、発掘調査は行われていないため、古墳の詳細な構造等がわからない。近年の損傷状況をふまれば、将来的には範囲確認調査等を行い史跡の保護を検討していく必要があるだろう。とはいえ、この現状を看過することもできない。学術的な成果をあげることで、鶯塚古墳への認知や史跡保護につなげたいという思いが、今回の測量調査に至った経緯である。

令和 4（2022）年 2 月頃に、富雄丸山古墳の発掘調査を共にしていた共著者の柴原と、鶯塚古墳が年々損傷していることが話題となった。また、鶯塚古墳が佐紀古墳群に関連するのか、春日山麓に拠点を置いたワニ氏に関わるのかといった視点から重要な古墳であることを再認識した。これらをふまえて、柴原が個人研究として行なっているドローンを用いた 3 次元測量であれば、鶯塚古墳の詳細な測量図が作成でき、上記の問題を解決する糸口になるのではと考えた。

そこで早速関連機関への問い合わせを行い、ドローン飛行の許可さえ取れば測量調査が可能であることがわかった。まず、令和 4 年 3 月 24 日付で鶯塚古墳を管理する奈良公園事務所にドローン飛行の許可を申請し承諾



旧測量図 1
[梅原 1935]

旧測量図 2
[菅谷 2001]

図1 鶯塚古墳旧測量図

を得て、測量調査を行う趣旨を奈良県文化財保存課へも説明し承諾を得た。その後、令和 4 年 3 月 29 日付で国土地理院長より、鶯塚古墳後円部墳頂に設置されている三等三角点「三笠山」の測量成果の使用を許可された（承認番号：令 3 近測第 191 号）。

測量調査は、令和 4 年 4 月 4 日・5 日に以下の体制で実施した。

調査総括者：村瀬 陸（奈良市教育委員会）

測量調査者：柴原聡一郎（東京大学大学院博士課程）

調査補助者：木村日向子・水川慶紀（奈良大学生）

（村瀬）

III 周辺の環境

奈良盆地北東部には大和高原に発し大和川へ注ぐ河川が複数存在する。そのうちの佐保川と率川、岩井川が貫流する段丘及び扇状地には多くの古墳時代遺跡が立地している（図 2・表 1）。

鶯塚古墳（1）は若草山の山頂に立地する前方後円墳で、発掘調査はされていないが埴輪片と葺石材の散布が知られている。坂上山古墳（2）は前方後円墳（105 m）で、宮内庁が開化天皇陵として管理するが、出土埴輪からは中期古墳の可能性が高い。杉山古墳（3）は前方後円墳（154 m）で、埴輪編年 IV 期の円筒埴輪が出土する。その東 200 m に位置する前方後円墳（80 m）の墓山古墳（4）もほぼ同時期とみられる。吉備塚古墳（5）は円墳（15 m）で、墳頂には 2 つの埋葬施設があり、いずれも木棺直葬である。野神古墳（6）の墳丘は大部分

ドローンを用いた鷲塚古墳の3次元測量調査

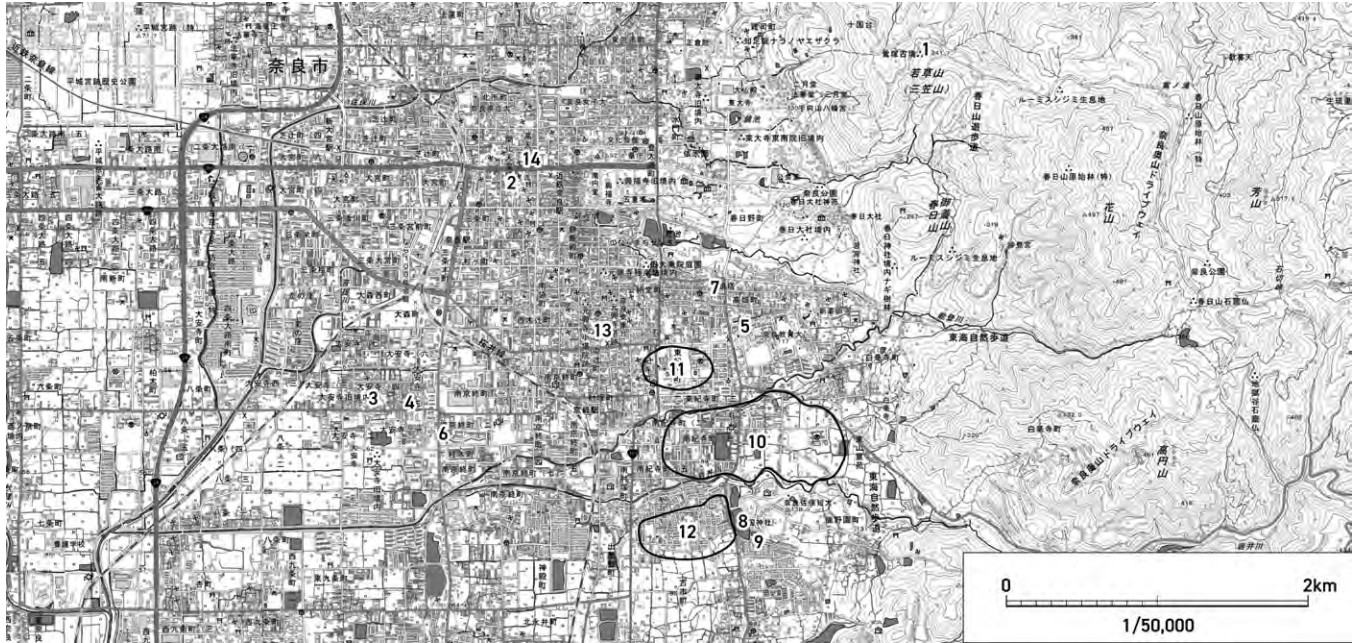
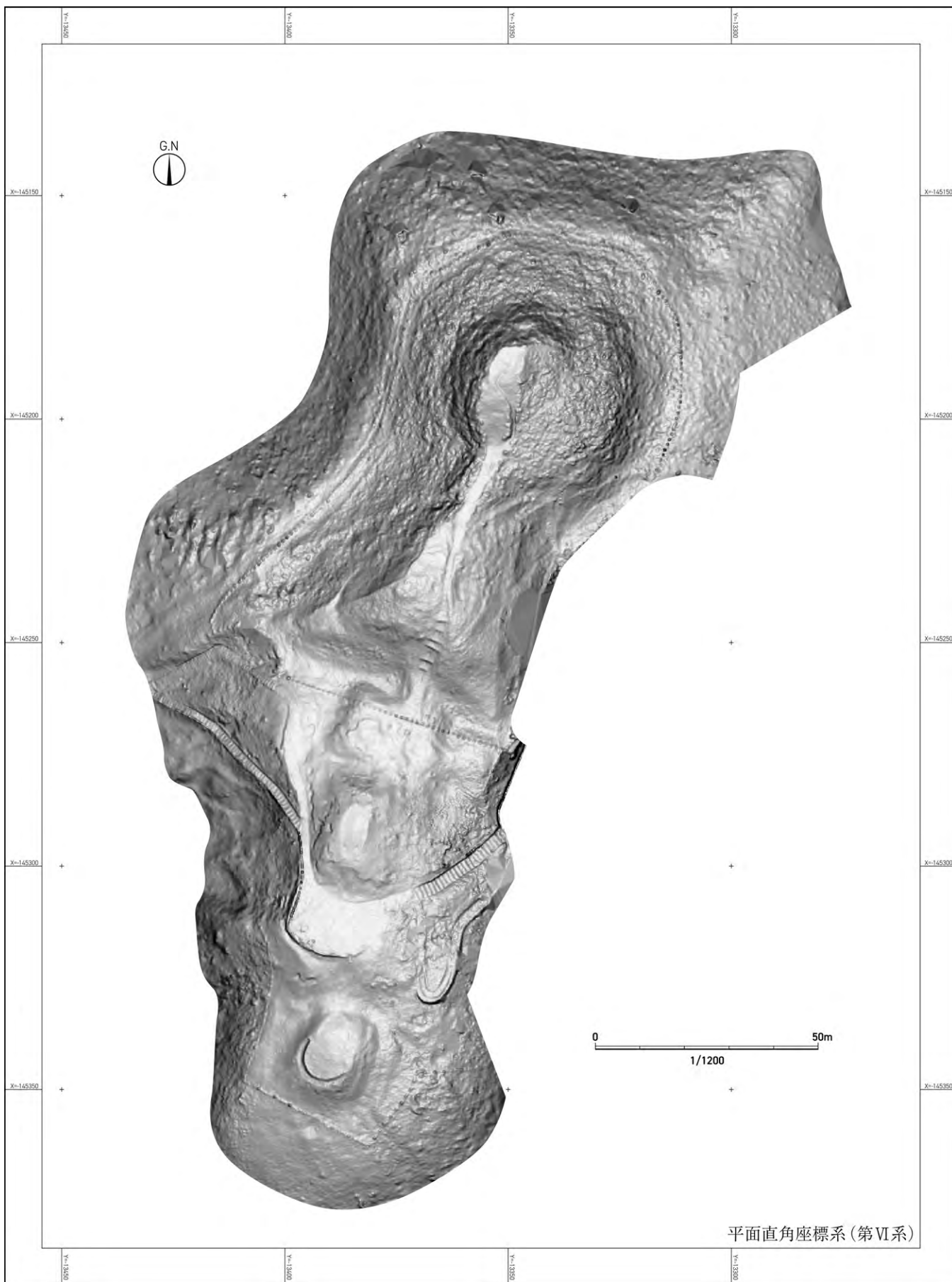


図2 周辺の環境（国土地理院地図に加筆）
表1 周辺の古墳時代遺跡

No.	遺跡名	参考文献
1	鷲塚古墳	梅原末治 1935「大和奈良鷲塚古墳」『近畿地方古墳墓の調査』日本古文化研究報告1, 日本古文化研究所、菅谷文則 2001「鷲塚古墳」『大和前方後円墳集成』奈良県立橿原考古学研究所
2	坂上山古墳	有馬伸 2010「開化天皇春日率川坂上陵鳥居改築工事に伴う立会調査」『書陵部紀要』第61号〔陵墓篇〕宮内庁書陵部、有馬伸 2011「〔平成20年度〕開化天皇春日率川坂上陵鳥居改築工事に伴う立会調査補遺」『書陵部紀要』第62号〔陵墓篇〕宮内庁書陵部、関川尚功 2019「開化天皇陵と奈良市街地の古墳」『古墳の国家形成期の諸問題』白石太一郎先生傘寿記念論文集, 山川出版社
3	杉山古墳	奈良市教育委員会 1993『史跡大安寺旧境内 I』奈良市埋蔵文化財調査研究報告1
4	墓山古墳	奈良市 1968『奈良市史』考古編、奈良県立橿原考古学研究所 1997『奈良県遺跡調査概報』1996年度第1分冊
5	吉備塚古墳	奈良教育大学 2006『吉備塚古墳の調査』
6	野神古墳	奈良市 1968『奈良市史』考古編
7	頭塔下古墳	金田明大・白杵勲 1997「頭塔下古墳の調査 第277次」『奈良文化財研究所年報』1997- III, 奈良国立文化財研究所
8	護国神社池中古墳	奈良市教育委員会 2019『奈良市埋蔵文化財調査年報』平成28年度
9	古市方形墳	奈良市 1968『奈良市史』考古編、赤塚次郎 1979「〔古市方形墳〕整理ノートより」『古代学研究』89
10	南紀寺遺跡	奈良市教育委員会 1991『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成2年度、奈良市教育委員会 1992『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成3年度、奈良市教育委員会 1993『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成4年度、奈良市教育委員会 1994『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成5年度、奈良市教育委員会 1995『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成6年度、奈良市教育委員会 2022『奈良市埋蔵文化財調査年報』令和元年度
11	東紀寺遺跡	奈良国立文化財研究所 1994『東紀寺遺跡』、奈良市教育委員会 1994『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成5年度、奈良県立橿原考古学研究所 1999『奈良県遺跡調査概報』1998年度第1分冊、奈良県立橿原考古学研究所 2002『奈良県遺跡調査概報』2001年度第1分冊
12	古市遺跡	奈良市教育委員会 1996『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成7年度、奈良市教育委員会 1997『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成8年度
13	HJ258	奈良市教育委員会 1993『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成4年度
14	HJ650	奈良市教育委員会 2014『奈良市埋蔵文化財調査年報』平成23年度

が削平されているが元は前方後円墳（50 m程度）とされ、竪穴式石槨の内部に阿蘇溶結凝灰岩製方形石棺を納める。発掘調査で馬具類が出土したほか、所在不明だが銅鏡や玉類の出土が伝わる。頭塔下古墳（7）は片袖形の横穴式石室であるが、墳丘の大部分は奈良時代に造営

された頭塔によって破壊されており、墳形・規模は不明である。副葬されていた須恵器や馬具類などから後期後葉（TK 43段階）に位置づけられる。護国神社前池中古墳（8）は削平が著しく詳細は不明だが、少なくとも30 m以上の墳丘をもつ前期後半～中期の古墳とされ



平面直角座標系 (第VI系)

図3 鶯塚古墳測量調査成果 (傾斜量図)

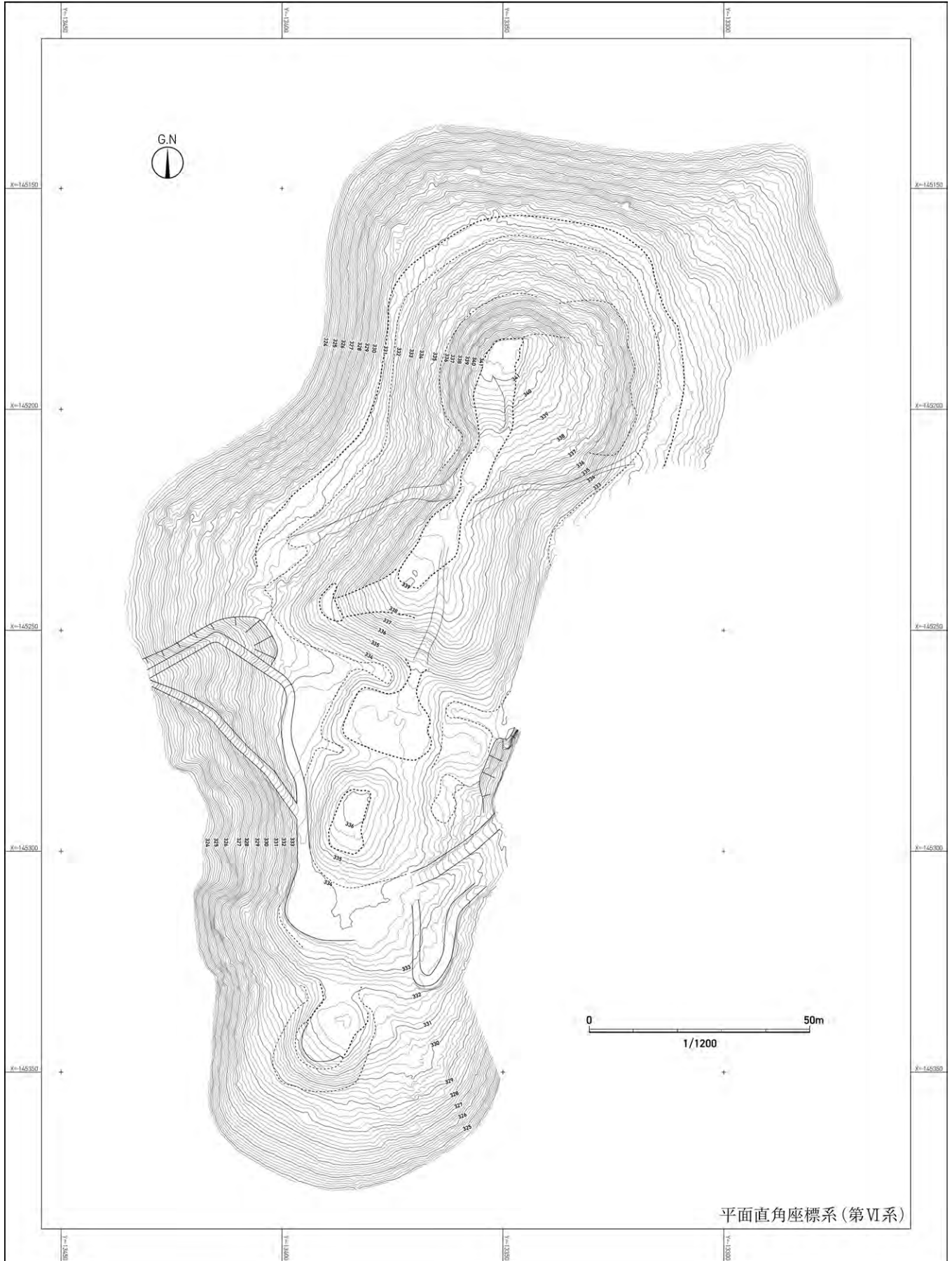


図4 鶯塚古墳測量調査成果 (等高線図)

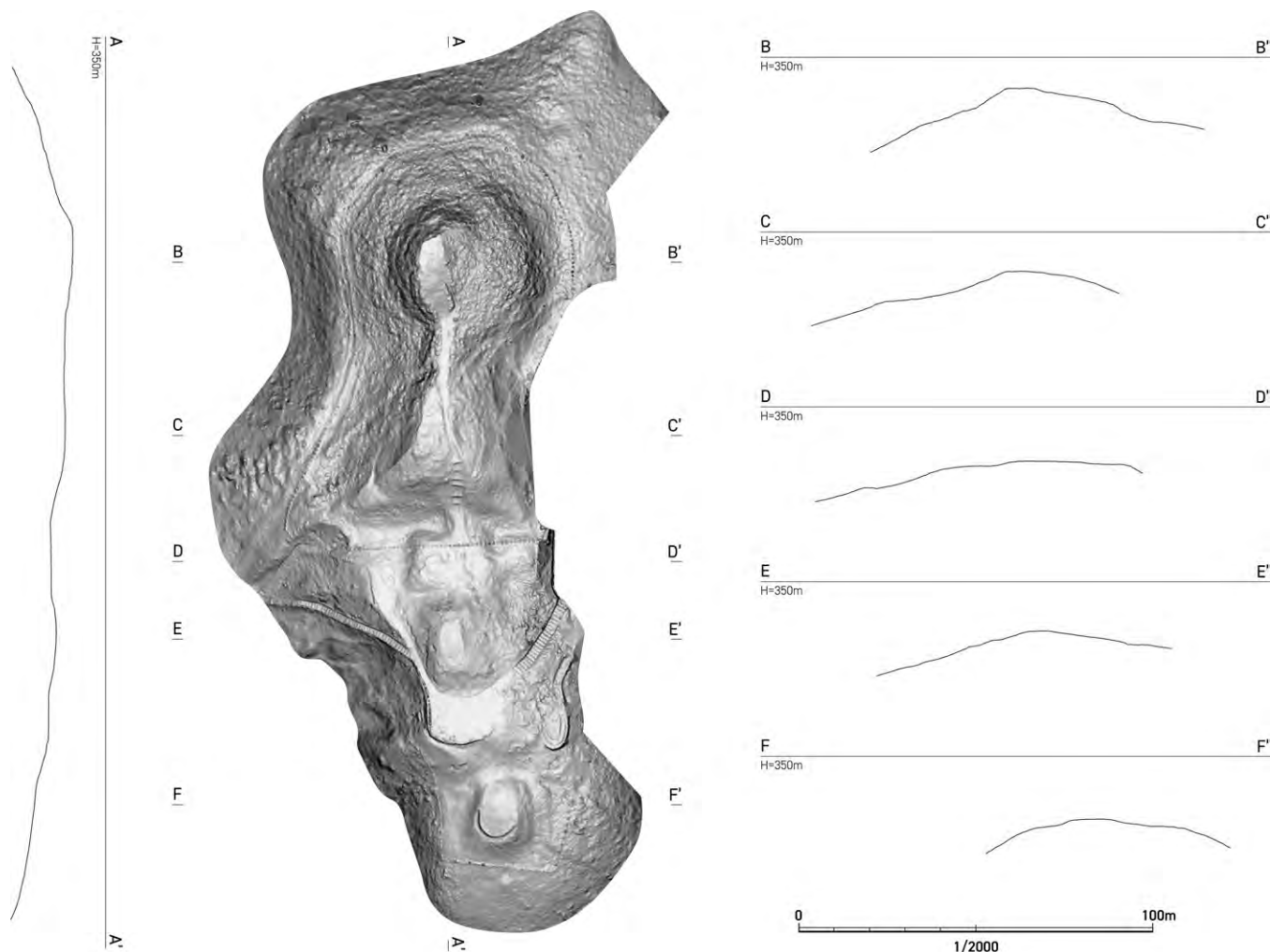


図5 鶯塚古墳の立面構造

る。古市方形墳(9)は円墳(30m)の可能性が高いが、後世の削平で方形を呈したためこの名がついた。粘土槨2基には内行花文鏡2枚、画文帯神獸鏡1枚、斜縁神獸鏡1枚、盤龍鏡1枚や玉類などが副葬されるほか、鱗付円筒埴輪や家・盾形埴輪が出土し、前期後半に位置づけられる。このほか東紀寺遺跡(10)では中期後半の小型古墳が確認されている。

集落遺跡の調査事例は多くはないが、南紀寺遺跡(11)には貼石を施した大溝遺構があり、大規模な導水祭祀遺構とみられる。古市遺跡(12)でも古墳時代の遺物が確認されるが詳細は不明である。

このほか、平城京造営時に削平された古墳が多く存在する。H J 258次調査(13)では鎌倉時代の井戸から前期後半の円筒埴輪・家形埴輪のほか、緑色凝灰岩製合子が出土した。H J 650次調査(14)でも紡錘車形石製品が出土している。石製品類は古墳の副葬品として出土することが多いことを踏まえれば、一帯に前期古墳が存在したと可能性が高い。

同地域は古代氏族のワニ氏系氏族の本拠地とされ、とくにそのひとつ春日氏の比定地と重なる(岸1966)。この比定の妥当性は、近年にも考古学的な検討から追認されている(村瀬2022)。(柴原)

IV 測量の方法

観光地として整備された当古墳では樹木が伐採されているほか、調査を実施した4月上旬は下草も少なく、地表面の大部分が上空から視通できる状態であった。このような条件から、ドローンで撮影した空中写真からSfM-MVSによって3次元モデルを生成する手法による測量が適切と判断した。

SfM-MVSによって生成されるモデルには座標値が含まれないので、測量範囲内に8点の対空標識(30×30cm/紙製)を設置し、平面座標と標高値を与えて基準点とした。平面座標はRTK-GNSS(Real-Time Kinematic Global Navigation Satellite System) モジュールのF9P(u-blox社)を使用して同一点を各3回観測し、いずれもFIX解を得てその平均値を採用し

た。RTK-GNSSは標高値の精度が十分でないため、各対空標識の標高は当古墳後円部頂に設置された三等三角点「三笠山」を基準にオートレベルによって観測した。

ドローン(DJI Mavic mini)を2回(各回15分)飛行させて撮影した空中写真は227枚で、Agisoft社Metashape Standardを使用して解析した。解析に使用したコンピュータはHP社Envy 16(Core i7-11800H, RTX3060, RAM32GB)で、Metashapeの設定は[写真のアラインメント:高]、[高密度ポイントクラウドの構築:高]、[メッシュ構築>ポリゴン数:中]、[テクスチャ構築:8192px]とした。

CloudCompareで座標を付与するとモデル全体での誤差は5cm以内に収まり、RTK-GNSS測量と3次元モデルの両方が必要な精度を満足すると判断した。不要な地物を消去したポイントクラウド(15,970,684点)をQGISで読み込み、20cmグリッドのDEM(Digital Elevation Model)から傾斜量図と等高線図を得た(図3・4)。前方部東側側面に植生による欠測部分がある以外は、全体として良好なデータを得た。断面図の作成にはQGISのプラグインであるqProfを使用した(図5)。

以上の作業は4月4日中に完了し、翌5日に現地にて測量成果を点検した。(柴原)

V 鷲塚古墳の墳丘構造

鷲塚古墳は近世以降人為的な変形を被っており、特に東半分では崩壊が顕著である。したがって、微細な起伏の表現を得意とする傾斜量図の判読から二次的な地形改変を評価することが、墳丘構造の解明に不可欠である(図6)。加えて、各所で露出する埴輪列の位置も復元の根拠となりうる。その位置が記録された旧測量図と本調査で作成した測量図(以下、『新測量図』)を重ね合わせると、2001年測量図とはおおむね整合する一方、1935年測量図には崖面や固定地物の位置に若干の矛盾が見られる。したがって、前者に記録された原位置の埴輪列はほぼ正確な位置と考えられるが、後者に示された埴輪列の位置は参考程度に留めるべきであろう。

以上の認識を前提として、最初に墳丘の主軸を復元する。後円部は西側で本来の段築が確認でき、比較的明瞭に残る第2段は直径約33mの正円で、後円部中心Oを復元できる。墳丘主軸を決定する前方部中心Pは、前方部東側が大きく変形することから直接決定することはできない。ここで後述の理由から出島状施設と考えた構造の短辺と前方部前縁が直交することを手がかりにすると、墳丘主軸の方向角はN21°Eに復元できる。このこ

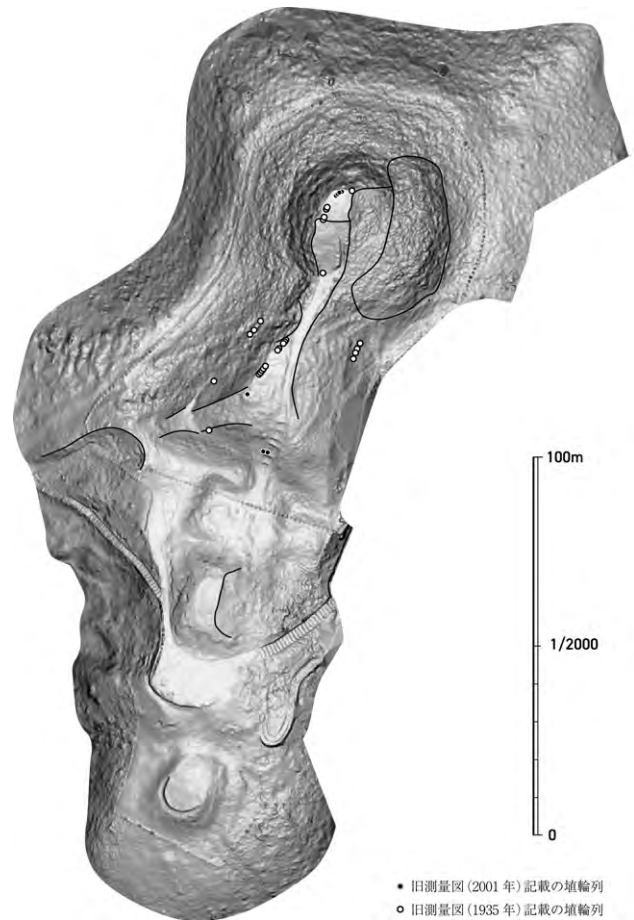


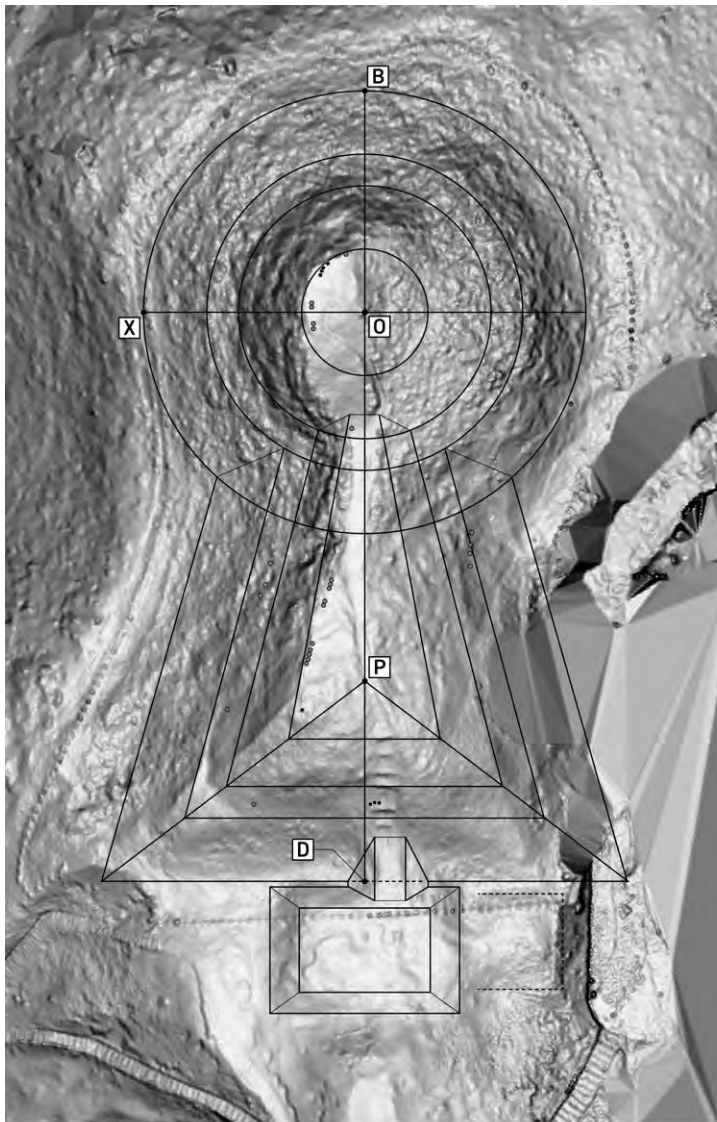
図6 墳丘の改変状況と埴輪列の位置

とは、復元した墳丘主軸を挟んで左右くびれ部の傾斜変換点がほぼ線対称の位置にあることと整合的である。

こうして復元した墳丘主軸を基準に墳丘復元を進めていきたい。後円部第1段は東半分が第2段を崩した土砂に埋没する一方、北側には本来の形状を留めるとされる平坦面が巡っている。この内縁を本来の後円部裾とすると後円部径は約59mとなり、その中心は第2段と一致する。第1段と第2段の間にはテラスが全周するが、平面図からはその幅を明確にできない。墳頂平坦面は北西側でほぼ原形を留めており、なおかつ原位置の埴輪列が確認されていることから直径17m程度に復元できる。

前方部は南東部が消滅しているが、先に復元した墳丘主軸を基準とするならば、最大幅74m、稜線の延長線の交点であるP点はO点から49mの位置と推定される。後円部半径BO長とOP長の比率は1:1.661となり、1:1.66…(3:5)に近似する。

以上で復元した墳丘構造は、綿密な事前計画と測量によって施工された可能性が高く、その設計を復元しておく。前方後円墳の設計原理については新納泉による一連の成果[新納2018]を基盤とする。



後 円 部	基本単位 (歩)	3.0
	基本単位数	7
	段築平面比	2 : 1 : 2 : 2
	第1段高 (歩)	3.0
	第2段高 (歩)	4.5
	後円部高 (歩)	7.5
	第1段斜面勾配	1 : 2.0
第2段斜面勾配	1 : 1.33	
前 方 部	基本単位 (歩)	3.0
	基本単位数	6
	段築平面比	2 : 1 : 15 : 1.5
	第1段高 (歩)	2.0
	第2段高 (歩)	2.0
	前方部高 (歩)	4.0
	第1段斜面勾配	1 : 3.0
第2段斜面勾配	1 : 3.0	
側線角度	2 : 7	
最大幅 (歩)	50	
全 体 の 構 成	BO : OP : PD (歩)	21 : 35 : 18
	BO : OP 比	1:1.66...
	後円部比率	0.56
	要請墳丘長 (歩)	75
	設計墳丘長 (歩)	74
調整長 (歩)	1	
使用	尺長 (m)	0.2320
尺度	歩長 (m)	1.3917

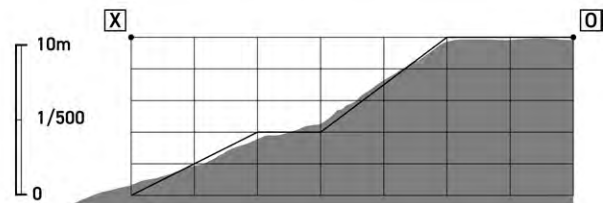


図7 鶯塚古墳の設計

後円部第1段と第2段の直径比は7:3.91で、7:4で割付けられた可能性が高い。第1段半径を7単位とすると、墳頂平坦面の半径はほぼ2単位に相当する。1単位の幅は4.2mで、これを後円部テラス幅と考えると大過無いだろう。第1段高は場所によって異なるが2.4~3.5m、第2段高は6.3mである。

前方部は各部が必ずしも明瞭でないが、後円部と同じ基本単位を当てはめると全体的に整合的な結果を得る。すなわち、前面での第1段・第2段斜面幅をともに2単位、テラス幅を1単位と考えると、左稜線付近でわずかに残るテラスと主軸上の埴輪列の位置と整合する。前方部前縁と出島状施設の厳密な位置関係は地形観察のみでは断定できないが、他の古墳での発掘調査事例を参考にすれば、両者は極めて近接するか、若干重複する可能性が高い。第1段高は1.5m、第2段高は3.2mである。

以上の割付に尺度による実長を与えると、前期から中期中葉にかけて使用された23.1cm/尺の尺度(甘粕1965、岸本2004、道上2022)よりわずかに長い23.20cm/尺(1.3917m/歩)が適合し、後円部・前方部ともに2段築成で基本単位3.0歩、墳丘長75歩に復元できる(図7)。当古墳は後世の変形によって復元の根拠が明確でない部分がある上、地形の制約からそもそも本来の設計を正確に施工できていない部分が多くあると思われる。したがって、本項で復元した設計は今後の調査によって再検証を要する。

なお、旧測量図の判読からは後円部3段築成、前方部2段築成とされているが(菅谷2001)、本調査からは後円部を3段築成とみなすことは難しい。また、前方部には「高さ75cmの台形の頂部」が指摘されているが、本調査では確認できなかった。

墳丘設計のもっとも根幹となるBO:OP比は1:1.5、1:1.75を主体としつつ0.25刻みのバリエーションをとるのが定型的で(柴原 2022)、鷲塚古墳のような1:1.66…となる例は限定的である。数少ない類例は赤土山古墳(奈良県天理市)や伊勢湾西岸地域の能褒野王塚古墳(三重県鈴鹿市)、石山古墳・御墓山古墳(同伊賀市)、宝塚1号墳(同松阪市)など地域的に限られる。これらはいずれも墳丘全体を2段築成で設計する点も共通する。

前方後円墳の墳丘長は5歩刻みで設定されることが指摘されており(岸本 2004)、特に墳丘長70歩以上では10歩刻みの完数値で設計される(柴原 2020)。当古墳は70歩以上でありながら5歩刻みの墳丘長である点で特異であるが、墳丘長が同じ75歩となる前方後円墳には、和爾下神社古墳(奈良県天理市/105 m)や一貴山銚子塚古墳(福岡県糸島市/103 m)が該当する可能性がある。

当古墳南西の尾根上には古墳状の高まりが3つ並んでいる。もっとも鷲塚古墳に近い高まりは後述の通り出島状施設である。その南西には13.4×10.0 m、高さ2.5 mの方墳がある。過去の報告によれば、雨後に墓壇の輪郭を見ることができたとある(菅谷 2001)。詳細は不明だが、鷲塚古墳の主軸上にあることから陪塚と考えられる。

さらにその南西には11.8×9.4 m、高さ3.4 mの不整円形の高まりがある。埴輪片や葺石とみられる石材の散布があり、円墳と考えられるが、鷲塚古墳からはやや離れた一段下がった場所にあることから、計画的に設置された陪塚とは考えにくい。(柴原)

VI 出島状施設の構造

本調査では前方部前面に取り付く出島状施設の存在が明らかになった(図8)。島部の平面形は25.0×16.6 m(18×12歩)で、長軸は墳丘主軸と直交する。高さは現況で1.3 mである。陸橋部は底部幅10.0 m、上面幅6.3 mの断面台形で、上面の長さは8.9 mである。発掘調査を経ていないので確実ではないが、上面の土壌は周辺で見られる赤褐色の地山と同質であり、地山成形で構築された可能性が高い。鹿や猪によって掘り返された部分には、原位置に近い葺石が露出している。南西に接する独立した方墳と比べると高さが著しく低平で、陸橋で繋がった方墳ではなく出島状施設とするのが妥当である。

出島状施設の東側にも5.0×4.5 mの方形の高まりが確認できるが、島部との接続関係は不明瞭である。コナベ古墳(清喜ほか 2011)の西造出しのように、高さの



図8 出島状施設の現況

異なる2つの平坦面が小斜面で接続する構造となる可能性があるが、現況からは断定が難しく、発掘調査による確認が望まれる。

陸橋部の構造は2001年の報告で言及されているほか、1935年の測量図でも図示されており、近年構築されたものではないだろう。陸橋部で露出する土壌が地山と類似することも、この部分が旧状を残していることを示す。

同様の施設は全国的にも類例が少なく、確実なものはほかに4例に留まる(図9)。

築山古墳 奈良県広陵町に所在する前期末の前方後円墳で、前方部西側側面の前縁寄りに出島状施設が取り付く。島部は16×12 m高さ1.5 mの方形で、西辺の2頂点は突出する。全体が地山成形で2段に構築されている。斜面には墳丘と同様に葺石を施すほか、西辺には州浜状の石敷がある。石敷石材の大部分は葺石と共通するが、一部に石英片岩のほか瑪瑙、白色円礫が含まれる。陸橋部は長さ5 m、幅5 mで、前方部側面の第1段斜面の途中に取り付く。島部上面は大部分が流出しているが、突出部には蓋・水鳥形埴輪、州浜部には家・柵・円形埴輪などが設置されていた。出島状施設に隣接して「8」字形の石組み遺構がある(広陵町教育委員会 2001)。

宝塚1号墳 三重県松阪市に所在する中期初頭の前方向後円墳で、前方部北側側面のくびれ部近くに出島状施設が取り付く。平野側にのみエプロン状に取り付く低平な基壇の上にある出島部の平面形は14.5×12.0 m、高さは0.6 mである。陸橋は基底幅5.2 m、長さ5.1 mで、前方部第1段側面の斜面中位に取り付く。全体が盛土で構築され、斜面には墳丘と同様に葺石がある。出島部上面で原位置の遺物や遺構は確認されていないが、周囲から家・盾・蓋・鳥形埴輪が出土したほか、導水施設形埴輪や大型の船形埴輪が設置されていた。円筒埴輪と

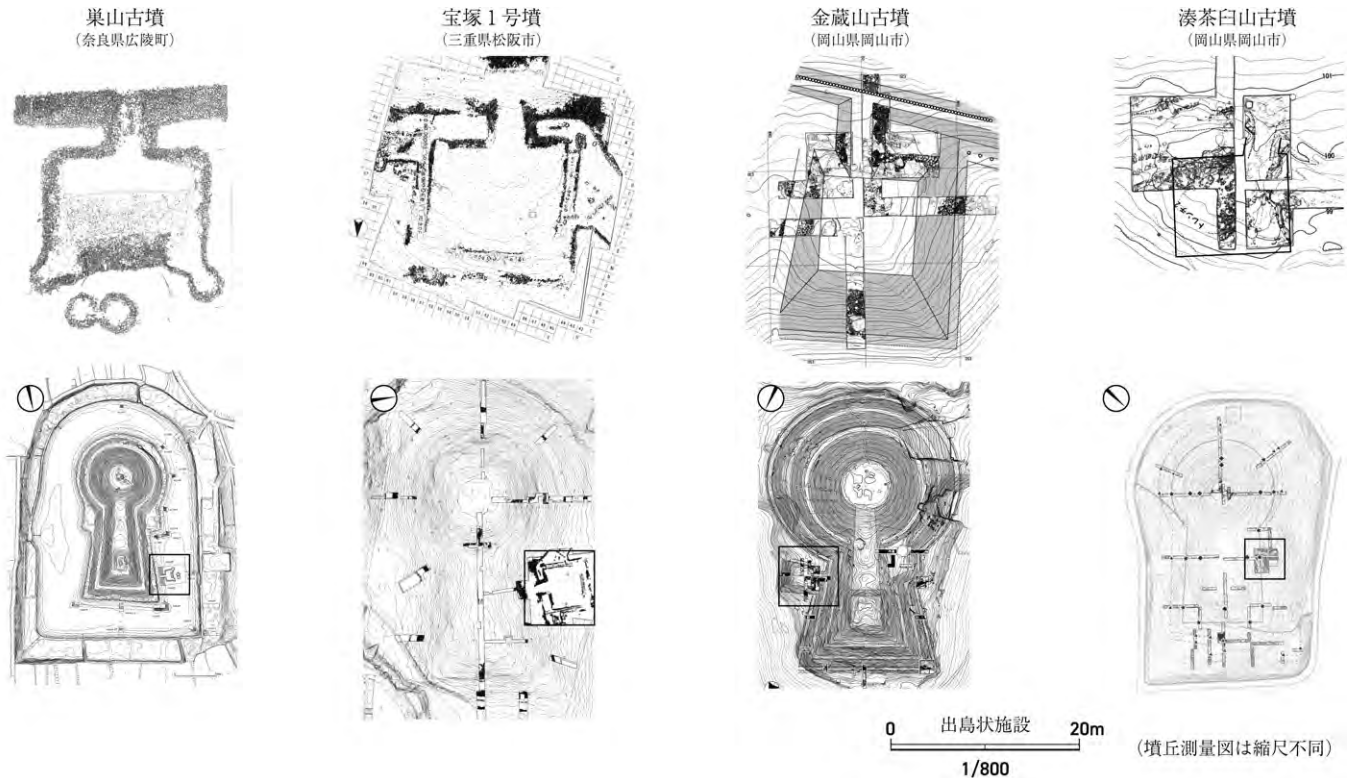


図9 出島状施設の例（各報告書に加筆）

壺形埴輪によって圍繞されている（松阪市教育委員会 2005）。

金蔵山古墳 岡山県岡山市に所在する前期末の前方後円墳で、西くびれ部に造出し、東くびれ部に「出島状施設」がある。出島状施設の上面は10×10 mの正方形で、前方部墳端からは1 mほどの高さがある。出島部の斜面は一部で前方部と接続している。地山成形が主体だが上面は薄く盛土があり、墳丘と同様の葺石を施す。上面には石敷があり、柵形埴輪で圍繞された区画内に家・蓋形埴輪を設置するほか、食物形土製品、笊形土器、高坏が出土する。陸橋部斜面下端には導水施設を模したと思われる形象埴輪群がある。墳丘とは異なり、円筒埴輪の設置は認められない（岡山市教育委員会 2019）。

湊茶臼山古墳 岡山県岡山市に所在する中期初頭の前方後円墳で、金蔵山古墳がある操山丘陵から南西に伸びる支尾根に立地する。前方部北側側面のくびれ部寄りに出島状施設がある。島部の平面形は13 m以上×10 m弱で、1 m程度の高さがあり、前方部側面第1段テラスと陸橋部を介して同一平面で接続する。全体が地山の岩盤を削り出して構築され、葺石の施工はない。原位置を保つ埴輪は確認されていないが、周辺から古墳築造に伴う須恵器片が出土している（岡山市教育委員会 2013）。

以上4例以外に、中期初頭の円墳である鳴谷東1号墳（京都府与謝野町）では、墳丘本体と隣接する方墳の3

号墳を接続する陸橋が確認されている。報告では両者は別個の古墳とされるが、3号墳の構造と規模は1号墳に付随する出島状施設と捉えられる可能性がある。3号墳は全体が地山成形で構築され、平面10.7×7.5 m、最大高1.7 mの不整形な方形である。島部は長さ3 m、高さ0.2 mの陸橋部で1号墳と接続する。1号墳が全面に葺石を施すのに対し、3号墳には当初から葺石が存在しなかったようである。平坦面には木棺2基を合葬する1つの墓壇がある。墓壇を圍繞するような方形埴輪列があるほか、陸橋部には3号墳から転落した家・蓋・盾・水鳥などの形象埴輪や鳥形土製品、高坏などが出土している（立命館大学文学部 1992）。

確実な出島状施設とされる前方後円墳の4例はいずれも前方部側面に取り付いており、前方部前面に取り付く鶯塚古墳例は特異である。狭い尾根上に立地する当古墳では側面に「出島状施設」を取り付けることが困難で、尾根に沿って平坦面の続く前方部前面にやむを得ず設置したのだろう。その点で取り付け位置の違いから大きな性格差を想定する必要はない。（柴原）

VII 鶯塚古墳の景観

盆地との比高差が200 mを超える若草山山頂に立地する鶯塚古墳は、広範囲を見渡すことのできる特徴的な景観にある。このような場所に古墳を築造するには平地に比べ多大な労力を要したことは言うまでもなく、なん

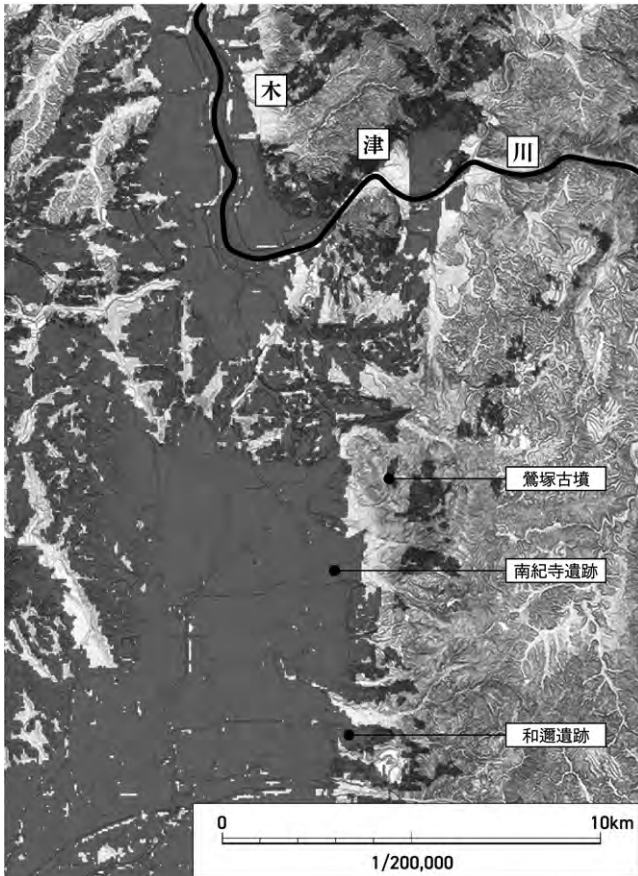


図10 鷲塚古墳の可視範囲(グレートーン:国土地理院傾斜量図に加筆)

らかの必然性があったことが推察される。

このような景観を分析するために、GISソフトウェア「カシミール3D」を使用して当古墳を見通すことのできる範囲を図示した(図10)。奈良盆地北部の現地形は平城京や平城・相楽ニュータウンの建設によって古墳時代から大きく改変されているが、可視範囲に大きな変化は想定しにくい。図を見ると、鷲塚古墳は奈良盆地北部の大部分から眺望できるだけでなく、現京都府の木津川流域からも広く見通せることが明らかである。他方、春日山麓から見ると古墳の姿は若草山そのものに遮られてしまい、「灯台下暗し」となってしまう。ワニ氏系の本拠地として有力視される天理市和邇遺跡からも見通すことができるが、鷲塚古墳からは直線距離で7km離れており、見かけの大きさは極めて小さい。したがって当古墳の立地は、その造営主体の経営基盤として想定できる領域だけでなく、木津川流域からの可視性を重視した結果と理解できる。

なぜ奈良盆地にありながら木津川を重視したのだろうか。文献史学の成果を参照すると、ワニ氏系氏族は奈良盆地北東部に留まらず、木津川を北上して旧巨椋池を経由し、そこから宇治川を遡って琵琶湖へ至るルートに

沿って多く分布する(加藤2013)。東国および北陸に続く内水面交通を掌握したことが、ワニ氏系氏族の経営基盤であった可能性が高い。このルート上には前期後半の有力古墳が濃密に分布しており、膨大な労働力を投下してでも若草山山頂に鷲塚古墳を築造した背景に、木津川を往来する人々に古墳の姿を誇示するというワニ氏系氏族の戦略を読み取ることも不可能ではないだろう。(柴原)

VIII 鷲塚古墳築造の意義

本調査では、限られた視点ではあるが鷲塚古墳の位置づけに関わる情報を得ることができた。当古墳は墳丘長104 m、後円部径58 m、前方部幅70 m、後円部・前方部ともに2段築成の前方後円墳で、前方部南側に出島状施設がある。

ここで重要となるのは4 km西方にある佐紀古墳群との関係である。佐紀古墳群は前期後葉から中期後葉にかけて200 m級の大型前方後円墳が相次いで築造される有力古墳群で、墳丘形態や埴輪生産など他地域に与えた影響も大きい。それでは、鷲塚古墳に佐紀古墳群の影響を読み取ることはできるのだろうか。

詳細は別稿を予定しているが、出土遺物の検討から鷲塚古墳の築造は前期末(津堂城山古墳併行)に位置づけられる。前期後葉～末の佐紀古墳群における古墳築造の中心は西群にあった。東群にも不退寺裏山古墳(前方後円墳/85 m)など、前期に遡る古墳がわずかにあるが、大型古墳の築造が本格化するのには中期以降。したがって、前期末の時点では佐紀古墳群の中心地と鷲塚古墳の間には6 kmもの大型古墳の希薄な領域があったことになり、当古墳を佐紀古墳群と一体で考えるのは難しい。また、佐紀古墳群のなかでも佐紀陵山古墳と五社神古墳には多くの相似墳が存在することが指摘されているが(岸本1992、澤田2017)、鷲塚古墳の平面形は佐紀古墳群の大型古墳とは類似せず、設計の根幹となるBO:OP比や段築構造は和邇遺跡に隣接する赤土山古墳や伊勢湾西岸地域の大型前方後円墳と高い共通性を示している。さらに、景観設計の観点からは、佐紀古墳群が奈良盆地からのみの視点を重視するのに対し、鷲塚古墳は平城山丘陵を越えた木津川流域からの視線をも重視するという根本的な違いを認めることができる。

以上の検討から、鷲塚古墳と佐紀古墳群の間には明確な差異が認められる。出土遺物の検討による検証が必要ではあるが、現時点での見通しとしては、当古墳をワニ氏系氏族の動向のなかで位置づけることが妥当である。

ドローンを用いた3次元測量調査によって、鷲塚古墳が大きな改変を被りつつも場所によっては旧状を留め、

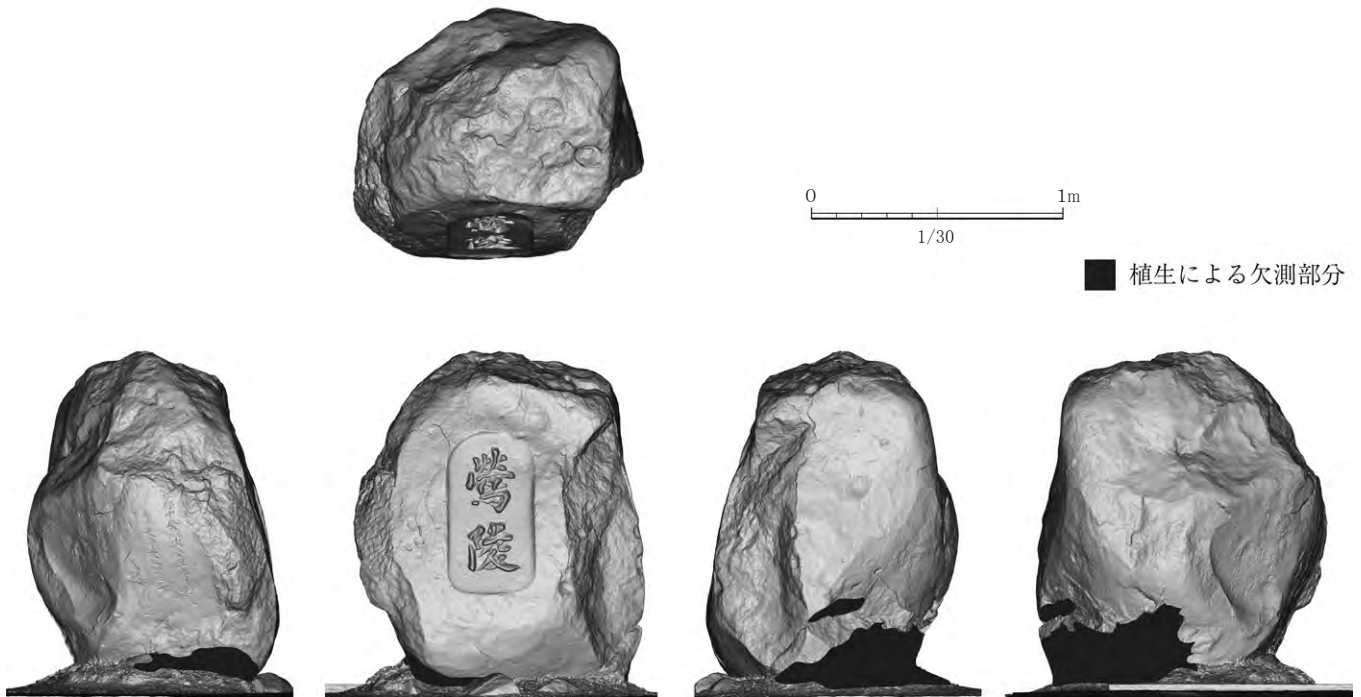
付帯施設である出島状施設を現地で確認できる極めて珍しい事例であることを確認した。これは当古墳が周囲の開けた山頂に立地することで二次堆積が少ないという環境に起因するが、その反面、遺構面を覆う土砂が少ないことで遺構の崩壊が深刻である。観光資源としての継続的な活用には十分な調査と保護が前提であることを改めて強調しておきたい。(柴原・村瀬)

附 「鶯陵」碑の3次元計測

鶯塚古墳の後円部墳頂には大型の石碑が存在する。周

囲の開けた屋外にあることに加え、観光客による接触によって表面の剥離が進行している。このような現状を踏まえ、測量調査に際して3次元計測で石碑の形状を詳細に記録することにした。

石碑の由来については足立 1936 に詳しい。それによれば、東大寺の再興に尽力した僧侶の庸訓が、『五畿内志』の著者である並河誠所(並河永)による考証を基に享保十八(1733)年に石碑を建立したという。嘉禄三(1228)年や貞和五(1349)年の文書には「牛墓」「宇志墓」と



延喜式曰平城坂上墓
清少納言謂之鶯陵
并河永誌



享保十八歲次癸丑九月良辰
東大寺大勸進上人
訓建

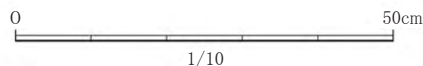


図11 鶯陵碑

記されており、当古墳を『枕草子』における「うぐひすの陵」に比定したのは『五畿内志』が初出である可能性が高いという。一方で、当古墳を『延喜式』にある仁徳天皇皇后磐之媛の平城坂上墓とみなす碑文の内容については、石碑建立前に刊行された『五畿内志』において並河自身が平城坂上陵を若草山ではなく那羅山に求めたことと矛盾しており、碑文が刻まれた経緯は明らかでない。

石碑の撮影は測量調査中に行った。使用したカメラはNikon D3400 (APS-C サイズセンサー) で、65枚撮影した。画像はすべてRAW形式で保存し、ホワイトバランスを調整してtiff形式で出力したのちにAgisoft Metashape Standard版で処理した。その結果8,569,237点からなる3次元モデルを生成し、CloudCompareで座標を入力するとともに各面のオルソ画像を出力した。完成したモデルには、石碑の基底付近に生える下草によって生じた欠測部分があるほか、上面のくぼみに溜まっていた雨水によって正確に計測できていない部分があるが、それ以外は表面形状を詳細に捉えることができた。

地上に露出する部分の高さ130cm、最大幅115cm、奥行き100cmである。基部は古墳の葺石を転用したと思われる10cm大の礫で基礎を造り、石碑下端を埋め込むようにして固定している。石碑本体は安山岩質の巨大な自然石を利用している。若草山の山体は大部分が三笠安山岩(含角閃石輝石安山岩)から構成されており(粉川1954)、近辺で獲得した自然石を加工して製作された可能性が高い。自然面を多く残すが、一部で面取り加工がなされ、文字が刻まれている。

正面中央には高さ65cm、幅35cmの隅丸方形のくぼみがあり、中央に「鶯陵」と刻まれる。この面を南西側に向けて設置されており、鶯塚古墳前方部から見るとこの面が正対する。

左側面には石碑自体の由来と当古墳の伝承が刻まれている。加工によって表面を整えた面が2面あり、右側に「享保十八歳次癸丑九月良辰 東大寺大勸進上人 □訓建」、左側に「延喜式曰平城坂上墓 清少納言謂之鶯陵 并河永誌」とある。右側の□部分には「庸」の字が刻まれていたようだが(足立1936、菅谷2001では『康』とする)、現在は剥離し文字の2/3が消滅している。

鶯塚古墳の由来を伝えるだけでなく、近世における陵墓治定の実態を示す史料であり、保存処理や解説板の設置が望まれる。(柴原)

引用・参考文献

- 足立 康 1936 「鶯塚古墳の碑」『考古学雑誌』26-1
- 甘粕 健 1965 「前方後円墳の研究 - その形態と尺度について -」『東洋文化研究所紀要』37, 東京大学東洋文化研究所
- 梅原末治 1935 「大和奈良鶯塚古墳」『近畿地方古墳墓の調査』日本古文化研究報告1, 日本古文化研究所
- 岡山市教育委員会 2013 『湊茶白山古墳』
- 岡山市教育委員会 2019 『金蔵山古墳』
- 加藤謙吉 2013 『ワニ氏の研究』日本古代氏族研究叢書③, 雄山閣
- 岸 俊男 1966 「ワニ氏に関する基礎的考察」『日本古代政治史研究』塙書房
- 岸本直文 1992 「前方後円墳築造規格の系列」『考古学研究』39-2
- 岸本直文 2004 「前方後円墳の墳丘規模」『人文研究』55-2, 大阪市立大学大学院文学研究科
- 広陵町教育委員会 2001 『巢山古墳調査概報』学生社
- 粉川昭平 1954 「奈良県三笠山付近の地質」『地質学雑誌』60 (710)
- 澤田秀実 2017 『前方後円墳秩序の成立と展開』同成社
- 柴原聡一郎 2020 「前方後円墳の墳丘長の規格性」『東京大学考古学研究室研究紀要』33
- 柴原聡一郎 2022 「前方後円墳設計技術の流通構造」『ヒストリア』295
- 菅谷文則 2001 「鶯塚古墳」『大和前方後円墳集成』奈良県立橿原考古学研究所
- 清喜裕二・有馬伸・加藤一郎 2011 「小奈辺陵墓参考地墳塹裾護岸その他整備工事に伴う事前調査」『書陵部紀要』第62号〔陵墓篇〕
- 奈良市教育委員会 1993 「平城京左京五条七坊六坪の調査 第258次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成4年度
- 新納 泉 2018 「前方後円墳の設計原理と墳丘大型化のプロセス」『国立歴史民俗博物館研究報告』211
- 松阪市教育委員会 2005 『史跡宝塚古墳』
- 道上祥武 2022 「建築遺構からみた古墳時代から古代の尺度の変遷」『古代学研究』231
- 村瀬 陸 2022 「ワニ氏のなかの大宅氏とベンシヨ塚古墳」『ベンシヨ塚古墳発掘調査報告書』奈良市教育委員会
- 立命館大学文学部 1992 『鴨谷東古墳群第3・4次調査発掘調査概報』立命館大学文学部学芸員課程研究報告4

帯解地域の後期古墳

—奈良市山町七ツ塚古墳群測量調査報告—

森下浩行

I はじめに

笠置山地（大和高原）から奈良盆地に向かって西へ派生した南北二つの丘陵とこれらに挟まれた谷部（旧帯解町の範囲）に古墳が分布しており、これを帯解古墳群と呼ぶ。この北側の丘陵の南裾を東西に延びる道路が奈良市市道南部478号線で、山町から菩提山町へ抜けている。この丘陵尾根南斜面には多くの古墳が存在し、道路の改良工事の事前調査として、1994（平成6）年12月に五ツ塚古墳群の、1997（平成9）年に七ツ塚古墳群の発掘調査を実施した。七ツ塚古墳群の発掘調査は、古墳群本体に係る部分はなく、墓道等を確認すべく実施し、第4号墳の前面で須恵器を伴う小土坑を検出している（大窪1997）。

今回報告するのは、七ツ塚古墳群の発掘調査時に平板による墳丘及び地形測量（縮尺1/100、等高線20cm間隔）を実施した成果である。測量期間は1997年2月3日～10日、発掘調査を挟んで、2月25日～3月27日（計28日間）で、当時、埋蔵文化財調査センター職員であった森下浩行、大窪淳司と、大学生の山口均、坂倉清彦の4名で実施した。

II 周辺の古墳

七ツ塚古墳群が位置する丘陵尾根南側の古墳について、西から順に概説する。

て、西から順に概説する。

円照寺山門脇北古墳群（第1・2号墳） 東から西に延びる丘陵が円照寺の存する箇所にて二股に分かれ、その北側の丘陵頂部に位置する。円照寺山門よりかなり北西にある。『奈良市史』考古編には後期古墳研究会が測量した墳丘図が掲載されており、円照寺山門脇古墳（第2・1号墳）とする（小島1968）。のちに同志社大学学生有志が墳丘測量。こちらは円照寺山門脇北古墳群（第1・2号墳）とする（深沢ほか1998）。以下、山門脇北と称す。奈良県遺跡地図には名称が記載されていない（奈良県立橿原考古学研究所編1998）。第1号墳は円墳で、直径約9m、高さ約1m。方墳の可能性もある。第2号墳は方墳で、一辺約13m、高さ約1.5m。資料は、墳丘測量図しかないが、丘陵頂平坦面にあり、立地からみて中期古墳の可能性はある。

円照寺山門脇古墳群（第1・2号墳） 東から西に延びる丘陵が円照寺の存する箇所にて二股に分かれ、その南側の丘陵の南斜面に位置する。同志社大学学生有志が墳丘測量調査を実施し、円照寺山門脇古墳群とする（深沢ほか1998）。また、奈良県遺跡地図でも円照寺山門脇第1号墳・2号墳とする（奈良県立橿原考古学研究所編1998）。以下、山門脇と称す。第1号墳は直径15m



七ツ塚古墳群及び周辺の古墳位置図（下図は国土地理院1/10,000地形図 帯解）

の円墳とされているが、方墳の可能性が高いとみる。東側は南北に通路があるため、不確定だが、西側をみると105.75～107.75 m等高線のくびれが墳裾を示すとすると、直線状になる。方墳とみた場合、北辺12 m、その他の辺は15 mで台形状を呈する。南辺からの高さは約2.5 m。北に開く盗掘坑と南に開く盗掘坑があるが、石室となる石材は見当たらない。2号墳は、直径約10 mの円墳で、南裾からの高さは約2 m。

天神山古墳 丘陵頂よりやや下がった南斜面に位置する。幅約2 mの組合せ式石棺が出土しており、現在一部が円照寺の庭石となっている（佐藤・末永1930）。同志社大学学生有志が測量した墳丘図がある。東西約20 m、南北約22 mの円墳で、高さは南裾より約5 m。石棺が出土したとみられる南北10 m、東西3～4 mの既掘坑は北から南へ開いているが、石室石材は見当たらない。石棺直葬の可能性もあるが、石棺を有する横穴式石室が存在したとすれば、指摘通り、墳丘の上半部に開口する終末期古墳の可能性もある（笠原ほか1988）¹⁾。

円照寺墓山古墳群（墓山第1・2・3号墳、墓山古墳）
第1・2号墳は丘陵頂部の南斜面に位置する円墳。第1号墳は直径15 m、第2号墳は直径8 mとするが、墳丘図が知られていないので、不詳。見かけはもう少し大きく見える。小古墳であるが、大量の武器・武具を副葬した中期古墳である。第3号墳・墓山古墳はともにさらにかなり下った斜面に位置する直径14 mの円墳で、

3号墳には横穴式石室が確認されている（佐藤・末永1930）（伊達宗泰1968）。周辺には小古墳が存在した可能性があり、群集墳を形成していたと思われる。

五ツ塚古墳群（西から第1・2・3・4・5号墳）丘陵尾根南斜面の裾部に位置する。文字通り五つの塚が並ぶように見えるが、直線に並ぶのではなく、W字状に並んでいる。円墳3基と方墳2基で、西から円墳、方墳、円墳、方墳、円墳と並び、円墳が南へ突出して並び、方墳がその谷部に並ぶ。墳形と立地から見て、おそらく円墳が方墳に先行するものとみられる。埋葬施設は、いずれも横穴式石室で、両端の2基は、天井がなく埋まっており、中央の3基は南に開口するが、現在は内部に立ち入れない。中央の3基の先後関係は、石室石材の大きさからみて、第3号墳、第4号墳、第2号墳の順に築造されたとみられる。おそらく最初に円墳3基（第1・3・5号墳）が造られ、ついでその間に方墳2基（第2・4号墳）が造られたとみて矛盾がない。（森下1995）。

続いて丘陵尾根南斜面の裾部に位置するのが七ツ塚古墳群で、さらに東へと小円墳が連なっている。

III セツ塚古墳群

七ツ塚古墳群は、奈良市八島町堂所1271、1272に位置する。奈良県の遺跡地図（奈良県立橿原考古学研究所編1998）では、6基の円墳が載っており、西から第1号墳～第6号墳と付されている。文字通りの七つの塚ではない。立地するのは東西方向の丘陵の南裾で、東か

七ツ塚古墳及び周辺の古墳一覧表

古墳名	墳形	直径・一辺(m)	埋葬施設	石室全長(m)	立地	群構成
七ツ塚	1号墳	16	横穴式石室	推定10	斜面南裾	群集墳
	2号墳	14	横穴式石室	推定9		
	3号墳	12	横穴式石室	推定8		
	4号墳	13.5	横穴式石室	推定8		
	5号墳	22.5	横穴式石室	推定15		
	6号墳	16.5	横穴式石室	推定10		
五ツ塚	1号墳	18	横穴式石室	10	斜面南裾	群集墳
	2号墳	15	横穴式石室	8		
	3号墳	18	横穴式石室	10		
	4号墳	14×16	横穴式石室	8		
	5号墳	18	横穴式石室	10		
円照寺墓山	1号墳	15	竪穴系		斜面頂部近く	2基1組
	2号墳	8	竪穴系		斜面中腹	群集墳
	3号墳	14	横穴式石室		斜面中腹	単独
	墓山古墳	14	不明		斜面中腹	2基1組
天神山		22	石棺		頂部	2基1組
円照寺山門脇	1号墳	15	不明		斜面中腹	2基1組
	2号墳	10	不明			
円照寺山門脇北	1号墳	9	不明		頂部	2基1組
	2号墳	13	不明			

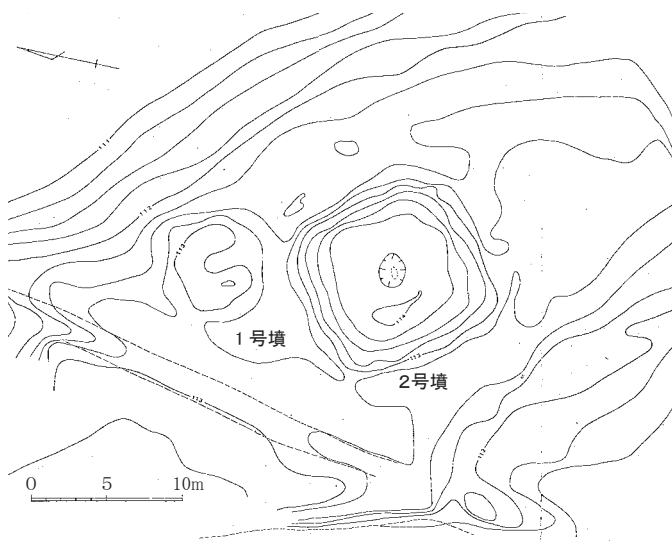
ら西へ下る谷地形に面している。各古墳の並びは、西から順に第1号墳、第2号墳で、中央の第3号墳と第4号墳は、北に第3号墳、南に第4号墳が位置する。さらに東へ第5号墳、第6号墳と続く。

いずれもいわゆる山寄の古墳で、背部に周溝がある。墳丘の残存状況は悪くないが、埋葬施設とみられる横穴式石室は、ほとんどが石室ごと持ち去られているようで、いずれも平面U字形の盗掘坑が残る。石材の痕跡がみられるのは6号墳のみである。坑の形状からみておおむね

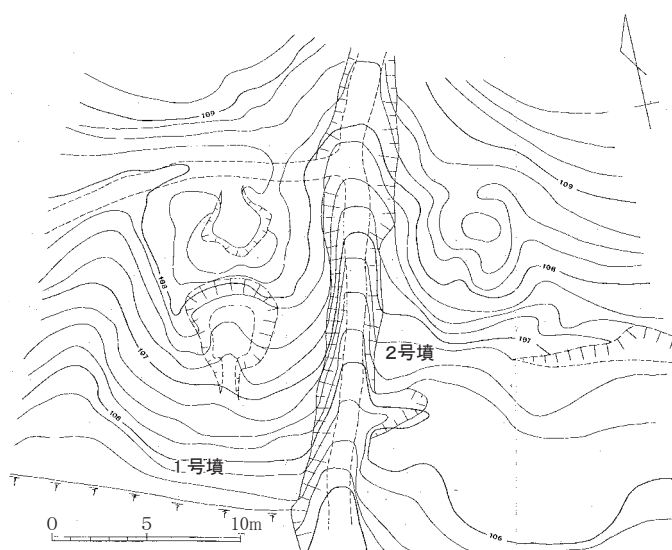
南あるいは南西方向に開口していたとみられる。

第1号墳 古墳群の西端に位置する。墳丘の南半部が削平されており、北半部と背部は残っている。北半部では一部、北東から南西方向に石材を抜いたとみられる盗掘坑が削平されずに残っている。埋葬施設は、盗掘坑から復元墳裾までをはかると全長11 mくらいの横穴式石室であったとみられる。開口方向は南西とみられる。

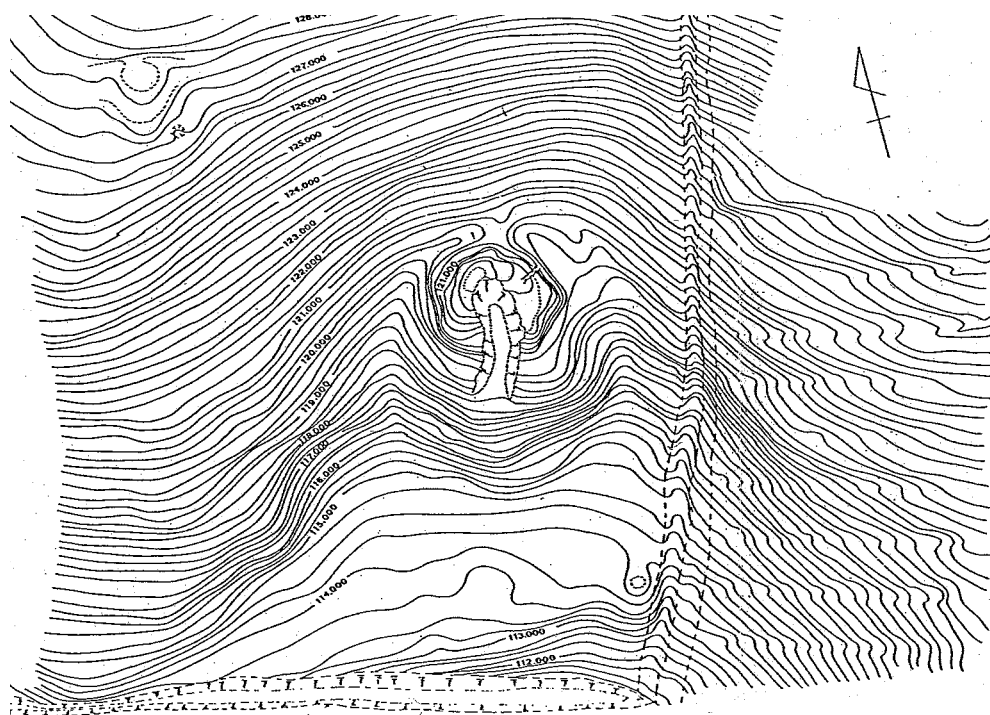
墳丘は、おおむね117.2 m等高線以上が残っており、墳丘東・西の118.6 m等高線までが背部に回らずそれ



円照寺山門脇北古墳群墳丘図 (1/500) 深澤他 1988 より転載



円照寺山門脇古墳群墳丘図 (1/400) 深澤他 1988 より転載



天神山古墳墳丘図 (1/600) 笠原ほか 1988 より転載

ぞれ東・西にくびれることから、背部の周溝の位置がわかる。117.2～118.6 m等高線のくびれ状況から墳丘規模を推定すると、直径 16 mの円墳が復元できる。現状の高さは背部では 0.4 m、開口部では 2 m以上。墳頂の標高は 119.116 m。

第 2 号墳 第 1 号墳の東に位置する。墳丘は残存するが、石室は盗掘により破壊。石材を抜いたとみられる盗掘坑は北東から南西方向に広がっており、長さ 5 m、幅は広いところで 3 m。埋葬施設は、盗掘坑から復元墳裾までをはかると全長 9 m くらいの横穴式石室であったとみられる。開口方向は南西。

墳丘はほぼ残存。117.2 m 以上、118.2 m 以下の等高線のくびれが墳丘の裾線を表しており、円弧状に周る。等高線のくびれ状況から墳丘規模を推定すると、直径 14 mの円墳が復元できる。現状の高さは背部では 1.2 m、開口部では 2 m以上。墳頂の標高は 119.085 m。

第 3 号墳 第 2 号墳に接して北東に位置する。墳丘は残存するが、いびつである。石室は盗掘による破壊。石材を抜いたとみられる盗掘坑は北から南方向で、長さ 5.2 m、幅 2.4 m。埋葬施設は、盗掘坑から復元墳裾までをはかると全長 8 m くらいの横穴式石室であったとみられる。開口方向はほぼ南である。

墳丘はいびつで、西側が 118.6 m 以上、東側が 119.0 m 以上が円弧状に周り、いずれも 119.6 m 以下の等高線のくびれが裾線を表す。いびつな要因は、西側は 2 号墳北東背部の、東側は後述する第 5 号墳北西背部の周溝が重複していることによる。このことにより第 3 号墳が第 2 号墳よりも、また第 5 号墳よりも先に築造されたことがわかる。当初の状態が良く残っている墳丘背部の等高線からみて、第 3 号墳は直径 12 mの円墳が復元できる。現状の高さは背部では 0.4 m、開口部では 2 m 以上。墳頂の標高は 120.103 m。

第 4 号墳 2 号墳の南東、3 号墳の南に位置する。墳丘は残存するが、南縁が水路と通路によって破壊されている。石室は盗掘による破壊。石材を抜いたとみられる盗掘坑は北東から南西方向に広がっており、長さ 6.4 m、幅 4 m。坑の位置は復元した円墳の中央よりやや東寄りにある。埋葬施設は、盗掘坑から復元墳裾までをはかると全長 8 m くらいの横穴式石室であったとみられる。開口方向は南西。

墳丘は西側の 117.4 m から 118.2 m 等高線が盗掘坑長軸に平行して南西から北東方向にほぼ直線状に伸びている。東側と背部では、118.0 m から 118.4 m までの等高線がくびれ、裾線を表す。墳丘の北西側の等高線の

状況をみれば、後世に円墳の西側が改変を受けて直線状になったとみるべきである。第 3 号墳と第 4 号墳の先後関係は不明であるが、3 号墳が後出するとした場合、古墳築造の通路として使われた際の改変の可能性がある、第 4 号墳が後出する場合でも第 3 号墳の盗掘の際の改変の可能性がある。いずれにせよ、当初は直径 13.5 mの円墳が復元できる。現状の高さは背部では 1 m、開口部では 2 m 以上。墳頂の標高は 119.899 m。

第 5 号墳 第 3 号墳・第 4 号墳に接して、第 3 号墳の東、第 4 号墳の北東に位置する。墳丘は残存するが、第 4 号墳と同様、南縁が水路と通路によって破壊されており、また、南西側がいびつである。石室は盗掘による破壊。石材を抜いたとみられる盗掘坑は長さ 12.5 m、幅は広いところで 6 m。坑の位置は復元した円墳の中央よりやや東寄りにある。坑の奥は、傾斜が緩やかであり、奥壁の一部が残存している可能性がある。埋葬施設は、盗掘坑から復元墳裾までをはかると全長 15 m くらいの横穴式石室であったとみられる。開口方向は南南西。

墳丘は、南・南西側以外は等高線がきれいな円弧を描き、118.4～119.6 m までの等高線のくびれが裾線を表している。南西側のいびつな形状は、第 4 号墳の背部の周溝が墳丘南西側にあたり、重複関係がみられるためである。このことにより第 5 号墳が第 4 号墳よりも先に築造されたことがわかる。墳丘の裾線から直径 22.5 mの円墳が復元できる。現状の高さは背部では 1.3 m、開口部では約 3 m。墳頂の標高は 121.344 m。

第 6 号墳 第 5 号墳の東に位置する、古墳群中、最東端の古墳。墳丘は残存するが、南東縁が水路と通路によって破壊されている。石室は盗掘により破壊され、残存する石材が数点見られる。石材を抜いたとみられる盗掘坑は北東から南西方向に広がるものと、北西から南東方向に広がるものがある。最初に石材を抜いた方向は北東から南西方向であろうから、北西から南東方向の坑は盗掘後に残存していた側壁石材を抜き出したものかもしれない。北東から南西方向の坑は、東西 3.8 m だが、南北は北西から南東方向の坑に破壊され不明確で、およそ 8.5 m とみられる。北西から南東方向の坑は長さ 8.5 m、幅 3.5 m。最初に石材を抜いたとみられる坑の位置は復元した円墳の中央よりやや東寄りにある。埋葬施設は、盗掘坑から復元墳裾までをはかると全長 10 m 程度の横穴式石室であったとみられる。開口方向は南西。

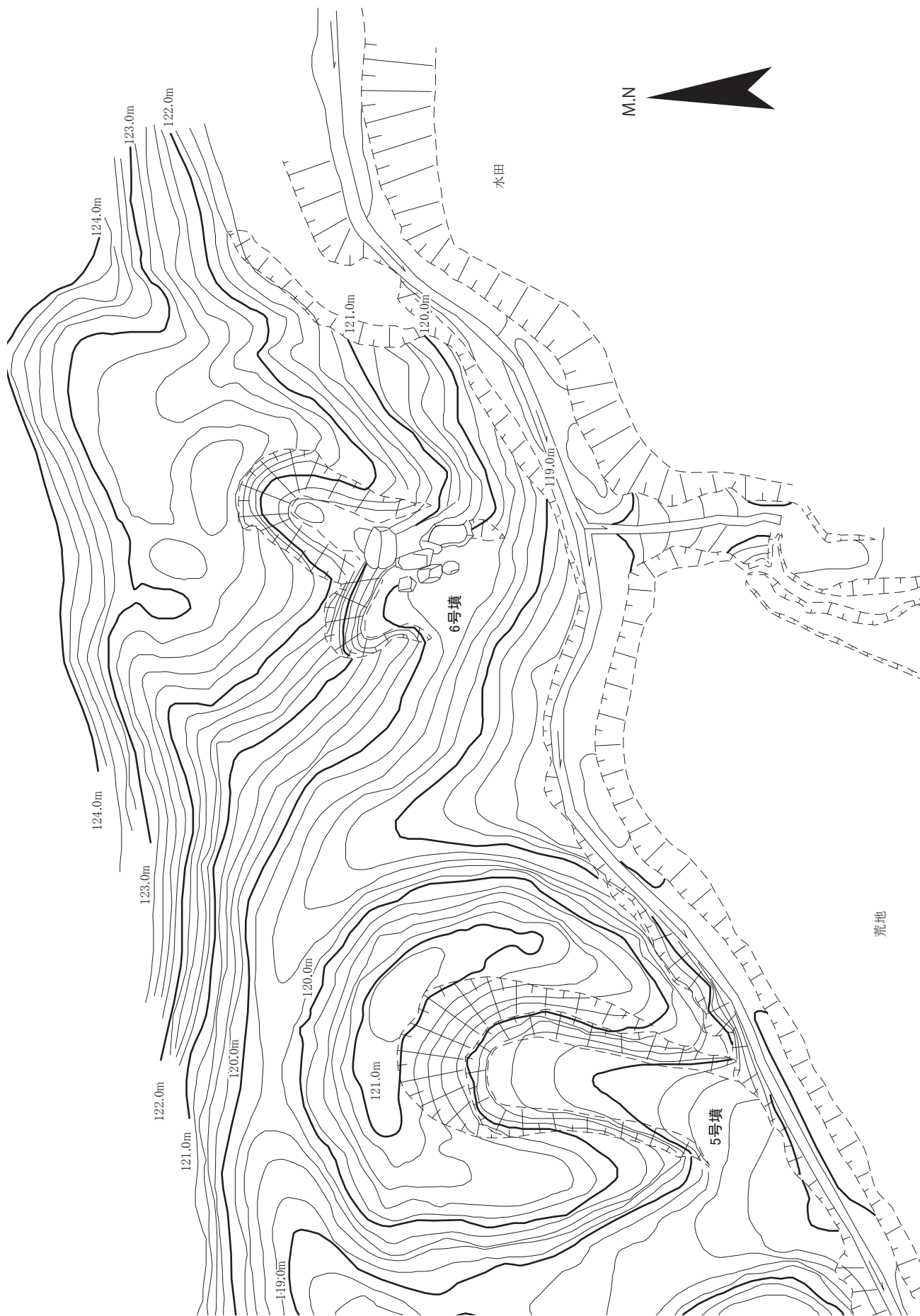
墳丘は、西側が 121.0 m 以上、東側が 121.6 m 以上、いずれも 123.0 m 以下の等高線のくびれが裾線を表す。東側で 121.4 m 以下の裾線がはっきりしないのは、道



七ツ塚古墳群墳丘及び地形図 (1/400)



七ツ塚古墳群墳丘及び地形図西半 (1/200)



七ツ塚古墳群墳丘及び地形図東半 (1/200)

によって削られているためである。また、西側で120.8 m以下の裾線がはっきりしないのは、墳裾は接していないものの、後続する5号墳の周溝で改変されたものと思われる。墳丘の裾線から直径16.5 mの円墳が復元できる。現状の高さは背部から0.2 m、開口部では約3.2 m。墳頂の標高は123.143 mで背部は当初より埋まっているものと思われる。なお、背部が不明瞭だからであろうか、この古墳は一見二つの古墳に見える。そのため、名称が「七ツ塚」となった可能性がある。

七ツ塚古墳群についてまとめると、6基の円墳のうち、最も大きい第5号墳が直径22.5 m、ついで第1号墳と第6号墳がそれぞれ直径16 mと16.5 m、第2号墳と第4号墳がそれぞれ直径14 mと13.5 m、最も小さい第3号墳が直径12 mで、等質的ではなく、墳丘規模は3段階に分かれる。また、東西80 m、南北30 mの範囲に密集しており、重複関係も見られる。重複関係からは、第3号墳→第2号墳、第3号墳→第5号墳、第5号墳→第4号墳という先後関係となる。古墳群の造営については、資料が少なく、憶測の域を出ないが、五ツ塚古墳群の造営を参考にすると、同様に最初に古墳群の両端と中央の3基の古墳（第1・3・6号墳）が造られ、その間を埋めるように2基の古墳（第2・5号墳）が造られ、最後に4号墳が造られたと考えると矛盾がない。

IV 帯解古墳群北丘陵の尾根南側の古墳について

ついで、帯解古墳群北丘陵尾根南側の古墳（「I周辺の古墳」参照）のなかでの七ツ塚古墳群の位置付けを行いたい。まず、立地については、丘陵尾根頂部（山門脇北1・2号墳）と丘陵尾根南斜面とに分かれ、斜面は、頂部近く（墓山第1・2号墳）、中腹（山門脇第1・2号墳、天神山古墳、墓山第3墳）、裾部（五ツ塚古墳群、七ツ塚古墳群）とに分かれる。

ついで、群構成は、単独墳（天神山古墳）、2基1組（山門脇北第1・2号墳、山門脇第1・2号墳、墓山第1・2号墳、墓山3号墳・墓山古墳）、3基以上（五ツ塚古墳群、七ツ塚古墳群）に分かれる。

埋葬施設が横穴式石室またはその可能性が高い古墳は、五ツ塚古墳群、七ツ塚古墳群、墓山古墳、墓山第3号墳であり、いずれも後・終末期古墳である。また、竪穴系の埋葬施設であるのは、墓山第1・2号墳であり、中期古墳である。

これらのことからみて、より高い位置に立地しているものが相対的に古く位置づけられ、2基1組のものも古く位置づけられる可能性がある。丘陵尾根頂部に立地する山門脇北第1・2号墳は中期古墳の可能性が高く、

裾部に位置する五ツ塚古墳群、七ツ塚古墳群はより新しい後・終末期の群集墳である。

では、五ツ塚古墳群と七ツ塚古墳群はどのように位置づけられるのか。構成する古墳数は5基と6基でほぼ同数であるが、五ツ塚古墳群は一定の間隔をあけて造られているのに対して、七ツ塚古墳群では密集し、墳丘が重複しているものもある。また、墳丘の大きさも五ツ塚古墳群は等質的であるのに対し、七ツ塚古墳群ではばらつきがある。五ツ塚古墳群は2基が方墳、3基が円墳であるのに対して、七ツ塚古墳群はすべて円墳で構成されているが、先に論じたようにいずれも最初に古墳群の両端と中央の3基が造られ、その間を埋めるように2基または3基の古墳が造られたものとする。五ツ塚古墳群と七ツ塚古墳群とは、同様の立地でありながら、それぞれ集団内の関係は異なっていたようで、五ツ塚集団が等質的とみられるのに対して、七ツ塚集団には格差があったものとみられる。

註

1) ここでは仮に「円照寺裏山古墳」としているが、後に佐藤・末永の報告（1930）による「天神山古墳」と訂正されている。（日高1989）

参考文献

- 大窪淳司 1997 「七ツ塚古墳群の調査 第1次」『奈良市埋蔵文化財調査概要 報告書 平成8年度』奈良市教育委員会
- 日高慎 1989 「円照寺庭石について」『古墳ジャーナル』第4号 同志社大学考古学実習室古墳文化研究会
- 笠原勝彦・田村悟・日高慎ほか 1988 「円照寺裏山古墳」『古墳ジャーナル』第2号 同志社大学考古学実習室古墳文化研究会
- 小島俊次 1968 「山村地区」『奈良市史』考古編、奈良市
- 佐藤小吉・末永雅雄 1930 「圓照寺墓山第1號古墳調査」『奈良縣史蹟名勝天然記念物調査報告』第11冊、奈良縣
- 伊達宗泰 1968 「円照寺墓山2号墳」『奈良市史』考古編、奈良市奈良県立橿原考古学研究所編 1998 『奈良県遺跡地図 第1分冊』奈良県教育委員会
- 深沢敦仁・田村悟・藤川智之 1998 「新入生歓迎測量調査報告」『古墳ジャーナル』第3号 同志社大学考古学実習室古墳文化研究会
- 森下浩行 1995 「五ツ塚古墳群の調査 第1次」『奈良市埋蔵文化財調査概要 報告書 平成6年度』奈良市教育委員会

平氏隆盛の頃の腰刀と杏葉轡

鐘方正樹

I はじめに

平成24年度に実施した奈良市埋蔵文化財調査センター夏季速報展示「平氏隆盛の頃の腰刀と轡」で保存処理が完了した西大寺旧境内第23次調査土坑墓S X 71（奈良市教委2010）出土の腰刀2本と平城京跡第157次調査井戸S E 41（奈良市教委1989）及び平城京跡第484次調査井戸S E 07（奈良市教委2006）¹⁾出土の轡を公開展示した。その際、各資料の実測図を作成して検討したが、その内容は速報展示リーフレットNo.46「平氏隆盛の頃の腰刀と轡」に概要の一部を記述したにとどまる。

そこで、改めて各資料の報告を行い、中世に盛行する腰刀と杏葉轡の変遷と意義について遺跡出土資料を中心に検討しておきたい。なお、リーフレットNo.46の記載内容を本稿では一部修正している。

II 腰刀

(1) 西大寺旧境内第23次調査出土の腰刀（図1）

西大寺旧境内第23次調査で土坑墓S X 71から大小2本の腰刀が出土した。共伴した龍泉窯系輸入青磁碗2点と同安窯系輸入青磁小皿3点から12世紀後半の腰刀と推定できる。2本ともに鉄錆で覆われた表面に黒漆膜が遺存していたため、その保存を優先した保存処理を平成23年度に行い、黒漆膜のおおよその形状が判明した。鉄刀身については、X線撮影によりその外形を確認しただけであり、その輪郭を図に破線で示した。

図1-1は全長49.0cm・刃長37.9cm・刃幅4.3cmで、0.85cmの反りがある。茎は長さ11.0cm・幅1.8～2.95cmで、茎尻に向かって幅が狭くなり、目釘穴は確認できない。棟区に比べて刃区の屈曲度合は鈍い。表面に残る黒漆膜の形状からみて外装（拵）は鞘と柄で構成され、その固定形式は呑口式と推定できる。鞘・柄ともに腐朽して遺存しないので、材質は不明である。

鞘は指表・指裏に方形の凹みがあり、筭櫃（指表）と小柄櫃（指裏）に対応すると考えられる。筭櫃は長さ7.1cm・幅2.1cmで船底状に丸く凹み、その外側左下で1cmほど漆膜が突起する箇所が栗形となる可能性がある。小柄櫃は長さ3.3cm以上・幅2.55cmで浅く箱形に凹む。鞘尻側から1.5～2.5cm間隔を空けて3条1単位の沈線が6単位刻まれ、そこから11.6cm前後を空けてさらに2単位が2cm間隔で刻まれる。鞘口はU字形で、

それより2.3cmほど下がった箇所だけに幅広突線と沈線が1条ずつあり他の3条1単位の沈線と装飾方法を変えている。

柄は漆膜の残存状態が悪く、柄縁付近の状態以外はわからない。柄縁近くに幅広突線と沈線が1条ずつあり、それから1.1cm間隔を空けて3条1単位の沈線を刻んでいる。異なる装飾単位の間隔は、鞘と同じである。柄にも概ね等間隔に3条1単位の沈線を数単位刻んで装飾したと推測される。

図1-2は全長27.2cm・刃長18.4cm・刃幅2.8cmで、0.35cmの反りがある。茎は長さ8.5cm・幅1.25～1.6cmで、茎尻に向かってわずかに幅が狭くなり、目釘穴は確認できない。棟区に比べて刃区の屈曲度合は鈍く刃先の方へ緩やかにのびる。表面に残る黒漆膜の形状からみて外装（拵）は鞘と柄で構成され、その固定形式は呑口式と推定できる。鞘・柄ともに腐朽して遺存せず、材質は不明である。

鞘の漆膜はほとんど残っていないので、その形状は不明であるが、おそらく1と類似した装飾がおこなわれていただろう。

柄は漆膜が比較的残存したので、その形状をある程度うかがうことができる。柄縁はU字形で、端から1.6cmの位置に1条突線と1条沈線、そこから0.7cm空けて1条沈線があり、さらに2.1cm前後の間隔を空けて3条1単位と2条1単位の沈線を刻んでいる。

(2) 初現期の腰刀の様相

腰刀は12世紀中葉以降に一般化する（岡田2002）と考えられているが、鎌倉時代の腰刀は伝世品がほとんどなく、遺跡から出土した12～13世紀の腰刀はその初現期の資料と位置付けできる。本稿で検討する西大寺旧境内例もその一つである。

初現期の腰刀を出土資料から考古学的に初めて検討したのが末永雅雄であり、それらを黒漆刻鞘腰刀と呼んで室町時代の鞘巻腰刀と柄鞘の製作方法の違いから区別した。黒漆刻鞘腰刀の柄鞘は表面に砥粉あるいは木屎を塗って下地とし、それに刻み目を入れて黒漆塗りで仕上げるのに対して、鞘巻腰刀は鞘木に刻み目を直接入れて製作しているという。そして、黒漆刻鞘腰刀が鞘巻腰刀の母型であると推考した。また、検討資料中に栗形や返角が確認できない点にも触れ、鞘の刻み目が帯からの離脱

を防ぐ役割を代用した可能性を述べた(末永 1931)。

末永の見解を踏襲して腰刀の変遷を述べた岡田賢治は栗形・返角が定型化する以前の段階を第Ⅰ期(12世紀)、栗形・返角が出現する段階を第Ⅱ期(13世紀)として区分する。そして、第Ⅱ期には筭の附装が認められるが、小柄の附装は遅れると推測した(岡田 2002)。

2000年代に入ると12～13世紀の黒漆刻鞘腰刀の出土報告が3例相次ぎ、具体的な検討ができるようになってきた。銅板上に栗形・返角を一体で作り出す13世紀前葉の宮城県観音遺跡出土例(宮城県教育委員

会 1980)の存在から栗形・返角の出現を同時(第Ⅱ期)と岡田は考えたが、12世紀後葉～末頃の三重県雲出島抜遺跡例(図3-3)や京都府佐山遺跡例(図3-5)²⁾にはすでに栗形が認められる。ただし、返角はないので、栗形の出現は返角よりも早いとみられる。また、西大寺旧境内例も含めて鞘には櫃が設けられている。特に雲出島抜遺跡例と西大寺旧境内例では櫃が表裏にあるため、指表が筭櫃、指裏が小柄櫃に対応する可能性が高い。これらの特徴は後の腰刀外装として定式化していく内容の初現の様相を示していると評価でき、現状の資料でみる

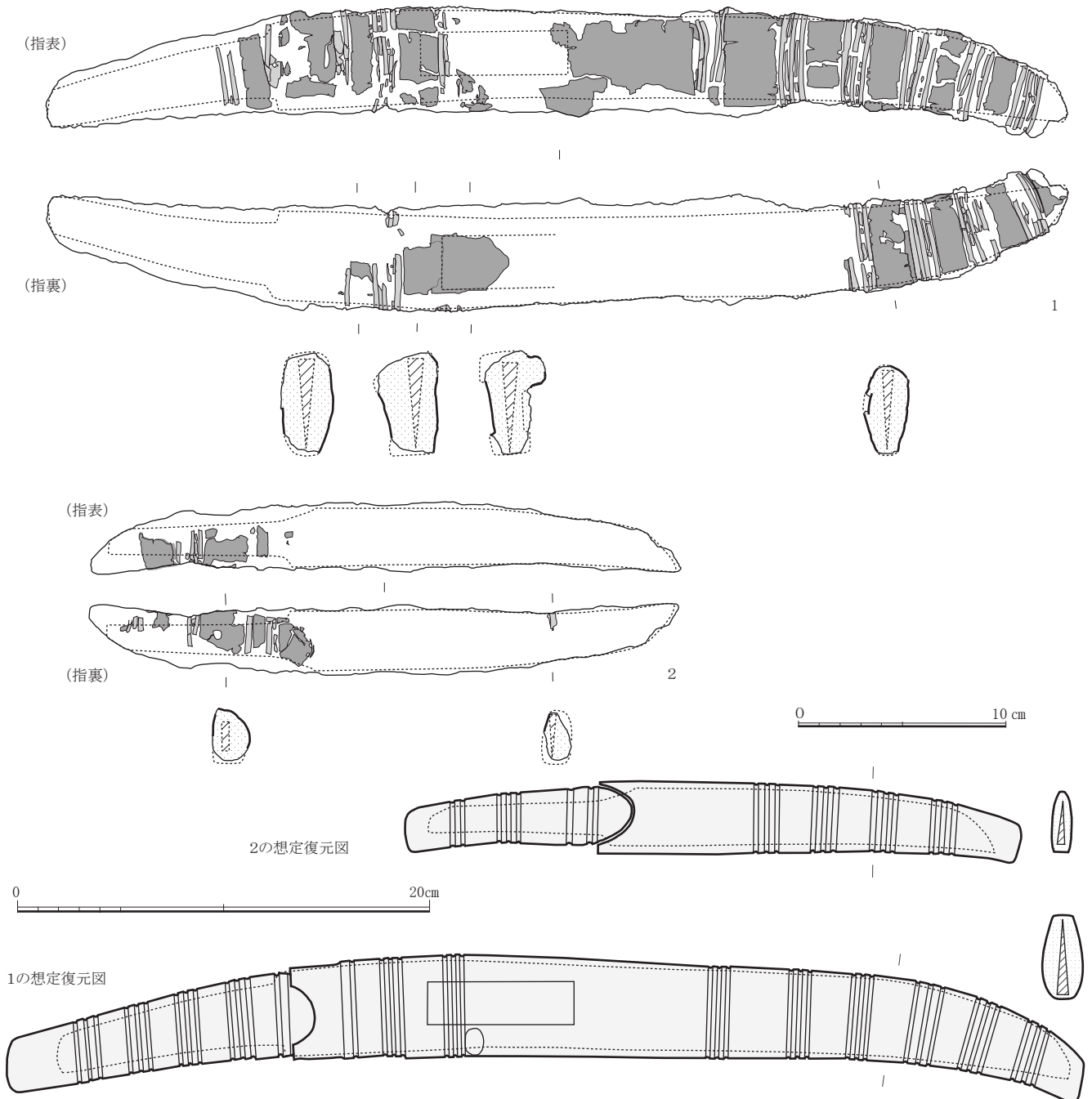


図1 西大寺旧境内第23次調査 土坑墓SX 71 出土腰刀とその想定復元 (1/3)

限り 12 世紀後半でその有無が識別される。そして、それらの特徴は黒漆刻鞘腰刀でのみ認められ、漆塗でない他の型式の腰刀には今のところ確認できないことも注意しておかなければならない。腰刀にも所有者の身分に対応して優劣があったと考えられ、格の高い腰刀の外装として櫃や栗形は当初附装され始めた可能性が推測できる。

次に、黒漆刻鞘腰刀の柄鞘の条線装飾を検討してみた。末永の詳細な観察に基づいて復元された京都府花背経塚例(図3-1)は、近接した経塚出土の仁平3(1153)年銘経筒から12世紀中葉の資料と推定されており、現在のところ最古の出土例である。柄縁・鞘口・鞘間に条線を刻まない部分(間帯)が認められる³⁾が、その配置は12世紀後葉以降の資料にも概ね継承される。西大寺旧境内(1)例と雲出島抜遺跡例は、遺存しない柄頭・鞘尻を除いて間帯と条線の配置、3条1単位の条線、鞘の指表・指裏両面に櫃を有するなど共通点が多い。愛知県小坂井経塚出土例(図3-4)は外装表面の欠損箇所が多く、間帯と条線を確認できるもののその配置状態はよくわからない。櫃や栗形も認められていない(末永1970)が、鞘間の間帯を3条線で2分割するような構成は雲出島抜遺跡例と類似するように見える。佐山遺跡例は、2条1単位の条線を基本とし鞘の指裏にのみ斧櫃があるなど異なる特徴を認めるものの間帯の配置には共通

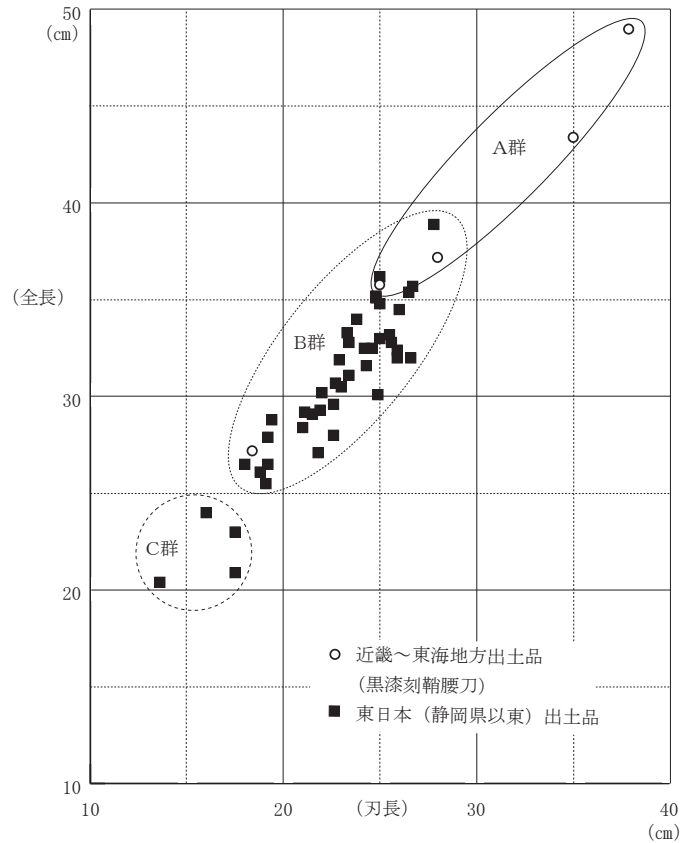


図2 12世紀頃の遺跡出土腰刀の大きさ

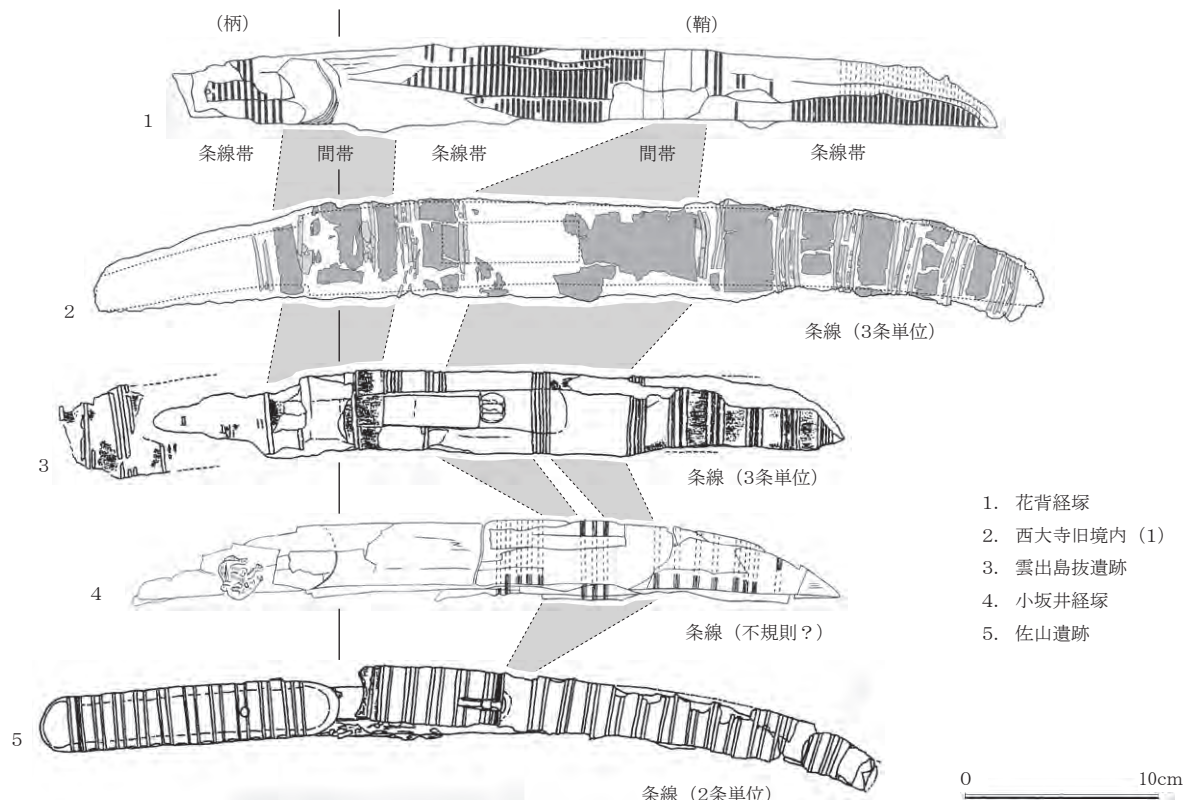


図3 出現期腰刀の外装比較

性がある。このような出土資料からみて、黒漆刻鞘腰刀には12世紀中葉以前に花背経塚例のような連続する条線帯を有し櫃や栗形を認めない資料が存在したが、12世紀後葉頃になると3条あるいは2条を1単位とする条線装飾を行い櫃や栗形を備える資料が現れてくると推測できる(図3)。

そこで、12世紀の主な腰刀出土例についてその大きさと櫃や栗形の有無などを検討してみよう。近畿～東海地方出土品と東日本(静岡県以東)出土品⁴⁾に分けて刀身の全長と刃長の関係を図2に示した。主な特徴からA～C群に大別できる。

A群;近畿～東海地方で出土した黒漆刻鞘腰刀のうち、櫃や栗形を備えるもの。その母型となった花背経塚例を含む。全長35cm以上で、40cmを越える大型品もある。

B群;東日本出土例の大半が相当する。西大寺旧境内(2)例以外はすべて漆塗でなく、櫃や栗形を備える確実な例もない。花背経塚出土の他例6点(刃長21.8～26.6cm・莖長8～9cm前後と推定)もB群内に収まる(末永1928)。全長25～40cmの中型品である。A群よりも相対的に小さい例が大半を占める。

C群;東日本出土例の中に認められる全長25cm以下の例である。A・B群は全長と概ね正比例して刃長が伸びるのに対して、C群は刃長の変動が大きくみえる。

櫃や栗形を備える例は相対的に大形の黒漆刻鞘腰刀(A群)でのみ認められ、近畿～東海地方でのみ出土し、静岡県以東の東日本では黒漆刻鞘腰刀そのものが出土しない。B群は、西大寺旧境内(2)例1点を除いて、それらの外装に黒漆は認められず、花背経塚出土品中に薄鉄板でつつむ例1点(末永1928)がある他は白木造りとみられる。なお、柄木に条線を直接刻む例が堂ヶ谷1号経塚出土品(報告番号65)に認められる(財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2010)ので、鞘巻腰刀も同時期に製作されていた可能性がある。C群は刀子の大きさに近く、多様な機能に合わせて刃長が変動するような特徴を有していた可能性が想定できる。

以上の検討内容から、相対的に大型の黒漆刻鞘腰刀は近畿～東海地方で製作された格式高い外装を有し、以後の腰刀に継承されていく櫃や栗形を最初に備え始めた点で重要な資料と評価できる。そして、13世紀以降に他の形式へとその外装が漸次的に広まっていくと想定されよう。13世紀前葉の宮城県観音沢遺跡出土黒漆棒鞘

腰刀には筭櫃と栗形・返角を備えており、黒漆拵の腰刀が白木拵の腰刀より格式高いものとして12～13世紀頃には広く認識されていたように思われる。

III 杏葉轡⁵⁾

(1)平城京跡第157・484次調査出土の杏葉轡(図4)

図4-1は平城京跡第157次調査井戸SE41から出土した杏葉轡である。引手一对と左側面の遊環を欠くが残存状態は比較的良好で、現在も可動性が残る。厚さ0.3cmの鉄板を蕨手文様状の逆ハート形に裁断して鏡板をつくる。鏡板の鉄板幅は尖頭部で2.1cm、左右で1.1～1.2cmである。その尖頭部を直線的に切断し、裏面に立間を重ねて鋳留する。立間を含めた鏡板の長さ13.8cm・幅9.6cmである。立間は長さ7.0cm(鏡板と2.0cm重複)・幅1.4cm・厚さ0.3cmで、先端を打ち延ばして外方に巻き、面繫を取付けるための立間壺をつくる。銜は全長17.9cmの2連式で、輪違環に比べて銜先環が目立って大きく、銜先環は輪違環の約2.4倍の大きさである。環の断面は円形、軸部の断面は方形である。遊環は径0.7cmの鉄棒を曲げてつくり、内径1.8cmである。共伴した出土土器から12世紀後半の資料と推定できる。

図4-2は平城京跡第484次調査井戸SE07から出土した杏葉轡である。右側面の引手を欠失し、左側面の鏡板と引手の一部が欠損する。左側面の鏡板を除いて全体が錆着しているため、本来の形状を復元的に図示した。鏡板と立間は一体でつくられているが、その大きさと形状が左右で異なる。右側面の鏡板は径0.8～1.0cmの鉄棒を蕨手文様状の逆ハート形に曲げてつくるが、その際に左右1箇所ずつを1度ねじっている。また、立間は左右の鉄棒を2回ずつねじって結合し、その先に立間壺をつくる。立間を含めた鏡板の長さ11.8cm・幅9.3cmである。一方、左側面の鏡板は幅1.1～1.2cm・厚さ0.4cm前後のやや扁平な鉄棒の下部を中央で切り開き左右に大きく湾曲させてつくられる。上部は立間の軸部となるが、その上端も中央で切り開き垂直に起こして左右を湾曲させ立間壺とする。立間を含めた鏡板の長さ9.7cm以上・幅7.6cmで、右側面の鏡板より一回り小さい。鏡板の先端部分が欠失するため、右側面のような蕨手文様状のハート形になるのかどうかは不明である。銜は全長17.25cmの2連式で、輪違環に比べて銜先環は少し大きい程度となる。遊環がなく、引手は銜先環に直接取り付く。共伴した出土土器から11世紀後半の資料と推定できる。

両資料を比較すると、全体的な形状は類似するものの製作方法や個々の特徴に明らかな相違点が認められる。

まず、鏡板の製作方法については、1（前者）が鉄板を裁断して鏡板をつくり別造りの立間を鋳留するのに対して、2（後者）は鉄棒を一部に振りを加えつつ曲げるか扁平な鉄棒を切り開いて曲げ立間と一体でつくられている。次に銜の形状を比較すると、2より1の方が銜先環の大きさが明らかに大きい。この違いは銜先環・輪違環のつくり方の相違に起因すると思われ、1は鉄棒の先を打ち延ばし薄くして曲げるのに対して、2は鉄棒をそのまま曲げているだけである。また、引手の連結方法でも1は遊環を介して連結するが、2には遊環がなく銜先環に直接連結される。両者の推定時期には100年前後の隔たりがあり、その間にこのような技術変化が生じた可能性を想定するか、別系統の製作技術の反映とみるか二つの見方が想定できる。なお、後述のとおり筆者は後者の見方で資料の検討を行うのが妥当であると考え。

さらに、2の鏡板が左右で異なる点についても言及し

ておく。このような例は複環式轡において4例ほど確認されており、矯正用の責轡（片山1987）との関連を想定する見解（鈴木1999）と補修品と考える見解（津野2012）がある。ただし、責轡は銜を多様に変えてつくられるものであり、本例には適応しない。よって、左側面の鏡板のみを補修時に取り換えた可能性が高いと推察する。そうした場合、扁平な鉄棒を切り開き立間と一体で鏡板を製作する方法は鉄棒を曲げて鏡板を製作する方法よりも簡便なために採用されたとみることもできる。

2) 手向山八幡宮所蔵の杏葉轡

平城京跡出土の杏葉轡を検討するにあたり、奈良市手向山八幡宮所蔵の杏葉轡を類例として実測調査することができたので、その内容について記しておきたい⁶⁾。

調査したのは昭和38年に重要文化財として一括指定された移鞍の中の轡2双である。両轡は同形同大の杏葉轡で、製作方法も同じであり、鎌倉時代の製品と考えら

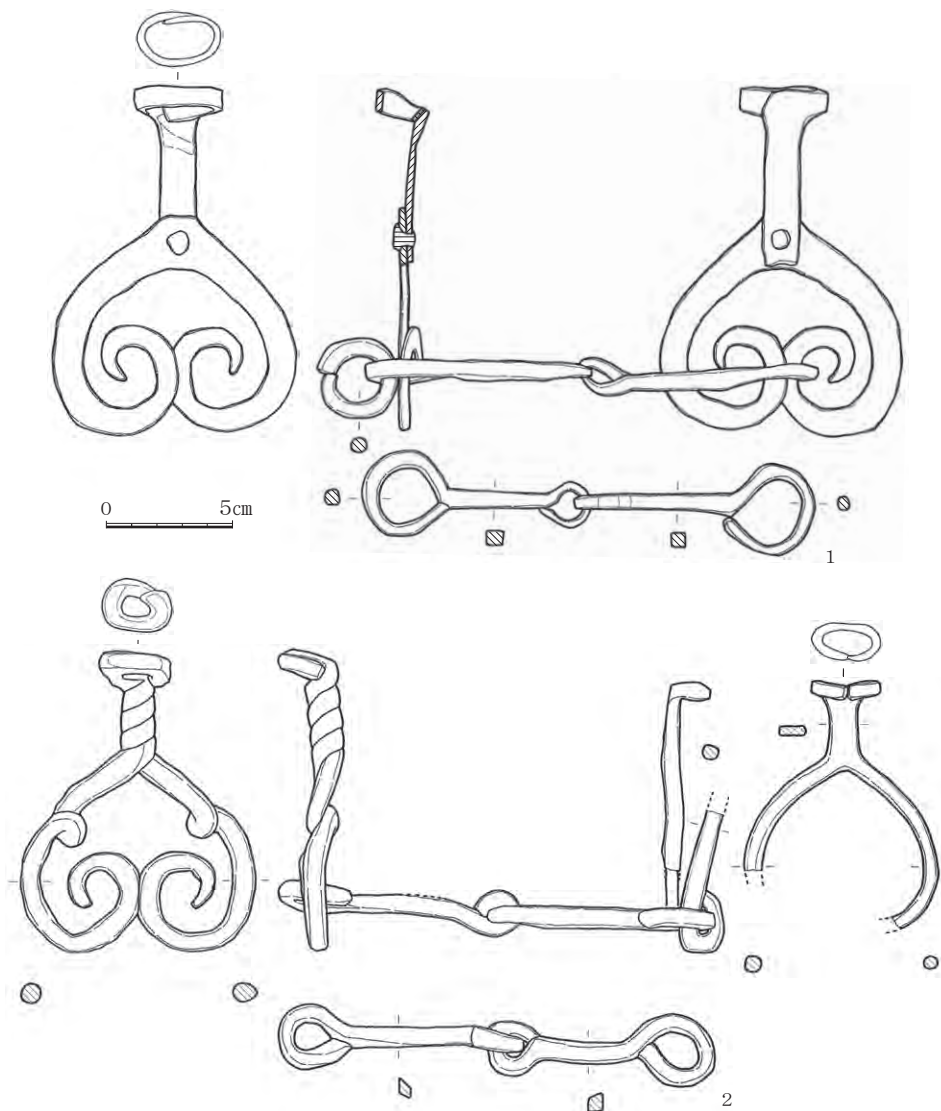


図4 平城京跡第157・484次調査出土の杏葉轡 (1/3)

平氏隆盛の頃の腰刀と杏葉轡

表1 遺跡出土の杏葉轡一覧

番号	遺跡名	出土地	時期	全長×幅 (立間含む)	遊環の 有無	分類	文献
1	林ノ前遺跡	青森県八戸市	11世紀	14.2×9.8	不明	A I	青森県教育委員会 2006『林ノ前遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第415集
2	新田遺跡	宮城県多賀城市	13～14世紀?	13.2×7.8	不明	AⅢa	多賀城市埋蔵文化財調査センター 1988『新田遺跡』多賀城市文化財調査報告書第18集
3	信夫山頂遺跡	福島県福島市	14世紀?	15.35×9.5	不明	Ba	時枝務・高橋充 2012「信夫山頂遺跡出土品の研究(2)」『福島県立博物館紀要』第26号
4	元総社蒼海遺跡群	群馬県前橋市	13～14世紀?	14.2×8.5	有	AⅡa	前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2010『元総社蒼海遺跡群(28)』
5	宮久保遺跡	神奈川県綾瀬市	12～13世紀?	13.0×9.1	有	AⅢa	神奈川県立埋蔵文化財センター 1990『宮久保遺跡Ⅲ』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告15
6	高林寺遺跡	神奈川県平塚市	11世紀?	11.9×8.5	不明	A I	平塚市教育委員会 1989『平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書2 昭和62年度発掘調査の報告』
7	岩倉遺跡	新潟県糸魚川市	14世紀?	11.0×5.5	有	Bb	新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2003『一般国道糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書 岩倉遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第114集
8	上原遺跡	山梨県北杜市	10世紀後半	13.9×7.7 13.3×7.8	有	A I	北杜市教育委員会 2022『上原遺跡 県営農地環境整備事業天王原地区ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』北杜市埋蔵文化財調査報告第46集
9	松原遺跡	長野県長野市松代町	9世紀	13.4×9.1	有	A I	上田典男 1999「長野市松原遺跡出土の「杏葉轡」について」『長野県埋蔵文化財センター紀要』7
10	天神畑遺跡	滋賀県高島市	13世紀	10.6×5.1	有	Bb	滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会 2013『天神畑遺跡・上御殿遺跡』鴨川補助広域基幹河川改修事業(青井川)に伴う発掘調査報告書1
11	平城京跡 (第157次)	奈良県奈良市法連町	12世紀後半	13.8×9.6	有	AⅢb1	奈良市教育委員会 1989『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 昭和63年度』
12	平城京跡 (第484次)	奈良県奈良市杏町	11世紀後半	11.8×9.3 9.7以上×7.6	無	AⅡa AⅡb	奈良市教育委員会 2006『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成14年度』
13	不明	奈良県	13～14世紀?	14.1×8.4	不明	Ba	河上邦彦 2000「大和出土のかしははみ」『青陵』第106号
14	長尾谷遺跡	兵庫県龍野市揖西町	13世紀	12以上× 10.0	有	AⅢb2	龍野市教育委員会 1999『長尾・小畑遺跡群』龍野市文化財調査報告21
15	草戸千軒町遺跡	広島県福山市草戸町	14世紀中～後半	14.5×8.5	不明	AⅢa	広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1994『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅱ』
16	新平田遺跡	鹿児島県伊佐市	13世紀初～前半	10.8×6.9	有	AⅡa	大口市教育委員会 1997『新平田遺跡・辻町B遺跡』大口市埋蔵文化財発掘調査報告書20

表2 杏葉轡伝世品一覧

番号	資料名	所蔵・保管	時期	全長×幅 (立間含む)	遊環の 有無	分類	文献
1	杏葉轡(小諸1)	懐古神社(徴古館)	12～13世紀?	14.6×9.5	有	AⅢb2	風間春芳 1999「長野県内の杏葉轡3例について」『長野県考古学会誌』90号
2	杏葉轡(小諸2)	懐古神社(徴古館)	13～14世紀?	13.4×8.8	有	AⅡa	同上
3	金銅装唐鞍附属 杏葉轡(銅製)	二荒山神社	14世紀	13.5×7.3	有	Ba	日本馬具大鑑編集委員会編 1991『日本馬具大鑑』第2巻古代下
4	移鞍附属杏葉轡1	手向山八幡宮	13世紀	11.8×8.5	無	AⅡa	同上
5	移鞍附属杏葉轡2	手向山八幡宮	13世紀	11.5×8.6	無	AⅡa	同上
6	杏葉轡	手向山八幡宮	13世紀		無	AⅡa	同上
7	杏葉轡(銅製)	豊原北島神社	13世紀		有	Ba	松平定信編 1800『集古十種』兵器馬具巻1「備前國上寺村八幡宮蔵佐々木盛綱銜圖」
8	杏葉轡(銅板包み)	高津古文化会館	13世紀	14.2×7.3	無	Ba	日本馬具大鑑編集委員会編 1991『日本馬具大鑑』第2巻古代下
9	杏葉轡(銅製鍍銀)	東京国立博物館	13世紀	17.0×8.6	有	Ba	同上
10	杏葉轡	東京国立博物館	13～14世紀?		有	AⅡa	根岸競馬記念公苑 馬の博物館 1,983『特別展』
11	杏葉轡	宝永堂	13世紀?		無?	AⅡa	同上

れている。そのうちの1点を実測し、図5に示した。

鏡板は断面半円形の鉄棒を逆ハート形に曲げて立間と一連で製作されており、立間との接続箇所で端部を重ねて鍛接する。立間軸部は打ち叩いて断面板状となり、先端を打ち延ばし楕円形に曲げて立間壺をつくる。分離していた蕨手文様状の巻き上げが一体化しているのが大きな特徴である。立間を含めた鏡板の大きさは、左側面で長さ11.8cm・幅8.5cm、右側面で長さ11.65cm・幅8.55cmである。

銜は全長19.4cmの2連式で、輪違環に比べて銜先環が目立って大きく、銜先環は輪違環の約2.6倍の大きさがある。銜先環及び軸部の断面は円形で、別造りの銜先環を軸部に溶接している。

引手は銜先環に直接取り付いており、遊環がない。引手の全長は左右側面ともに13.5cmである。軸部は幅1.1～1.2cm・厚さ0.3～0.4cmの板状で、片側に楕円形の立間壺をつくる。

もう1つの轡の寸法を付記すると、立間を含めた鏡板の大きさは左側面で長さ11.4cm・幅8.4cm、右側面で長さ11.5cm・幅8.6cm、銜の全長19.1cm、引手の全長は左側面で13.0cm、右側面で13.25cmである。

鉄棒を曲げて立間と一体で製作する点や銜先環に引手を直接連結する点などの特徴が平城京跡第484次調査出土轡と共通しており、両者が同系列の製品である可能性を推考させる。

(3) 杏葉轡の分類 (図8)

杏葉轡は主に12～14世紀にかけて盛んに製作された轡の一形式で、鏡轡とともに中世を代表する馬具の一つとされている。昭和12(1937)年発行の『日本歴史

考古学』で後藤守一が「遺物を見ることは極めて稀れである」と記すとおり、絵巻物や和書に描かれた轡と鎌倉時代の伝世品がかつて主な研究対象であった(後藤1937)。それらの資料を中心に杏葉轡を検討した片山寛明は多頭形(一)・三葉形(二)・逆ハート形(三)の3つに大別できることを示した。そして、鏡板から高く突出する立間や鏡板の外側から遊環を介して引手を付ける連結法などの特徴を有する和式轡の基本的形態がここに定式化すると述べる(片山1992)。その後、長野県松原遺跡で9世紀にまで遡る杏葉轡が出土し、長野県内の小諸市懐古神社所蔵品2例とともにその変遷が検討された(風間1999)。出土品・伝世品・絵画史料を総合的に概観し、杏葉轡をI類(鏡板・立間及び蕨手様の巻き上げが別造り)とII類(鏡板・立間及び蕨手様の巻き上げが一体化)に分類した点は特に注目できる。

現在の杏葉轡出土の分布を概観すると、半数以上の16例中9例が東日本から出土している。そのうち甲信越から関東地方で6例が出土し、分布が集まる傾向を看取できる。また、近畿地方でも4例の出土が認められ、そのうち3例が奈良に分布する(図6・表1)。伝世品の所在地(表2)も甲信越から関東地方と近畿地方がほとんどであり、出土品の分布傾向と概ね合致する点は興味深い。

遺跡出土品から考古学的に杏葉轡の系譜を検討したのが鈴木一有で、片山分類を踏襲しつつA類(逆ハート形)とB類(三葉形)の2つに大別し、伝世品や出土品等の現存資料がない多頭形はB類の中に包摂した(鈴木1999)。そして、A類を鏡板が円環状のA1類と逆ハート形のA2類に分類し、さらにA2類を蕨手部分が分離

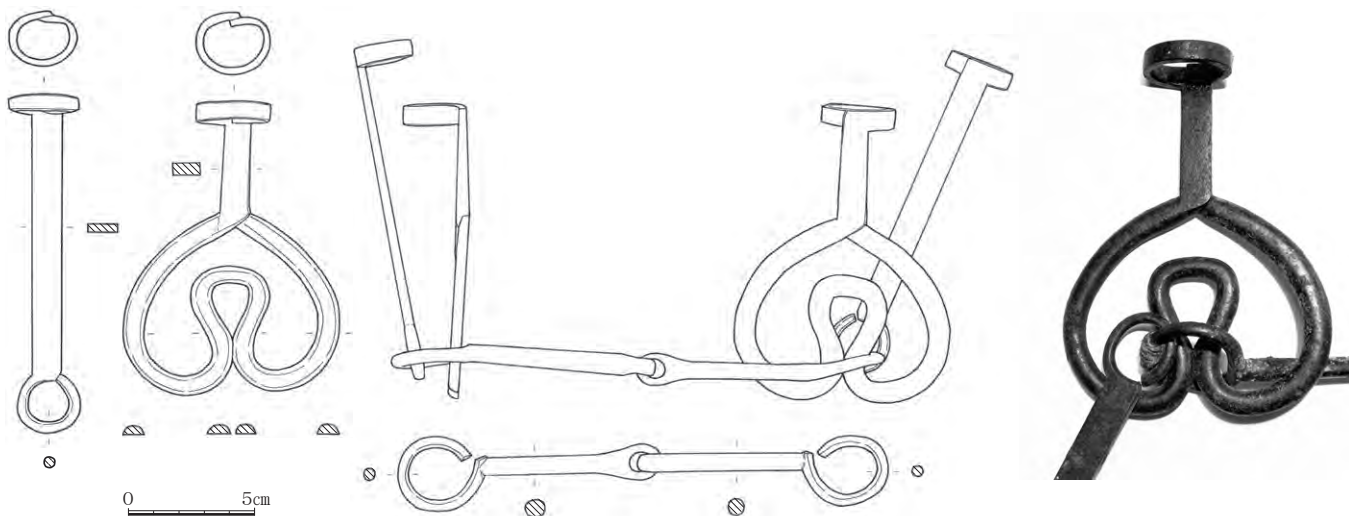


図5 手向山八幡宮所蔵の杏葉轡(1/3)と鏡板写真

※ 番号は表1と対応する

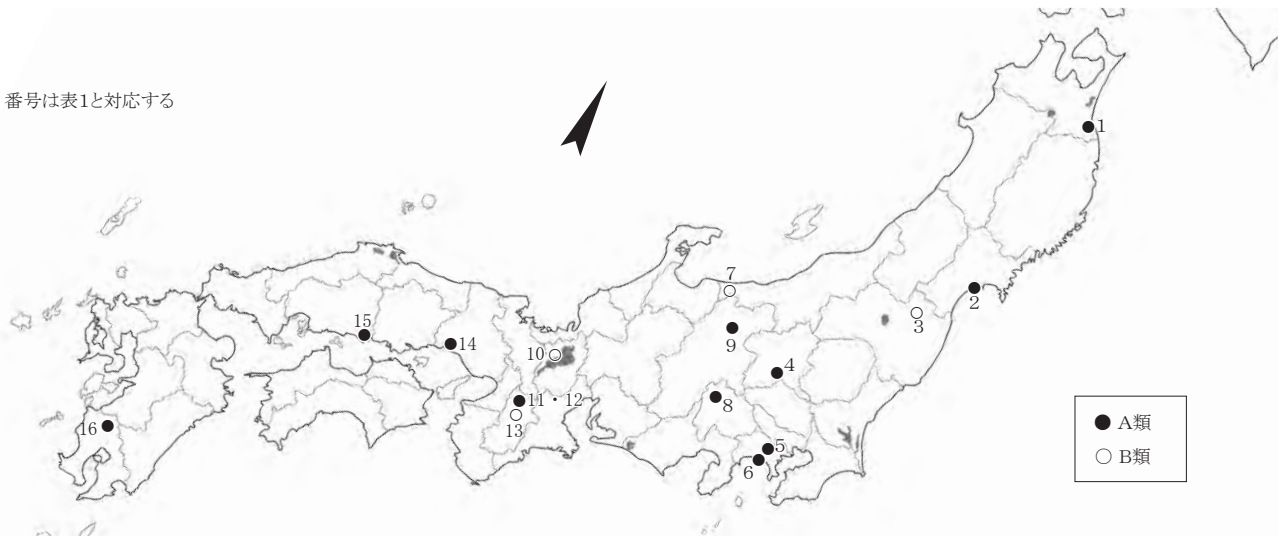


図6 杏葉轡出土地の分布

する古相と一体製作される新相に細分する。平城京跡第157次調査出土例はA 2類古相であるが鏡板の内側が円環状を呈しており、立間が別造りである点にも着目してA 1類からの移行形態と評価している。

その後、古代轡の再集成を行って変遷とその意義を論じた津野仁は、鈴木の研究成果を踏襲して杏葉轡についても検討している。杏葉轡で主体化し和式轡の基本的形態として定式化する立間を壺付き立間と呼び、素環系鏡板付轡や複環式轡を含めて9世紀以降に普及していくことを明らかにした。また、12世紀以降に銜先環が相対的に大きくなること、遊環を介して引手を連結する遊環連結法⁷⁾は中世まで存続しない他形式の轡でも古代から認められるので片山の想定どおりに和式轡の指標とするのは難しいことを指摘している(津野2012)。

これまでの研究史を踏まえ、本稿では鈴木分類に従い杏葉轡をA類(逆ハート形)とB類(三葉形)に大別する。ただし、A類については増加した出土資料の再検討に伴って鈴木と異なる基準で以下のように細分類した。

A 1類; 主に鉄棒を使用して円環形あるいは逆ハート形の鏡板をつくり、別造りの壺付き立間を先端折り曲げによる鍛接で連結するもので、松原遺跡・山梨県上原遺跡・神奈川県高林寺遺跡・青森県林ノ前遺跡から各1点ずつ出土している。林ノ前遺跡例は断面板状でありA III類と似るが幅が狭く、同遺跡出土の複環式轡も同様の断面板状であるため、その影響を受けたものと理解できる。おそらく、鉄棒で外形をつくった後にたたいて板状に仕上げたものと思われる。複環式轡では、新しい段階(9世紀後半以降)になると断面板状になる傾向がすでに指摘されている(鈴木1999)。

なお、津野が挙げる熊本県灰塚遺跡例(9~10世紀)には立間推定位置に2箇所の連結痕跡が認められる(熊本県教育委員会2001)。鉸具造り立間系・矩形立間系環状鏡板付轡が10世紀まで存続することが確認されており(津野2012)、本例には矩形立間を連結していた可能性があるのでここではA I類から除外しておく。立間形状が異なる本例を除けば、A I類の分布は東日本に限られる。

松原遺跡例は9世紀前半、上原遺跡例は10世紀後半、林ノ前遺跡例は11世紀頃の資料であり、9~11世紀にかけて使用されたことがわかる。この中で、轡の構造や製作方法をよく観察できる上原遺跡例(図7)は重要な資料である⁸⁾。厚さ0.6cm前後で断面隅丸方形の鉄棒を円形の蕨手文様状に曲げて鏡板をつくり、別造りの壺付き立間を鍛接する。立間の一つしか遺存せず欠損して直接接合しないが、それを含めた鏡板の大きさを復元すると右側面の長さ13.9cm・幅7.7cm、左側面の長さ13.3cm・幅7.8cmとなる。銜は全長19.5cmの2連式で、銜先環は輪違環の約2.4倍の大きさである。引手は残存しないが、楕円形の遊環に連結すると想定される。

上原遺跡例における銜両環の大きさの比率や鉄棒の先を打ち延ばして曲げる銜先環の製作方法(打ち延ばし法)は、平城京跡第157次調査出土例と共通しており注目できる。津野は12世紀以降における相対的な銜先環の大形化を轡の編年指標として評価するが、打ち延ばし法によってこの時点で十分大きくなっていることが看取できる。

鏡板の形状をみると、9~10世紀の出土例は円環形に限られるが、11世紀になると逆ハート形の出土例が

認められるようになる。しかし、両者の間に漸移的な型式変化を想定できるような資料は今のところ見当たらない。時期不明の高林寺遺跡例は11世紀頃の資料ではないかと思われるが、鏡板上端部が丸いため逆ハート形とみなすには至らない。後述するAⅢ類b2系の存在から円環形の存続も想定できるので、11世紀には円環形と逆ハート形が併存した可能性が高いと推考する。

AⅠ類では当初から壺付き立間と遊環連結法が認められ、実用的で簡素なつくりを実現した形状であった。このことが、やがて中世に杏葉轡が盛行する要因になったのではないかと思われる。

AⅡ類；鉄棒を使用して鏡板と壺付き立間を一体で製作するもので、鏡板の断面形には方形・円形・半円形があり、扁平化しない。鉄棒にねじりを加えたりしつつそのまま曲げて製作するa系と鉄棒を切り開き曲げて製作するb系が認められる。平城京跡第484次調査出土例は右側面がa系、左側面がb系であり両系列は同時期に併存することがわかる。b系の製作方法は壺の環が中央で接合されるという特徴があり、9世紀末頃の下野国分尼寺跡出土蒺藜轡銜（栃木県教育委員会2011）などにみられるので、類例は少ないながらも系列的に技術が存続したと考えられる。

現在のところ、11世紀後半の資料1点のみであるが、11世紀前半頃の複環式轡に壺付き立間を一体で製作する東京都落川遺跡例があるので、AⅡ類の出現も同時期まで遡るのではないかと推察できる。

壺付き立間と鏡板を一連で製作するため、鏡板の上端が伸びて逆ハート形になるという特徴を看取できる。逆ハート形のAⅠ類は、AⅡ類の影響を受けて現れたもの

と推測する。

a系は資料数が少なく未だ十分な変遷を追えないものの、13～14世紀頃と推定する元総社蒼海遺跡例や小諸市懐古神社伝世品2等の形状へ変遷していくと考えられる。これらの形状には、本来分離していた蕨手様の巻き上げが連結し一体化してつくられるという特徴が認められ、風間分類のⅡ類に相当する。同様の特徴が認められる手向山八幡宮所蔵品・宝永堂所蔵品や蕨手様の巻き上げがなくなり隅丸三角形の環状となる13世紀前半頃の新平田遺跡例も、ねじりはないが同系列の中で理解できる資料と判断できる。

なお、遊環連結法が認められない手向山八幡宮所蔵品において銜先環に直接引手を連結する特徴は、平城京跡第484次調査出土例と共通しており、地域的な連結法の存続を示唆する点で興味深い。

AⅢ類；鉄板を裁断あるいはたたくなどして、鏡板の断面形が扁平な板状となるように製作するもので、鏡板と壺付き立間を一体でつくるa系、両者を別造りして銜留するb系が認められる。a系には蕨手様の巻き上げが分離する宮城県柳之御所跡例や神奈川県宮久保遺跡例等⁹⁾と連結し一体化する宮城県新田遺跡例や広島県草戸千軒遺跡例等がある。後者の例にはAⅡ類a系と同様の特徴がみられ、14世紀に下がる例がある点から後出資料と推測できる。

b系は、さらに鏡板の形状から逆ハート形のb1系と円環形に近いb2系に分かれる。平城京跡第157次調査出土例はb1系である。b2系はAⅠ類円環形を異なる製作方法で模してつくった轡と想定される。

B類；鉄板を裁断するなどして三葉形の鏡板をつくるも

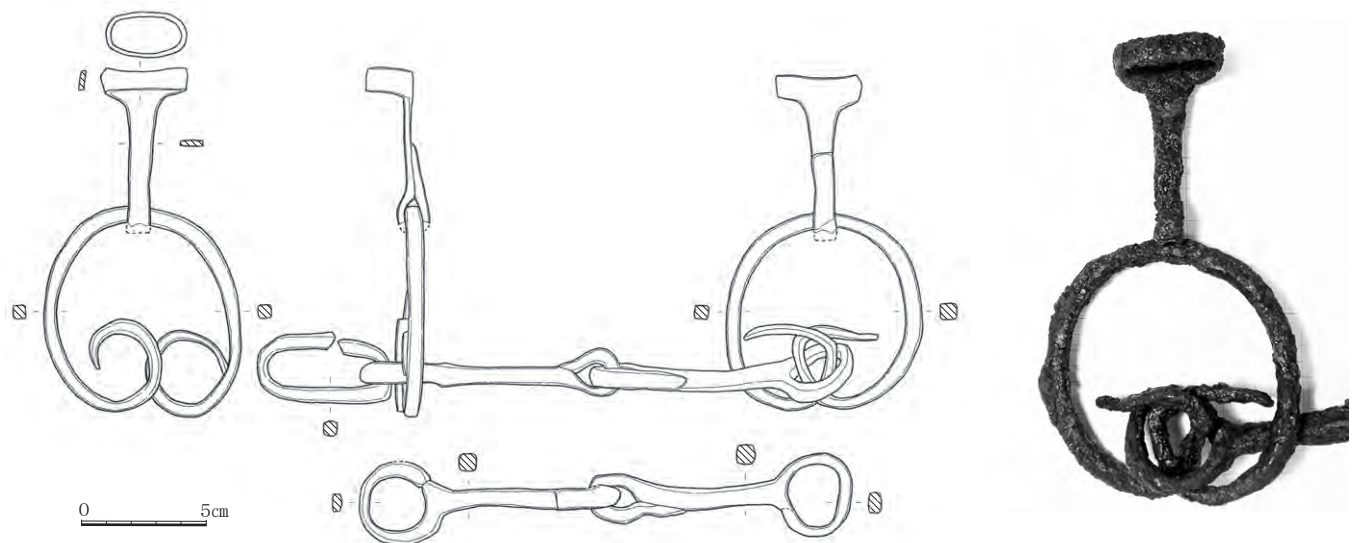


図7 上原遺跡出土の杏葉轡(1/3)と鏡板写真

ので、基本的に鏡板と壺付き立聞を別造りして鉾留する。ただし、伝世品を含めて鑄造品も少なからずあり、形式化が顕著である。鏡板内部の板や立聞との鉾留箇所まで三葉形につくる例が多い。立聞壺を方形につくる点がA類と異なり、特徴的である。現在のところ、東日本と近畿地方からしか出土していない。通有の大きさのa系と小型品のb系が認められる。

a系の奈良県内出土例は鏡板内側の三葉形板も別造りして鉾留し、立聞との鉾留箇所を三葉形につくらない点で古相を示す資料と思われる。

b系の滋賀県天神畑遺跡例は鑄造品で、鏡板と壺付き立聞を一体でつくるにもかかわらず連結箇所に鉾が形式的に打ち込まれている。小型品である点と合わせて考えれば、実用品でなく奉納品あるいは祭祀関連の遺物である可能性が高いだろう。

(4) 杏葉轡の変遷 (図8)

遺跡出土の杏葉轡については、以上の分類に基づいて次のように初現期・成立期・確立期・展開期の順で変遷を理解できるのではないかと推察する。

初現期 9～10世紀にかけてAⅠ類が東日本で出土するようになるが、古代以来の複環式轡が主体的に使用されており、出土例も未だ多くはない。ただし、壺付き立聞が当初から附属するなど中世の杏葉轡と直接的な系譜関係を認め得る特徴も看取でき、中世的な轡組成完成に至る第Ⅰの画期と考える津野の見解を再確認できる。

そして、9世紀に古代の轡型式(鏤轡・蒺藜轡)がなくなり、10世紀前半になると古墳時代後期から継承されてきた鉸具造り立聞系・矩形立聞系環状鏡板付轡もみられなくなるため、津野はこの時期を轡の新旧鏡板型式の交替期に位置付けている(津野2012)。

成立期 11世紀後半の平城京跡第484次調査出土例の存在等から、11～12世紀中頃までを成立期と考える。その大きな理由は、鏡板と壺付き立聞を一体で製作し鏡板が逆ハート形となるAⅡ類が近畿地方で現れ、その影響が東日本の一部で認められるようになる点である。次の確立期に主体化する逆ハート形と旧来の円環形が併存するようになったと推定する。

11世紀には、甲斐守源頼信が追討使となり降伏させた平忠常の乱(1028～1031年)や陸奥守源頼義・源義家が平定させた前九年(1051～1062年)・後三年(1083～1087年)の役があった。これらの戦乱を契機として、河内源氏は東国武士との主従関係を強化し坂東を統括する地位を固めていったと評価されている(福田1995・鈴木2012・倉本2022)。このような背景に基

づいて都の武者(中央軍事貴族)と東国武士の交流が活性化し、東国の鏡板意匠等が近畿地方で採用されてAⅡ類の製作が始まると考えておきたい。

確立期 12世紀後半において扁平な鏡板のAⅢ類が出現し主体化する。鏡轡の出現とも連動しており、轡の中世化の第Ⅱの画期と津野が位置付ける時期(津野2012)に相当し、ここに中世的な轡が確立する。立聞一体造りのa系とともに立聞別造り鉾留のb系が新たに出現する。b系には鏡板が逆ハート形のbⅠ系と円環形のbⅡ系が認められる。bⅡ系はAⅠ類円環形の系譜をひくものと想定され、AⅠ類は姿を消す。これまで立聞別造り例から立聞一体造り例へと単系的な型式変化を想定する見解(鈴木1999・津野2012)が示され、平城京跡第157次調査例はその移行期の資料と理解されていた。しかし、13世紀の長尾谷遺跡例がAⅢ類bⅡ系であり、杏葉轡B類や鏡轡が立聞別造り(鉾留)である点などから、そのような理解は妥当性を欠くと言わざるを得ない。

そこで、新たな鉾留接合を導入したAⅢ類b系に杏葉轡B類や鏡轡と同じ製作方法が認められることこそ重要視する必要性を考える。すなわち、同じ形状・大きさの立聞を作製して異なる形状の鏡板に鉾留することで、異形式の轡を容易につくり分けることができるからである(図9)。そして、これらの鏡板が鉄板を裁断して製作された平板なつくりになっていることも見逃せない。AⅢ類は轡全体が平板化する中で現れた杏葉轡の類型であり、馬具の量産化指向がそこには反映されている。

12世紀後半は保元・平治の乱(1156・1159年)や治承・寿永の乱(1180～1185年)といった大規模な戦乱が続き、その常態化に伴い武装具や馬具の需要が大きく高まる時期であるため、その量産化の必要性が背景にあったと推察する。また同時に、異形式の轡を容易につくり分けられる製作方法となっている点は、轡形式による騎乗者の序列化が進展したことを示すと想定できる。

轡の序列化を明確に示すのが法住寺殿跡W10土壇出土の鏡轡である。この鏡板には鶴の象嵌があり、精巧な鋳形を備える甲冑や華美な蒔絵鞍などが共伴する。W10土壇は、かなり高位の武将の墓と推定されており、法住寺合戦(1183年)で敗死した源光長が被葬者である可能性も示されている(財団法人古代学協会1984)。また、岩手県志羅山遺跡(財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター2000)・宮城県中野高柳遺跡(宮城県教育委員会ほか2005)出土の鏡轡にも鴛鴦等の象嵌があり、これらは都の工人が関係した奥州藤原氏直轄

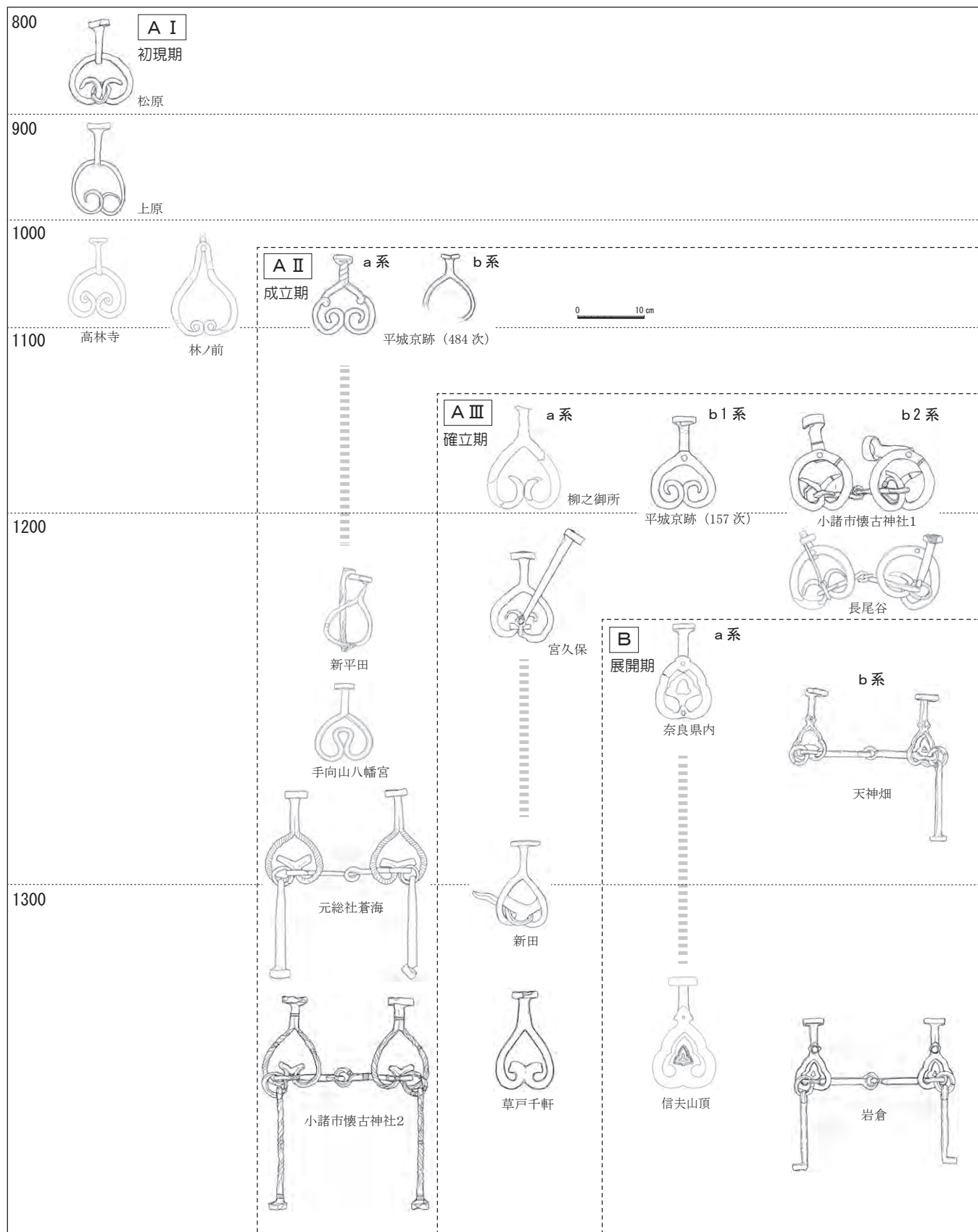


図8 杏葉轡の分類と変遷

工房の製品とみられている。いずれも序列高位の轡形式と推測できる12世紀後半の資料である。京都と奥州でのみ出土している点からみて、奥州藤原氏と関係を深めた藤原基成（平治の乱首謀者藤原信頼の異母兄）を通して都との繋がりを有したことを反映しているように思われる。それに対して、杏葉轡AⅢ類には多系列の製品があり、装飾性は乏しく象嵌例もない。地方生産されたb2系もあり、鏡轡よりも序列が低い製品とみて大過ないだろう（図8）。

東国武士団を編成して坂東南部に確固たる基盤を築いた源義朝は、保元の乱（1156年）に勝利して、宮中の軍馬と馬具を管理し地方の牧の武士団も統率する馬寮の左馬頭となる（元木2011）。これを契機として一般武士団との序列を馬装に反映させる政策を始めた可能性も一案として浮かぶ。その製作を合理的に実現させるための工夫が鉄板による鏡轡と杏葉轡のつくり分け及び別造り壺付き立間の鋳留仕上げではなかっただろうか。

展開期 B類が出現し、中世を代表する轡型式が出揃って展開した13～14世紀を位置付ける。ただし、現在の出土資料による限りB類の出現時期は明確でなく、今後の資料増加によっては12世紀後半にB類も含めてすべての轡型式が出揃っていた可能性も否定できない。現状ではAⅢ類b1系からの系譜をひいてB類が現れると理解しておくが、片山が『伴大納言絵詞』から想定した多頭形（片山1992）の存在が明らかになれば、それとの系譜関係も必然的に検討しなければならないだろう。B類はAⅢ類と比べて装飾的であり、轡の序列では鏡轡の次に位置付けられる可能性（図9）が高い。杏葉轡を新たに序列化する目的でB類が創出されたとひとまず考えておきたい。

B類は鏡板内側の三葉形板が別造りから一体造りへ、立間との接合箇所が三葉形へと変化し、内側三葉形板の

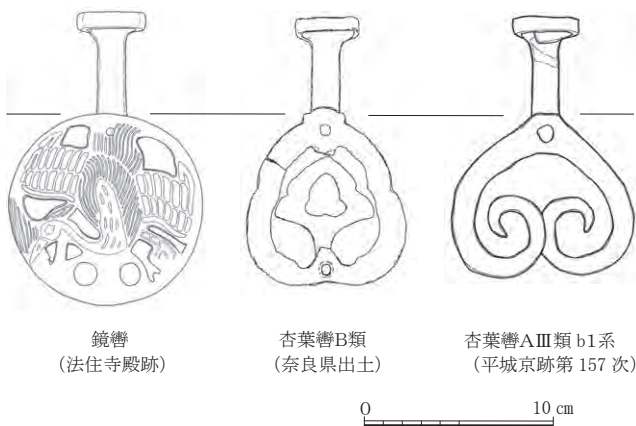


図9 壺付き立間鋳留轡の比較(1/4)

中央透孔等に刻み目のある金具を付加するなど装飾化が進行する。そして、小型品が現れ、伝世品を含めて鉄製あるいは銅製の鋳造品が製作されるなど多様化する様相を見せる。一方、AⅡ類a系・AⅢ類a系ともに同様の型式変化を示し、蕨手様の巻き上げが連結し一体化する。手向山八幡宮所蔵品の杏葉轡は、多様化したAⅡ類a系の一種として理解できるとともに、引手の連結に遊環を使用しない点で平城京跡第484次調査出土品からの系譜を想定できる。これらは大和での地域的展開を推測させる資料としても重要であろう。

IV まとめ

西大寺旧境内土坑墓S X 71出土腰刀については、3条あるいは2条1単位の条線装飾と櫃や栗形を備える格の高い外装の黒漆刻鞘腰刀と評価した。中世的外装を整え定式化していく腰刀の初現の様相を示しており、現状の資料でみる限り12世紀後半でその有無が区分される。

次に杏葉轡について、全体的な形状は類似するものの製作方法や個々の特徴が明らかに相違する平城京跡第157次調査出土例と第484次調査出土例を杏葉轡全体の変遷を追求する中で検討した。その結果、従来想定されてきた立間別造り例から立間一体造り例への単系的な型式変化については、修正の必要性があることを平城京跡第484次調査出土例から示した。そして、平城京跡第157次調査出土例は12世紀後半の中世的轡確立期に生じた馬具の量産化と序列化を示す資料と位置付けることができた。

腰刀と杏葉轡の変遷をたどると、どちらも12世紀後半に大きな画期が認められることは重要である。先述したように、大規模な戦乱が続く12世紀後半は、武装具や馬具の需要が大きく高まるとともに編成された武士団の序列化が進化したとみられる。そのような社会的変革の実態を示す有力な考古資料として腰刀と杏葉轡を再認識する必要があるだろう。

註

- 1) 概要報告書には杏葉轡出土の記載が抜け落ちている。
- 2) 佐山遺跡例は柄鞘の条線装飾を糸巻きで行うと報告されているが、鞘木に直接刻線しない点で鞘巻腰刀とは区別されるため、本稿では黒漆刻腰刀の範疇で理解しておく。
- 3) 柄頭・鞘尻にも無線刻部分が復元されているが、残存しないためにその有無は保留しておく。
- 4) 多量の腰刀が出土した静岡県堂ヶ谷経塚出土品（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2010）を中心とし、神奈川県永福寺経塚出土品（鎌倉市教育委員会2001）を含めて分析資料した。
- 5) 杏葉轡各資料の文献については、表1・2に記載する。

- 6) 実測調査の実施にあたり、手向山八幡宮上司延禮宮司のご快諾と奈良市文化財課岩坂七雄・石田淳のご協力を得ました。記して感謝いたします。
- 7) 津野は岡安光彦の呼称に従い橘金具連結法と呼ぶ(津野 2012)が、古代以降において多く確認できるのは岡安がその一種とする「江田船山型」連結法(岡安 1984)である。橘金具は遊環と同じであり、本稿では遊環連結法と呼びかえておきたい。
- 8) 茅ヶ岳歴史文化研究所の佐野隆から多くのご教示と資料の実見・実測についてご配慮いただいた。記して感謝いたします。
- 9) 『集古十種』馬具之部卷之三の「大和國奈良東大寺八幡宮藏唐鞍圖」に鞍手様の巻き上げが分離するAⅢ類a系とみられる杏葉轡が図示されているが、現在行方不明のために実物は確認できない。

引用・参考文献

- 大竹弘高 2012 「堂ヶ谷経塚出土の腰刀に関する予察」『静岡県埋蔵文化財センター研究紀要』創刊号
- 小笠原信夫 1994 『日本刀の拵』日本の美術No.332
- 岡田賢治 2002 「腰刀の時代—刀剣からみた中世社会—」『日々の考古学』東海大学考古学教室開設 20 周年記念論文集
- 岡田賢治 2004 「絵画資料にみる腰刀—その変遷をめぐって—」『幸魂—増田逸朗氏追悼論文集—』
- 岡安光彦 1984 「いわゆる「素環の轡」について—環状鏡板付轡の型式学的分析と編年—」『日本古代文化研究』創刊号
- 風間春芳 1999 「長野県内の杏葉轡 3 例について」『長野県考古学会誌』90 号
- 片山寛明 1987 「日本の轡—奈良時代～江戸時代—」『馬の博物館研究紀要』第 1 号
- 片山寛明 1992 「和式轡の展開」『日本馬具大鑑』第 3 卷中世
- 鎌倉市教育委員会 2001 『国指定史跡永福寺跡 遺構編』
- 熊本県教育委員会 2001 『灰塚遺跡(Ⅱ)』
- 倉本一宏 2022 『平氏—公家の盛衰、武家の興亡—』中公新書 2705
- 後藤守一 1937 『日本歴史考古学』
- 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2000 『志羅山遺跡第 46・66・74 次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告第 312 集
- 財団法人大阪府文化財調査研究センター 1998 『小畑遺跡』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第 36 集
- 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2003 『京都府遺跡調査報告書』第 33 冊
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010 『堂ヶ谷廃寺・堂ヶ谷経塚』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書第 219 集
- 財団法人古代学協会 1984 『法住寺殿跡』平安京跡研究調査報告第 13 輯
- 酒井元樹 2015 「中世の腰刀に関する形式的展開とその考察」『鹿島美術研究(年報第 32 号別冊)』
- 末永雅雄 1928 「経塚発見の腰刀に就て」『刀剣と歴史』第 206 号
- 末永雅雄 1931 「経塚出土腰刀の一形式に就いて」『考古学雑誌』第 21 巻第 10 号
- 末永雅雄 1970 「平安朝時代の外装」『新版日本刀講座』第 8 巻 外装編
- 鈴木一有 1999 「律令時代における轡の系譜」『下滝遺跡群 2』浜松市博物館
- 鈴木哲雄 2012 『平将門と東国武士団』動乱の東国史 1
- 津野仁 2012 「古代轡の変遷とその意義」『考古学雑誌』第 96 巻第 3 号
- 栃木県教育委員会 2011 『下野国分尼寺跡—重要遺跡範囲確認調査—』栃木

県埋蔵文化財調査報告第 334 集

- 奈良市教育委員会 1989 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 昭和 63 年度』
- 奈良市教育委員会 2006 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成 14 年度』
- 奈良市教育委員会 2010 『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成 19 (2007) 年度』
- 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編 1996 『草戸千軒町遺跡発掘調査報告 V 中世瀬戸内の集落遺跡』
- 福田豊彦 1995 『中世成立期の軍制と内乱』
- 松平定信編 1800 『集古十種』馬具之部
- 三重県埋蔵文化財センター 2000 『鳥拔Ⅱ』三重県埋蔵文化財調査報告 212 - 1
- 三好孝一 2001 「呑口形式から合口形式へ—大阪府小畑遺跡出土の腰刀例を通して—」『考古学論集』第 5 号
- 宮城県教育委員会 1980 『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ』宮城県文化財調査報告書第 72 冊
- 宮城県教育委員会・宮城県土木部 2005 『中野高柳遺跡Ⅲ』宮城県文化財調査報告書第 201 集
- 元木泰雄 2011 『河内源氏』

印刷・製本仕様データ

表紙：アートポストカード220kg/m²・マットpp加工
見返し：白色上質紙110kg/m²
巻頭図版：特アート紙135kg/m²
本文：白色マットコート紙104.7kg/m²
本文フォント：ヒラギノ明朝体
製本：縦開き・糸かがり綴じ

©2023 by the Nara Municipal Board of Education

No part of this publication may be copied or reproduced in any form without written permission from the copyright owner. Printed in Japan.

奈良市埋蔵文化財調査年報

令和2(2020)年度

ISSN 1882-9775

印刷 令和5(2023)年3月15日

発行 令和5(2023)年3月24日

編集 奈良市埋蔵文化財調査センター
630-8135 奈良市大安寺西二丁目281番地
TEL 0742-33-1821
FAX 0742-33-1822
URL <http://www.city.nara.nara.jp/>
E-mail maizoubunka@city.nara.lg.jp

発行 奈良市教育委員会
630-8580 奈良市二条大路南一丁目1-1
TEL 0742-34-1111(代)

印刷 株式会社 明新社
630-8141 奈良市南京終町3丁目464番地

ANNUAL RESEARCH REPORT
OF
ARCHAEOLOGY IN NARA CITY AREA
2020

CONTENTS

- I PRELIMINARY REPORTS OF ARCHAEOLOGICAL EXCAVATION IN
NARA CITY AREA IN 2020

- II REPORTS OF CONSERVATION AND MANAGEMENT FOR
ARCHAEOLOGICAL SITE AND MATERIALS IN 2020

- III THE RESEACH REPORTS OF ANCIENT RELICS AND TOMBS

NARA MUNICIPAL BOARD OF EDUCATION
2023

**ANNUAL RESEARCH REPORT
OF
ARCHAEOLOGY IN NARA CITY AREA
2020**

NARA MUNICIPAL BOARD OF EDUCATION , 2023